

大東亜戦争とは何だったのか

東南アジアの歴史と 日本の近代史

著者(未確認)

原典

<http://www.geocities.jp/taratooi2545/>

集成・印刷: 上田悦子 ueda@hiwaay.net

目次

大東亜戦争とは何だったのか？	1
カンチャナブリの泰緬鉄道から見える日本の近代史	1
泰緬鉄道は日本にとって悲劇の鉄道(インパール作戦を巡る不可思議)	14
泰緬鉄道を巡る歴史	21
泰緬鉄道とは	21
クワイ川鉄橋とは	23
泰緬鉄道建設までの大東亜戦争の輪郭	24
日本での軍部の台頭	27
経済のブロック化の発生と昭和恐慌の影響	30
日中戦争前後の中国の様子	32
東南アジアの歴史	36
日本とタイとの関わりの歴史の一側面	36
タイのカンチャナブりで有名な日本人	39
マレーシアの独立まで	42
インドの独立まで	45
ビルマの独立まで	49
インドネシアの独立まで	52
フィリピンの独立まで	55
パラオ共和国の独立まで	61
台湾の場合	65
大東亜戦争は偽善と独善との戦い？	68
ブッシュ大統領のヤルタ批判演説	69
付録	72

大東亜戦争とは何だったのか？

カンチャナブリでの日本の戦争の史跡を目にして、ショックを受ける方もいらっしゃるようですが、先の戦争に対する日本人としての正しい理解も必要です。ここに私の私見を掲載しますが、疑問点などがありましたらご指摘を賜りたいと思います。

カンチャナブリの泰緬鉄道から見える日本の近代史

かつて日本は江戸時代に鎖国政策をとったことは教科書に書いてありますのでご存知の方が多いと思います。西欧列強のアジア侵略の激化の前に、日本は鎖国によっていわゆるモンロー主義で日本だけでの繁栄を目指しました。

日本は、世界にも稀な純粋な農耕民族国家で、その農耕民族が治めている同一民族の国家は基本的に平和で、少数の異民族との和も尊び、異民族戦争の悲惨さも経験していません。このため、数千年前からアニミズムの神道を信じており、その中に自然崇拜があり、祖先との輪廻を信じている国民です。

日本は征服民族と非征服民族という区分けを経験していないために、和が重要であるという教えや地縁が大切という教えが定着しました。これは世界的にも日本にしかない現象で、それは日本には天皇家という王家しかないことがそれを証明していると思います。

これは封建主義体制を歴史的に経験したかどうかの差だと思われます。日本は江戸時代には藩制度があり、会社組織を経験しています。韓国や中国は中央集権国家体制であったため、多くの人が他人を動かす経営を経験していません。身内や個人的な信頼で経営するという小さな商店しか経験していないことが、現在の日本との大きな差になったように思われます。

葉隠れ思想なども同様だと思いますが、そのおかげで日本では会社に50年、100年という長きに渡ってのノウハウを貯めるようになっていきます。中国や米国では個人の能力で勝負していますが、個人の仕事期間はせいぜい30年程度のためにノウハウが30年程度で断絶するようになっていきます。この仕事に対する文化観が何と言っても日本の企業の強みなのです。

江戸時代は日本国内での経済や文化は藩制度の下で発達し、食料は増産され、色んな制度や研究も進み、日本独自

の文化が花開きました。しかし、西欧列強のアジア侵略が進む中で、遅れて参加してきたアメリカの黒船の来航によって強制的に日本は開国を迫られました。そして明治維新が起こったわけです。

日本国内的には、薩長土肥の若い政府指導者たちによって日本が侵略されないように富国強兵・殖産興業が目指されていきました。それまでの鎖国時代の閉鎖経済から拡大する市場経済への経済のシステムの変更が促進され、それまで日本独自に育ってきた文化の上に積極的に海外の文化に学び、欧米列強と太刀打ちできる軍事力や経済力をつけようとする涙ぐましい努力の時が続いていきます。

そして、西南の役に代表されるその後の日本の外交戦略を確定する結果となった内戦を経て、極東の植民地化を狙う対ロシア対策が日本の最大の脅威として認識され、その方向で日本は経済や軍事での小国から大国へとなるための努力が続いていきます。

ロシアの露骨な南下戦略の前で、脅威にさらされた日本は自国の防衛上の必要から朝鮮との連携を強めようとしませんが、それが原因で日清戦争に発展し、ついには日露戦争にまで突き進んでいきました。2つの戦争に勝利した日本は、その後、清の最後の皇帝溥儀を要して満州国の建国へと進んでいったわけです。

満州国の建国は5族共和を理想とする石原莞爾(昭和12年当時は関東軍参謀副長の肩書きで少将)の働きが大きかったのですが、その後、理想家である彼は疎んじられ、満州国は実務家の間で日本の生命線としての位置付けが大きくなり、日本の植民地化の傾向に進んでいきました。

そんなときに、1928年(昭和3年)6月4日午前5時30分、張作霖の乗った特別列車が京奉線(北京—奉天)の皇姑屯(こうこ屯)駅の近くに立体交叉している満鉄線の鉄橋上で爆破されるという事件が起こりました。これが「張作霖爆殺事件」です。

張作霖はもともとは馬賊で、祖父の代に満洲に移り住んだ漢民族です。ならず者で、若くして無学で粗野な強盗団の首領におさまっていましたが、陸軍大将児玉源太郎がみどころがあるとして、悪事を働かぬよう諭した上で、日本軍の協力者として満洲の治安に当たらせていました。というのも、当時の日本にはまだ関東軍はなく、日露戦争後にロシアから獲得した関東州租借地(遼東半島)と南満州鉄道(満鉄)の附屬地の守備をしていた関東都督府陸軍部があっただけだからです。

満鉄の線路が延びると、鉄道や日本人を匪賊や馬賊から守らねばならない。1919年(大正8)に関東都督府が関東庁に改組されると同時に関東軍として独立しますが、当初は独立守備隊6個大隊と内地から2年交代で派遣される駐割 1個師団の編成でした。日本国内では、当時は軍部の台頭を許さぬ原敬が首相でしたから、馬賊でも利用して鉄道や日本人を守るしか方法がなかったわけです。

そういうわけで張作霖を日本軍は満洲の治安におおいに利用しますが、思い上がった張作霖は悪政を繰り返して満洲

の住民を苦しめ、巨額の富と軍資金を手に入れ、ついには自分がシナ南方まで勢力を広げて「中国統一」を目指すほどになり、国民党の蒋介石軍との戦いに打って出るようになりました。蒋介石軍に反攻に出られたら満洲は戦場となってしまいます。そこで、現状を見かねた関東軍将校らはついに実力行使に出た、というのが張作霖爆殺事件(ソ連の陰謀節もあります)でした。

張作霖の死後、跡を継いだ息子の張学良は日本軍に対する恨みから敵であった国民党の蒋介石と結んで反日運動を起こし、自分たちが満洲でおこなった悪政に対する住民の怨嗟の声を日本側に向けようしました。

当時の猛威を振るったアジアでの植民地獲得競争、そして迫り来るロシアの脅威を前にして、日清戦争、日露戦争の原因は日本には1点の非もないと私は確信していますが、大東亜戦争に関しましてはいくつかの日本側の問題もあり、その辺は素直に認めて反省しなければならないと思っています。

大東亜戦争に関する日本側のいくつかの問題ですが、これは一方の当事者として反省することであって、相手国や国際事情などから考えると一方的に日本に責任があるととはとても思えません。あくまでも謙虚な気持ちで日本人としての反省というスタンスでの意見です。

そういう意味で当時の日本の状況を振り返ってみますと、1923年に首都東京を中心として関東大震災が発生し、甚大な被害が発生するという出来事がありました。その復興のために大量に震災手形が発行されましたが、その後遺症として日本では1927年には金融恐慌が起こってしまいました。不幸は続くもので、1929年10月にはニューヨークのウォール街での株の大暴落に端を発した世界大恐慌が発生し、またたくまに世界へ不況が広がっていきました。

日本国内の物価は急激に低下し、失業者は増大し、農産物の価格の下落率が特に著しいものとなっていました。そして、日本では1930年には冷害が襲い、1933年には干害となったために、兩年とも農作物は大凶作となってしまいました。そんな状況の時に、日本政府は旧平価のままの金本位制(1930～1931年)を採用してしまいましたので、日本は円高となってしまう、これがさらに日本の不況の足を引っ張ることになってしまいました。

金本位制採用の結果、国際競争力の弱くなっていた日本製品の輸出がさらに減少し、逆に世界同時不況の中でダンピングされた外国製品が大量に日本国内に流れ込みましたので、多くの優良企業までもが潰れるという日本の歴史上空前の大倒産が始まり、大量の失業者が街に溢れ出すこととなってしまったのです。こうした状況の中で大資本を持つ財閥は中小企業を吸収合併して肥大化していき、一方で政党政治への国民の支持は急速に失われていき、国民の期待を背負って軍部が台頭してくるようになりました。

同時に世界同時大不況への対処として、世界貿易面では欧米列強による経済ブロック化が始まりました。アメリカは1930年に高率関税を可能にしたスモム・ホーリー法を制定して、自国の市場確保の為に経済ブロックを形成しました。これに対抗してイギリスも類似な政策を採り、このようにして列国の間では国際経済のブロック化が進展していったために、日本製品は次第に輸出市場を無くしていくこととなりました。

このような背景の中で軍部の暴走の契機となったのは、天皇陛下による軍の統帥権の干犯問題の発生でした。1930年にロンドン海軍軍縮条約が日本政府全権によって結ばれますが、これは政府が天皇陛下の軍に対する統帥権を犯していると、野党が政府への批判を始めたのです。政治の場で、政治家自らが軍の統帥権は天皇陛下にあるという議論を展開したわけで、政党政治はそれによって自己崩壊していくこととなりました。

その結果、政治は軍の暴走を抑えることが困難になったために1936年には内閣内に陸軍大臣と海軍大臣のポストを設けることとなりましたが、これが結果的には軍の力をさらに増大させることになり、政府内での意見対立の際には首相は内閣総辞職しか陸軍や海軍への抵抗力は無くなっていくことになりました。陸軍も海軍もそれぞれが独立した機関であり、政府には軍に対する関与権は無く、さらに陸軍のトップは陸軍参謀総長で陸軍大臣はその部下にあたり、海軍のトップは海軍軍令部長であって海軍大臣はその部下という構造だったのです。

一方、それまで大変自由な思想の下にあった教育勅語は、1935年の改訂版から天皇陛下を神格化する傾向が出始め、その後次第に日本文化の強制というおかしな事態となっていきました。

話を戻しますが、大東亜戦争へ至った原因は大小色々ありますが、私は最大の原因は日本政府による南京攻略の決定にあると思っています。

1936年(昭和11)12月12日、中国の古都西安(長安)で国民党主席蒋介石が信頼していた配下の張学良に監禁されるという西安事件が起きました。一種のクーデターですが、これがその後の伏線となりました。中国の古都西安(長安)で国民党主席蒋介石が張学良に騙されて監禁されたのです。

蒋介石は抗日戦の前に、まず共産軍を掃滅して中国内部を統一するのが先決と考えており、日本との軽率な戦争への突入は自殺行為であることをよく承知していました。そして、全面的な抗日戦争への発展を出来るだけ回避して時間を稼ぎ、その間に産業および軍事力を強化し、日本との戦争が可能な国力を養成するという考えでしたが、無知でお坊ちゃまの張学良にはそんな蒋介石の深謀遠慮の戦略など理解できませんでした。

このようにして張学良は私恨から成安事件を起こしてソ連のスターリンに手を貸すことになってしまい、結果として壊滅寸前まで追い詰められていた中国共産党を救い、その後の国民党との国共合作のお手伝いをする役割を演じさせられてしまったのです。

日本軍に父を殺され、その仇を討ちたいと思うのに蒋介石は満洲事変では「不抵抗」を命令し、自分は命令どおり逃げてきたのに蒋介石は本当に抗日の意思があるのだろうか、いつも共産軍との戦いばかりで、おまけに自分の東北軍20万は共産軍と2度戦ってどちらも大敗し、2個師団が壊滅という惨憺たる結果になったのに、蒋介石は兵員の補充を行わずに消滅した師団を編制から抹消してしまった。もしかしたら蒋介石の意図は、『東北軍の共産党討滅が成功すればそれでよし、失敗しても東北軍を弱体化させることができる』と思っていたのではないか？蒋介石が自分を踏み台にしようとするな

らこっちにも考えがある。日本軍に勝てるのはソ連だ！スターリンだ。スターリンと手を組み満洲に凱旋したい！

苦勞と無縁に育ってきた『お坊ちゃん』の張学良は、自己中心で、国際的な視野も戦略もなく、このような浅はかな考えを持つようになりました。

ソ連の思惑は、台頭するドイツに対しての危機感で、そのためには満洲の関東軍が最大の脅威でした。日本とドイツが東と西から攻めてきたら広いソ連といえども危うい。これを防衛するためには支那本土に共産党を含めた「抗日政權」をつくりあげ、関東軍に誘いをかけ、南下させるように仕向ければ、少なくともソ・満国境が手薄になります。共産党を憎む蒋介石さえ落せば、あとは烏合の衆でどうにでもなると考えていました。

ソ連にとって一番困るのは、蒋介石が死んで支那の国内が混乱し、外国勢力が入り込むことです。そして、しっかりと中国共産党が組織固めをしてからならば蒋介石は不要になりますが、それまでは死んでもらっては困るのです。直前にソ・満国境で日本とソ連の戦闘「ノモンハン事件」というのがありましたが、あれはソ連が日本の現在の軍事力を確認するための事件であったとみられています。

1935(昭和10)年のコミンテルン第7回大会では、各国の国情に即した戦略戦術を採用することという方針のもとに、中国共産党に対しては、日本帝国主義打倒のための民族解放闘争をスローガンとして抗日人民戦線運動を巻き起こすことを命じ、それに従って中国共産党は8月1日付けで「抗日救国宣言」を発しました。一切の国内闘争を即刻停止して、全面的な抗日闘争を展開しようというのです。

そのためのカモが張学良でした。交渉能力に長けた周恩来が張学良に接近し、張学良に対してあらんかぎりの敬意を払って籠絡させました。周は学良に、西北軍と紅軍が東北軍に合流したあかつきには全軍こぞって学良を西北地域の王に推戴するであろうかのような幻想を抱かせ、学良は周との最初の会談で「見面礼」として2万大洋(当時の1元銀貨)と20万法幣(1935年以後、国民党政府が発行した紙幣)が贈られています。このように、周恩来によって張学良は簡単に籠絡されてしまいました。

蒋介石は西安事件で共産党との合作要求を受諾しますが、智略家で軍人としても優れ、現地に駆けつけた妻である宋美齡夫人も蒋介石とともに西安での死を覚悟して遺言状を書いて来ているくらいですので、蒋介石の意思を動かすだけの何かがこのときにあったようなのですが、これはその後の歴史の謎とされています。

翌年に発生する盧溝橋事件は、このときから用意されていたものと考えられます。関東軍と蒋介石が紛争を起こさずに国力を蓄えていることこそソ連の脅威であるからです。盧溝橋事件はあきらかに共産党の策略で引き起こされたとは現在では明らかになっています。しかし、当時の日本の軍人は単純にその挑発に乗ってしまいました。

西安事件の後、蒋介石は表に対日抗戦を叫びつつ、裏で国民党副主席の汪兆銘に日本との和平工作を進めさせ、また反共を信じながら、表では容共を説いていました。しかしその間、国民政府軍は上海、南京、漢口と日本軍の攻撃で敗

走を続け、重慶にまで追い込まれました。この状況下では、日本側の条件を呑んで和平を選ぶしかないので、それをすれば共産軍に蒋介石打倒の口実を与えます。そこで1939(昭和14)年、汪兆銘は蒋介石に対して「君は安易な道を行け、我は苦難の道を行く」との書簡を送り、汪兆銘は重慶からハノイに脱出して、以後、単独で日本政府との交渉を進め、日本政府の援助のもとに翌1940年、南京に新政府を樹立しました。

蒋介石も汪兆銘も共産党は信じていませんので、日本軍の優勢の前に何れかが生き残れば中国という国家が無くなることは防げるという考えから彼らの分裂は出たことなものでした。そこまで日本軍の攻撃で追い詰められていたわけですし、2人の師である孫文は「日中戦うべからず」との遺訓を残しているくらいですから、日本とは話し合いで解決できる可能性も信じていたのです。

このような時代の流れの中で特に日本側が最大の判断ミスをしたのは、少し事前説明が長すぎましたが1937年の南京攻略であったと私は思っています。

1937年12月7日、ドイツは日本陸軍とのこれまでの深いつながりと「日独防共協定」もあるために日本の戦力消耗は望んでおらず、停戦への和平交渉を引き受けてくれました。トラウトマン和平工作と呼ばれているものです。蒋介石は上海戦に破れて南京危うしという非常事態を迎えて、アメリカ大使ジョンソンを招いてアメリカに助けを求めました。そして、ドイツ駐日大使ディクセンが当時の広田外相に面会して蒋介石の国民政府は和平を望んでいるとの覚書を提出しました。

その少し前の同年7月7日に北支事変が発生したため、北平、天津に居住する邦人1万2千人の保護のために5個師団の派兵を日本陸軍は決めました。その後、上海戦で勝利し、南京もここ数日で攻め落とす勢いに日本軍はあったため、軍部だけではなく政府までも判断を誤り、12月10日には南京総攻撃が開始され、13日には南京は陥落することになりました。7月29日の通州虐殺事件(日本人虐殺事件)での怒りが背景にあったものと思われます。首都南京に危機が迫っているからこそ、蒋介石も恥の上塗りを恐れて日本と妥協できるという「講和の潮時」であり、相手の面子を立ててこそ交渉はうまくいくのに、完膚なきまでに叩き潰されてしまっただけで恨みと徹底抗戦が残るだけではありません。そもそも日本は邦人保護のための威嚇としての軍派兵でしたが、それが本格的な日中戦争へと発展していったのでした。

日本政府は南京攻略後に駐支大使トラウトマンに第2次の調停を行ってもらいましたが、国民党政府には無理難題な条件だったことと交渉のタイミングを失っていたこともあって蒋介石がソ連に援助を求めたのは当然のことでした。日本海軍も参謀本部も支那との戦争は終わりにしたいと思っていましたが、蒋介石の明確な回答が得られなかったために当時の日本政府は和平交渉を打ち切ってしまいました。

戦争のプロの集団である軍人が今こそ戦争を止める潮時と考えているのに、当時の近衛首相は「…以後国民政府を対手とせず」と日本政府の声明を発表する事態となり、このように文民である政府が「暴走」してしまったため、以後は停戦の交渉相手が無くなってしまいました。この結果、その後の日本は中国との泥沼の戦争にはまり込んでしまいました。

もう少しわかりやすく当時の時代背景を説明しますと、基本的には第1次世界大戦後に日本政府の世界観が欠落してい

る中でアメリカ発の世界大恐慌が起こり、欧米先進諸国は経済のブロック化政策に転向していきます。そこで日本は満州国を日本の経済ブロックとして建設していきますが、これは先進諸国がこれ以上の植民地化政策を止めて共存を図っていくという国際条約に違反することとなりました。そこでリットン調査団が派遣されて、その後の国連決議で日本は非難(タイ国は棄権)されますが、その後日本は国連を脱退することになります。

満州国建国は国連決議では非難されましたが、欧米列強の腹つもりでは「滑りこみセーフ」でした。しかし、考え方が実に単純な日本政府は直情的な判断をしてしまいました。脱退はしないで、辛抱強く、是々非々での粘り強い対応をすべきだったのです。ここから日本という国の歯車が狂い始めました。

日英同盟はすでに1922年に破棄されていますので、膨張を続けるソ連の脅威を前にして日本は対ソで利害が一致するドイツと日独防共協定を結ぶこととなります。翌年にはイタリアが加わり、日独伊防共協定となりました。国連を脱退して世界の孤児となった日本は、このような同じ境遇にある国と手を結ぶしかソ連の脅威に備えることはできなかったのです。

しかし、この結果としてソ連にとっては東と西に軍事力を分散しなければならず、ソ連は満州国境近くでノモンハン事件を起こして日本の軍事力を確かめますが、その結果として日本を脅威と感じたソ連は中国共産党と組んで日中戦争への道を画策し始めます。

このようにして日本はまんまとスターリンの罠にはまったわけで、ソ連は日本を中国との泥沼の戦争へ引きずりこんで日本を疲弊させ、自分はドイツとの戦争準備のみに専念することに成功したわけなのです。

1939年9月1日に第2次世界大戦が勃発し、1940年9月27日には日独伊三国同盟が締結され、1940年10月にはドイツはルーマニアに侵攻します。そして1941年4月13日には日ソ中立条約が締結され、1941年6月22日に独ソ戦争が開始となっています。この流れから見えるものは、日本の国際戦略のなさだけにしかすぎず、ソ連の罠にはまって当時の指導者が時代に振り回されて大東亜戦争へ至ってしまったことが容易に伺えます。

このような経過を経て、蒋介石政権の求めに応じて英米は大東亜戦争勃発前から大量の兵器や物資の支援を行い、ソ連は中国共産党を指導し、国共合作時には大量の顧問団を送り込むようになりました。そして日本は汪兆銘の南京政府を支援していったわけです。ソ連は日独が手を結んでソ連攻撃するのを極端に恐れていましたので、日中戦争に日本を引きこんで極東(満州)からの日本の軍事的脅威を軽減し、ドイツのみとの戦いに備えなかったのです。この戦略上の流れが、当時の日本政府には見えませんでした。

その後、英米による援蒋ルート(香港)の封鎖のために、最初は香港ルートを閉鎖し、続いて日本軍は北部仏印(現在のベトナム)に援蒋ルートの封鎖が目的の平和進駐を図りましたが、軍部の暴走による強行進駐となったためにアメリカは日本に対する屑鉄・石油の輸出を禁止することとなりました。石油が止まって困ったのは海軍で、そこで今度は蘭印(インドネシア)の石油を狙い、昭和16年7月、南部仏印への進駐を図りました。これらの行動がアメリカの逆鱗に触れ、大東亜戦争の勃発が避けられなくなってしまったのです。

日本は米英との戦争は必死な状況に陥りました。ドイツと戦うソ連にとって、日本が満洲国境から攻めてくることほど怖いものはありませんが、米英との戦争は必至な状況となりましたのでドイツ戦に安心して専念できるという、まさにソ連の思い通りの状況に戦局は展開していきました。

軽率な南京攻略(トラウトマン工作の失敗)、そしてむやみに戦局を広げて南進すれば本当の敵に対して備えが手薄になることは軍人の常識ですが、近衛首相や軍の「統制派」の人々の意見によってその常識が覆され、日本は勝てない戦争へとあまりこんでいってしまいました。

何でこんなバカな状況にはまり込んでいったのか、その答の1つと目されているのがゾルゲ事件と呼ばれているものです。日本でスターリンの指示を受けたゾルゲ諜報団の摘発が行われたのは1941年(昭和16)10月18日、そして事件が公表されたのは昭和17年5月16日でした。元朝日新聞の記者だった尾崎秀美(ほつみ)は中国通として近衛首相のブレーンとなり、色んな政策提言をしますが、ソ連のスパイであるゾルゲ諜報団の重要な一員だったのです。

彼らの働きで近衛首相に政治判断を誤らせ、日本軍を「南進」させることに成功した報告をゾルゲから受けてスターリンは狂喜したそうです。

ここからはアメリカ側の目線に移しますと、戦前の日本経済はアメリカ、イギリス、オランダ3国からの軍事必需品の日本への供給が全輸入の85%を占めている状態でした。そして、アメリカは公式的には満州事変と日華事変に反対し、日本への戦争関連物資の輸出規制を徐々に強めていきましたが、実際には原料綿、屑鉄、石油などの輸出は、日華事変以降急増しているのが事実です。

日本は過剰な人口、日本人移民を入れない世界の障壁(黄禍論)、対外貿易への過度の依存、国民に雇用と食糧を保証するための物資輸入、そのために必要な輸出の拡大、という状況の中での欧米諸国による経済のブロック化の中で、日本の生き死にかかわる問題の渦中にいました。しかし、満州に日本が戦略拠点を確保しますと、日本帝国圏(韓国と台湾)と満州、華北からなる日本の経済ブロックが完成し、日本は経済の安全保障の確立の計画が現実のものとなってしまいます。

イギリスとアメリカは日本のこのような政策に反対でした。そのために英米は蒋介石軍を援助し、すでに始まっていたヨーロッパでの第2次世界大戦の目処がたつまで日中戦争を続けさせ、日本が莫大な財政的損失を出してアジアで威信を失うまで日中戦争を続けさせたかったのです。そのために、当初は日中双方に、つまり日本に対しては正常な経済活動としての貿易に応じていたのです。つまりアメリカは、日本が米・英・欄などに資源を依存しているときは脅威と感じていなかったのですが、満州国を建設し、独立した経済圏を日本が確立させる方向に向かい始めたことに脅威を感じて、日中戦争に手を貸すことによって日本の疲弊を狙うと同時にヨーロッパで勃発していた第2次世界大戦の終息までの時間稼ぎもしたかったわけなのです。この時点で、スターリンと利害が完全に一致していました。

ところが、日本は泥沼化する日中戦争解決のために英米から中国の国民党への3本の軍需物資補給路の封鎖を進めていきます。最初に香港ルートを開鎖し、続いて仏領インドネシア(現在のベトナム)ルートの閉鎖に注力しますが、ここで浅はかな日本軍の一部の暴走により一気にフランスと緊迫し、日本はその約1年前に日独伊3国同盟の締結をしていたために、連合国側はその後、日本に対する経済封鎖と続き、この時点から日中戦争が大東亜戦争へと拡大していく道が敷かれてしまいました。英米にとっては日本の脅威は最高位に達してしまっただけです。

この結果、英米にはヨーロッパで起こっていた第2次世界大戦のあとに日本に対する問題に処しようとする余裕を無くさせてしまいました。ソ連にとっては願ってもない方向へと歯車が動き出したわけです。そして、中国共産党にとっては日中戦争時代の第2次国共合作のおかげで、国民党の影で力を蓄えていくことができました。その結果、ソ連はドイツとの戦いに専念でき、中共は戦後に国民党を倒して社会主義国家を建国できるほどの力を蓄えることができました。

大東亜戦争とは、日中戦争が拡大して米英の連合軍と戦うようになった戦争の総称として日本側が命名しましたが、第二次世界大戦とは、「欧州戦線とアジア戦線」を総称した用語で使われていますし、太平洋戦争は戦後GHQが命名した第2次世界大戦下でアジアで行われた日本との戦争のことを指しています。ですから、私は第2次世界大戦と大東亜戦争は異なる性格の戦争であったと見ているのですが、カンチャナブリで目にするお土産用の英語の本や各メモリアルなどで目にする英文の説明では第2次世界大戦という目線からの説明ばかりですので、どうしても先の戦争観が日本人の視点とは異なってしまいます。

第2次世界大戦後、アメリカはソ連との冷戦時代に突入しますが、これは戦前の日本が自らの全近代をかけて実践してきた政策と同じことであり、それ以前に日本を支援したかつての米英両国の政策担当者が正しかったとすれば、ソ連を抑止し、「混乱した」地域に秩序をもたらす、中国における「共産主義の脅威」と戦う行動拠点を確保するために満州を緩衝国家にしようとした日本を支援しなかった1931年以降の米英両国の政策担当者は、犯罪的に無能だったと見なしているアメリカの知識人がいることもアメリカの事実であり、そして懐の広さです。

対日関係をパールハーバー攻略とシンガポール攻略まで悪化させ、その結果、アメリカ人の生命と財産ばかりでなく、日本という極東の同盟国を失って、戦後は対共産主義の砦として日本の面倒を見なければならなくなってしまった当時の政策担当者の無能ぶりは、犯罪をはるかに超えたものであるという指摘もアメリカの知識人の中にはあるくらいです。

余談ですが、中華人民共和国の誕生にしましても、日本降伏の4ヶ月後、1945年12月、マーシャル(1947年1月、国務長官に就任)はトルーマン大統領から中国における全権特使に任命され、中国に13ヶ月滞在しました。マーシャルは国民党軍と共産党軍に停戦を持ちかけ、蒋介石が大幅に譲歩して停戦が実現しました。しかし、翌1946年4月には、共産党軍が停戦協定を破り、長春を陥落させました。蒋介石軍は長春を奪い返し、共産党軍は北に遁走することになります。

マーシャルは、共産党の要請を受けて、蒋介石と交渉し、再停戦を実現させましたが、その後も共産党軍はゲリラ活動を続け、ダムや橋の爆破、鉱山や工場への攻撃を続けました。そのような状況にも関わらず、優勢な国民党軍を抑えるべく、マーシャルは武器や弾薬の通商禁止措置を取りましたが、その一方でマーシャルはソ連の共産党軍への支援は見えて見

ぬふりをしていました。

米国は国民党軍に対して軍事物資の購入の道を閉ざし、国民党軍が共産党軍をもう少しで撃破できそうになると、常に「停戦」と称してストップをかけるという不思議な状態が続いていました。蒋介石の勢力は1946年11月頃がピークだったようで、1948年3月には米国議会で蒋介石支援を求める声が高まり、2億75百万ドルの経済支援と1億25百万ドルの軍事支援を行う案を議決するに至りました。

しかし、マーシャル国務長官とアチソン国務次官の牛耳る国務省は、早期実行を求める中国大使の懇請にもかかわらず、2ヶ月もその実行を棚上げにし、1948年6月にある上院議員から痛烈に批判されてようやく重い腰を上げましたが、それでもシアトルから最初の船積みが行われたのは11月9日だったために、この間に国民党軍の敗北は決定的となり、共産軍は翌1949年4月に首都・南京を制圧して同年12月には中華人民共和国の建国を宣言するという事態に至りました。

共産党軍の戦力はソ連のスターリンの武器援助によるところが大きく、当初は蒋介石の国民党にもスターリンは軍事援助をしていましたが、最終的にはスターリンの軍事援助を共産党軍を通すことで一本化に成功しました。そしてさらに、アメリカでも様々な謀略を展開していたようで、その結果としてルーズベルト政権の側近らに中国シンパの共産党員が多く、かれらが米国の外交をねじ曲げたという指摘もあります。(現在の状態もそれに酷似していますね。)

この結果としてその後、共産主義勢力の拡大を抑えるためにアメリカは朝鮮戦争まで行わねばならず、このアメリカ政府の対日戦後における中国への対応の不思議さは私には理解できない部分が多すぎます。

余談ついでに朝鮮戦争の経過についてお話しますと、1945年8月15日、日本は連合国側に降伏し、1945年9月2日にポツダム宣言の条項を誠実に履行することを約束した降伏文書に調印することになりました。

日本の降伏により、ソ連は慌てて朝鮮半島を南下し、38度線を境に日本領であった朝鮮半島の北をソ連軍が、南をアメリカ軍が統治することになりました。

ところが朝鮮半島ではその後、北の金日成、南の李承晩、などが入り乱れての政争が起こり、これに軍隊の反乱が拍車を掛けたために各地でクーデターや争乱が頻発しました。

このような状態が続いていた時、1950年1月12日にアメリカのアチソン国務長官が、アメリカの防衛線は、フィリピンー沖縄ー日本ーアリューシャンを結ぶ線だと発言しました。失言だといわれていますが、真意ははっきりしていません。

「朝鮮半島は含まれていない！」ことに注目した北朝鮮の金日成は、1950年6月25日、ソ連の支援を受けて南北統一に向かって動き出しました。韓国軍は軍隊とは言えない状態で、逃げまどう民衆と同じで敗走を重ね、韓国政府はプサンまで撤退しました。

アメリカはこの事態に激怒し、国連を動かして国連軍を仕立て上げ、9月15日にアメリカは仁川上陸を決行します。北朝鮮とソ連と中国は、アメリカの了解事項だと思っていたから驚きました。国連軍は北上し、38度線を越えてもさらに進軍を続け、10月26日には元山付近に国連軍が上陸しました。このようにして、11月24日には北朝鮮のほうで事実上の敗戦に直面してしまいました。

この北朝鮮を支援したのが建国直後の中国でした。志願人民軍を朝鮮半島北部に集結させて一気に攻め込みます。戦線は再び南下し、翌年の51年1月25日にはソウルを越えた地点まで押し返しました。国連軍は態勢を立て直し、再び戦線を北へ押し戻しますが、二転三転したあと53年7月27日に休戦協定が成立することになりました。このようにして現在に続く38度の軍事境界線を挟んで南北に非武装地帯が設けられたのです。

休戦協定は、ソ連の提案で北朝鮮・中国軍と国連軍の間で会談が行われた結果です。韓国は戦争遂行能力がありませんでしたが、それでも「単独北進」を主張する韓国の意見はこの場では排除されての休戦協定でした。

このような結果としてその後の国際情勢が展開していきますが、その後米ソ冷戦に突入し、アメリカはソ連の脅威を封じ込めるためにニクソン政権時代には共産中国とまでも手を結びました。その後、中国が成長してきて脅威となると、今度はこちらを封じ込めようと戦略を練っています。

日本は戦後、外交や安全保障を全部アメリカに任せてきましたが、田中角栄首相のようにアメリカ抜きでアラブや中国と日本独自の外交をしようとする首相も出てきました。アメリカに逆らう首相としてはその後、細川首相や橋本首相などもいましたが、田中首相はロッキード事件で失脚し、細川首相や橋本首相の時代は日米関係では対日批判が大きくなっていました。逆に、親米の首相（例えば中曽根首相や小泉首相）による政権の時代は大変に長持ちし、そして政治が円滑に流れています。

最初に戻って泰緬鉄道のお話ですが、日中戦争が勃発した1937年を境として、中国共産党軍にはソ連から旧式の戦車や高射砲などが援助物資として供給されるようになり、国民党軍には米英からの軍需物資の支援が始まりました。先にも述べた経過を経て、中国への3本目である米英からの最後の物資補給路(ミャンマールート)を封鎖して日中戦争に終結の方向性を見出し、太平洋戦争に関しては東南アジア諸国を独立させ、インパール作戦でインドを独立させ、このような状態で連合国との対等な講和に持ちこんで大東亜戦争の終結を促そうという戦略を日本軍は考えました。この戦略は当初は大変にうまくいき、多くの東南アジア諸国から歓迎されました。

しかしまもなく、日本軍のミッドウェー海戦の大敗北を転機に日本の太平洋戦争の戦局は次第に不利に傾き、ミャンマーへの海上からの物資補給も困難となり、そのために陸上からの軍需物資補給路として無理に無理を重ねて建設したのがカンチャナブリを通過する泰緬鉄道でしたが、これは日本の敗戦によって悲惨な戦争の歴史の証人として残り、その悲惨さから現在も多くの観光客を集めているわけです。しかし、カンチャナブリ県内各地の史跡にありますのは第2次世界大戦としての連合国側の戦争観からの説明ばかりで、日本側の視点からのものはありません。

少し補足しておきますと、日中戦争に関しては日本の陸軍は敗北感はなかったと思います。太平洋戦争は大負けしましたし、日本本土も戦禍が及ぶにあたって天皇陛下は終戦の決意をされましたが、中国戦線での日本兵には終戦の決意は敗北感が無かっただけにわだかまりが多かったと思います。しかし、それも当時の阿南陸軍大臣の割腹自殺による現地の日本兵への強い呼び掛けで日本は速やかに降伏をしました。このような終戦時の意思の統一の仕方も日本的な特徴と私は思っています。

私は大東亜戦争には二重の性格があったと思っています。1つは米英との帝国主義間の戦争という側面で、もう1つはアジア諸国に対しての侵略戦争という側面です。この後者の侵略戦争という側面は、当時の大アジア主義のスローガンを利用しながら、「脱亜論」の福沢諭吉につながる近代合理主義の考え方で戦争指導者が総力戦を遂行するために利用したと考えられています。しかし、現実には前線で戦った兵隊たちは純粋に大アジア主義を信じて、現地でその国の欧米植民地からの解放のために尽力した人たちが多かったことも事実です。東南アジアには、日本に感謝している国が多いのはそのためなのです。

そういう戦略での大東亜戦争の最後の切り札がインパール作戦でした。そのために、泰緬鉄道は日本の不利な戦局を打開する切り札としての逆転勝利の可能性を信じて必死に作られたという背景もあるのです。そのために日本軍鉄道隊は必死で作業をしましたが、結果的には「死の鉄道」とも呼ばれるように作業現場では悲惨な結果が続出していました。

当初、日本は戦争の詔勅で「自存自衛」のための戦争としていましたが、後には大東亜宣言を出して、アジア諸国の解放・独立を目的に変更するという複雑な戦略での戦争となりました。と言いますのは、どの段階で戦争をやめるかという目標が見えなかったからなのです。

第2次世界大戦や大東亜戦争、そして太平洋戦争、日中戦争などの呼び方の違いで、私にはそれぞれの戦争観は異なってしまうのですが、このような歴史を思い出すたびに、インパール作戦や泰緬鉄道建設という無謀にも始めてしまった太平洋戦争のわずかな勝機のために、現地で国のために尽力されて亡くなられた日本軍の方々や、そのために利用された戦争捕虜の方々、そしてアジア各地から集められた労働者の方々の気持ちを思うと、クワイ川鉄橋へ出かけるたびに私は黙祷せずにはいられなくなるのです。

日本の行動は、西安事件や南京攻略、そして南進論への転換など、ゾルゲ事件で代表される情報戦やソ連の権謀術数が背後で強く関わっていたようで、文官である当時の日本政府が軍の「統制派」の意見(背後にはゾルゲを中心とする共産党がいました)に乗せられて大東亜戦争への道へと踏み出してしまいました。

日本は1929年のジュネーブ条約に調印しますが、批准は軍によって阻まれました。軍は「捕虜になることは恥じ」と兵隊を教育し、1941年には東條英機陸軍大臣の下で野戦服務基準としての『戦陣訓』が施行されます。ジュネーブ条約を無視しての「戦陣訓」に見られる生命軽視、主体的思考の否定という思想が、その後の戦争捕虜の扱いを巡って様々な問題を生み出していきました。

日清日露戦争のころには存在した「名誉の捕虜」などという美談は、1937年度で小学校教育からは姿を消し、教育現場は次の3つの色合いで染められて行くことになりました。

- ・天皇制軍国主義体制による国民統合と、それを正当化するイデオロギーとしての皇国史観。
- ・植民地支配を正当化する国民意識、アジア諸民族に対する蔑視観。
- ・国民の人権を制限し否定することを当然とする天皇制国家。

今までに説明してきた大東亜戦争に至った過程で、国として大きな危機が差し迫ってきたときに上記のような日本全体としての体制や思想に急変していきましたが、このようなある条件下では大きくぶれやすいという日本人としての本質を考えると先の戦争に対する本当の反省だと私は思います。また、大アジア主義を戦術面として利用して掲げ、南方進出を図りましたが、このようなやり方も反省する必要がありますし、開戦時に日タイ不可侵条約を一方的に破ってタイ南部へ強行進駐(タイ領土内通行承認が出る前に上陸しました)した日本のやり方も強引過ぎます。

しかし、上記のような思想や体制の変化にも関わらず、それに逆らって武士道の精神や明治人の気骨でアジアの人々に歓迎される接し方をした日本人も少なからずいました。それが現在でもアジア地域で旧日本軍が尊敬される温床となっている一方で、上記のような体制下で残虐な行動をしたケースがあったのも事実です。

泰緬鉄道の建設に従事されたオーストラリアの元戦争捕虜のアーネスト・ゴードン氏は、氏の著書の中で人権の感覚について次のように述べられています。

「私たちは日本兵が俘虜に対して残酷であることを体験してきた。それが何ゆえにであるということをいまはっきり見てとった。日本軍は自軍の兵士に対してもこのように残酷なのである。...(負傷兵)彼らは死を待つ人々であった。使い果たされた消耗品であった。戦争の廃棄物であった。」

国と国との話し合いが外交であり、外交で解決できないときに戦争となっていますが、戦争に対しても一定のルールがあり、そして倫理観があります。カンチャナブリの泰緬鉄道は、外交の失敗というよりも未熟さが原因であり、国際ルールの欠落や日本人としての倫理観が麻痺していた結果の汚点として、後世にその建設の歴史を伝え続けています。

外交は軍事戦略と経済戦略の土台の上に行う必要がありますが、現在の日本は軍事戦略はアメリカに依存しています。このような状態ですから、日本の近代史を正しく学ぶことは過ちを繰り返さないためにも必要なのです。

以上、日本人が過去の戦争の歴史に反省し、未来に何を活かすべきか、そのことについて考える参考意見として掲載しましたが、読者の皆様の参考意見をお聞かせ願えますと有り難い次第です。そして、ドイツ人のシュタインという方は、「世界の文化はアジアに始まって、アジアに帰ってくる。それはアジアの高峰日本に立ち戻らねばならない。我々は神に感謝する。我々に日本という尊い国を作ってくれたことを・・・」と日本を賛美されていますが、私見は前段で述べましたので読者の皆様のこの言葉の意味することと考えることについてもご意見を賜れば嬉しい次第です。

泰緬鉄道は日本にとって悲劇の鉄道(インパール作戦を巡る不可思議)

私は持論として、先の大東亜戦争は欧米列強のアジア植民地獲得競争の脅威の前に、日本の政治も軍も当時の日本の政治システムの欠陥から暴走をしてしまい、そして日本政府の適正な判断能力の欠落が大きいですが簡単に相手の畏にも引っかかって日中戦争を始め、大東亜戦争までズルズルと拡大させていってしまった、と理解しています。対戦相手国である蒋介石の中国と不本意にも始めてしまった戦争ですので、これに関しては明らかに日本の方に非があると考えていますが、その辺の詳細に付きましては、私のホームページ「タイ&カンチャナブリ」で掲載していますのでそちらをご参照ください。

日中戦争の本格的な入り口は南京攻略でしたが、日本の政治的貧困さから不本意にも戦争が拡大していった、拡大した戦争の最終的な出口となったのはインパール作戦でした。しかし、そのインパール作戦は問題だらけの作戦でした。

日本が大東亜戦争と命名された米英との拡大した戦争に踏み切った大きな要因は、重慶の蒋介石政府の打倒にありました。日中戦争を行っていた日本は、当時の国際法でも禁止されていた米英の中国に対する軍需物資支援ルートを、香港ルート、南仏ルート、シンガポールルート、フィリピンルートと封じてきましたが、その最後の目標となったのが雲南・ビルマルートでした。

大東亜戦争が始まりますと、タイは日本の圧力の前にタイ国内の日本軍の通過を承認するという形で日本軍に協力しましたが、この当時のアジアでの独立国は日本とタイだけでした。タイ国王の柔軟な外交力も大きかったですが、仏印を植民地にしたフランスとインド・ビルマを植民地にしたイギリスが国境を接してトラブルを起さぬように「緩衝地帯」としてタイ国を置いていたのがタイ国の独立が維持できた主な理由とみられています。

初期には、戦局を優位にするためと、資源の確保のために広範囲に日本軍は拡散しますが、あくまでも最終目標は雲南・ビルマルートの軍需物資支援ルートを封鎖して中国を孤立させることにありました。米英に対しては、日本にとっては自存自衛のための戦争の拡大であり、そのために日本軍は中国大陸には100万人の軍隊を釘づけにしたままでの戦局拡大でした。

日本軍はタイ国内の日本軍の通過承認を得てビルマへの侵攻を図りますが、タイとビルマの国境は天然の要塞であり、そのためにイギリスはこれを利用してシンガポール経由でラングーンへ至る海路を活用させることで利権獲得を狙い、そのためにわざとこの地域を不便にしておいたという事情もあったようです。

蒋介石軍はこの支援ルートを守るために雲南省から10万の兵を派遣し、英印軍はラングーンを中心に日本軍が進軍する予想地点を南部ビルマと見て、サルウィン河付近で戦車部隊を率いて日本軍を待ち受けていました。しかし、日本軍はビルマ最南端の国境の平坦部分から進入すると見せかけて、大部分の兵を「象が通る道」がある北の山岳地帯の国境から道路を整備しておいて一気にビルマ国内に進入しました。沖中佐率いる騎兵隊による陽動作戦が行なわれ、最南端の国境を突破してタボイを占領し、その後は北上して「象の道」から進攻してくる第55師団と合流することになります。「象の道」

からさらに進攻してきた主力第33師団は、日本軍得意の夜襲をかけて勝利し、勢いがある日本軍はわずかの兵で昭和17年3月8日にはビルマの首都ラングーンを陥れました。

イギリスはインド人にビルマ支配をやらせる間接統治の政策をとっており、そのためにビルマ人は圧制に苦しめられていたために日本軍は歓呼の声で迎え入れられました。ビルマ人のビルマ建設を助ける聖戦と日本軍は声明を發しましたので、長年苦しんできたビルマの人々は日本軍にあらゆる援助を惜しみませんでした。飯田軍司令官は軍政を布告し、「ビルマ人による中央行政機構」の設立を約束し、そして昭和18年8月1日にビルマは念願の独立宣言をすることになります。

問題はここからで、ビルマは一応の安定を保ちましたが、こののち英印軍は必ず体勢を立て直してビルマを取り戻そうと攻めてくるでしょうし、蒋介石軍もすべての軍需物資支援ルートを閉ざされて黙ってはいるはずはありません。援蒋支援ルートを閉ざすのが、もともと日本のこの戦争拡大の目的であったはずですから、ならばビルマを平定してイギリスから一応独立させ、雲南・ビルマの援蒋ルートを閉じた時点でこの大東亜戦争の目標を達成したのですから、ここが講和の潮時だったはずですが、そのような動きは一切現れず、この後日本は悲惨な運命に向かって吸い寄せられていくことになります。

その少し前、日本軍はミッドウェー海戦での大敗北と、ビルマへの補給ルートが海上と「象の道」だけであることから、南仏のサイゴンに駐屯する南方総司令部とを結ぶ補給ルートを早急に作らなければ、海上封鎖をされ、人海戦術で「象の道」を蒋介石の重慶軍に塞がれますと、ビルマの日本軍は袋のねずみとなるために、新しい補給路の確保としてタイとビルマを結ぶ泰緬鉄道を建設することが決定されることになったのです。

バンコック・シンガポール線の間駅「ノンプラドック」から、クワイ・ノイ川の溪谷に沿って263キロを走り、国境を越えてからさらに152キロを西進して、ビルマの古都モールメン市の南方タンビュザヤット駅に達する415キロに及ぶ鉄道建設で、タイのノンプラドックからは1942年6月に、ビルマのタンビュザヤットからは1942年10月に工事が開始され、戦争捕虜たちと現地人労働者を大量に投入して1943年10月17日には全線開通させるという脅威的な作業となりました

米・英・支、三軍の総反攻が近い将来ビルマにおいて加えられることが予想されており、ミッドウェー海戦での大敗北でビルマへ至る制海圏は無くなっていましたので、一刻も早い鉄道の完成が要求されましたが、それにしましても人跡未踏の密林や難所を通過する鉄道は大変な難工事となり、過労や栄養失調、風土病などで多大な犠牲者を出し続けながら完成を急がれた泰緬鉄道は、現在では日本軍の虐待行為の史跡として有名な観光名所となっている何とも皮肉なところとなっています。

しかし、この鉄道のおかげで陸の孤島状態であったビルマ人たちは大喜びし、この鉄道のお蔭で日本軍への兵や物資の大量輸送も可能となり、戦争末期においてはビルマからタイに後退した日本軍はこの鉄道がなかったら全滅したのは間違いありませんから、日本人にとりましては何とも複雑な心境にさせられる鉄道ではあるのです。そして、インパール作戦の敗北からの退却戦の中で、ビルマからチェンマイ方面に山越えで逃げた兵士たちの多くが力尽きて死に絶え、そのために白骨街道などと呼ばれた道がこの地域にあるのはそのためでもあるのです。しかし、今なおビルマ戦線の日本兵約3万5千人が「未帰還」とされ、遺骨は現地に放置されたままになっているも事実です。

インパール作戦は、1944年3月8日に開始されました。第15軍隷下3個師団(第15、31、33師団)を主力とする日本軍が3方面からビルマから国境を越えてインドのインパール目指して急襲する作戦のことです。

もともとビルマ国境を越えてインド東北部に進攻しようという構想は、1942年8月ごろに南方軍が参謀本部に進言していたようですが、寺内南方軍総司令官指揮下の第18師団長・牟田口中将は北部ビルマの困難な地形を指摘して反対を表明したために参謀本部が諦めていた案だったようです。しかし、1943年1月末、英軍のウィンゲート少将の一団がインドから山越えてビルマに攻め込み、日本軍の手薄な西ビルマの鉄道破壊作戦が行なわれました。1943年3月27日にビルマ方面軍が新設され、方面軍司令官に河辺正三中将が就任し、牟田口中将が第15軍司令官に昇格しますと、捕虜からそのジャングル越えの方法を聞いた牟田口中将はインパール作戦を現実味のあるものだと考えるようになって現実の作戦を立案します。そして、その作戦のことを知ったインド義勇軍を率いるチャンドラ・ボースのインパールを自由政府の根拠地にしたいという要求もあって東条首相はインパール作戦の認可を与えてしまいました。

制空権もなく、自分たちの持つ兵器は旧式のものばかり、そして国境のジャングルやチンドウイン川を越えての物資の補給は困難を極める。川幅約600mのチンドウイン川を渡河し、その上で標高2000m級の山々の連なる急峻なアラカン山系のジャングル内を長距離進撃しなければならないにもかかわらず、補給が全く軽視されているために、作戦開始前からその実施にあたっての問題点が数多く指摘されていました。そんなばかげたインパール作戦を行なうよりも、ビルマ北東に侵入してきた米・支連合軍を攻撃してビルマの平穏を保ち、中国を孤立させてこの戦争の終結を考えるべきなのに、そのような理性は日本政府にはどこかに吹き飛んでいたようでした。

話は変わりますが、1943年(昭和18)11月5日に東京で大東亜会議が開催されました。集まったのは、汪兆銘南京政府主席、張景恵満洲国総理、ワンワイタヤコーン殿下・タイ国首相代理、ラウエル・フィリピン大統領、バー・モウ・ビルマ首相、それに加えてチャンドラ・ボース自由インド仮政府首班がオブザーバーでした。これらの人々を前にして、大本営にいる首相・陸相・参謀総長を兼ねた東条英機は、日本の国益を優先して考えるという理性が無くなっていたのかもしれませんが。と言いますのは、最初の拡大戦争目標であったビルマの平定時点での戦争終結に向けた講和の話し合いでは、大東亜会議に集まったこれらの国々の国益は無視されることになり、日本は戦争の勝利を治めるしか道が残されていなかったと私には思えるからです。

大東亜会議では、道義に基づく共存共栄、互いの自主独立と伝統の尊重、経済と文化の交流が綱領とされ、大東亜戦争を「日本の自存自衛」の戦いから「大東亜各国の自存自衛」の戦いに位置づけられ、全員一致で大東亜宣言の採択が採択されました。この時点では米英との戦争の勝利が最終目標に変わっていたものと思われます。

昭和18年4月に中華民国大使であった重光葵から、「戦う目的について堂々たる主張がなければならぬ」として「日本の戦争目的は、東亜の開放、アジアの復興であって、東亜民族が植民地的地位を脱して、各国平等の地位に立つことが、世界平和の基礎であり、その実現が即ち、戦争目的であり、この目的を達成することをもって日本は完全に満足する。」という東条首相あての意見書が出されます。

東条はこれに共鳴して、この政策実行のために重光を外相としました。これは米英対日本という戦争の構図を欧米植民地主義対アジア被抑圧民族という構図に塗り替えてしまうもので、昭和天皇もこの政策に賛意を示されましたので、東条は半年ほどの間に、満洲国、フィリピン、タイ、インドネシアを精力的に歴訪し、各地の指導者と独立に関する協議を進め、その総仕上げが11月5～6日に開催された大東亜会議でした。

各国を代表したのは、英仏に留学したバー・モウ・ビルマ首相、アメリカに留学したラウエル・フィリピン大統領、英国のケンブリッジ大学に学んだチャンドラ・ボースなどのそうそうたるメンバーですが、この歴史的な会議終了後にチャンドラ・ボースはこう語ったそうです。「日本という国が偉いことは認める。良い兵隊がいるし、いい技術者もいて、万事結構である。ただし日本には、良い政治家がいない。これは致命的かもしれぬ。」

この時に、日本にチャンドラ・ボースやバー・モウ、ラウレルたちと肝胆相照らすほどの日本人政治家がいたら、その後は大きく世界が変わっていたかも知れません。おそらくアジア諸民族は心から日本と共に立ち上がり、インドは独立して英国をアジアから駆逐し、蒋介石政権も覚醒して中国戦線を終結させることができたかもしれない。そうなればアジアの人々たちの夢、各国が平和のうちに自主独立をうたう真の「大東亜共栄圏」が実現していた可能性もあったと私は思います。何故ならば、中国の蒋介石政権は日本の中国に対する侵略戦争に対して戦っていたのであり、大アジア主義に日本が転換したのであれば中国と戦争を続ける理由が無くなることも意味するからです。

日本軍の南京攻略前のトラウトマン工作の時点、昭和18年8月1日のビルマの独立宣言の時点、何れも日本は中国との戦争の終結に向けての講和の話し合いのチャンスでした。しかし、日本の国益というものに対する政府としての共通した認識が乏しく、政府は大アジア主義を利用して戦争を拡大させましたが、そのためにビルマの平定で中国への軍需物資支援ルートをすべて防いでも講和の話し合いを始めることができず、戦略的に利用しようとした大アジア主義のおかげで馬鹿げたインパール作戦の勝利でインドを独立に導くことで、その上で日本の米英に対する戦争勝利による戦争の終結しか選べない道へ踏み込んでしまったと私は見ているのです。

このばかげたインパール作戦の実行中には、作戦継続困難と判断して撤退を進言する第15、31、33師団の3人の師団長が共に更迭されるという、日本陸軍始まって以来の師団長という陸軍の要職にある者の上官命令に従わない抗命事件が起こってしまいました。本来ならば師団長は天皇によって任命される親補職のはずなのですが、これが現場の一司令官によって罷免されたのに、後日この人事が問題となることはありませんでした。牟田口軍司令官の用兵は拙劣を極め、結果として本作戦は日本軍約8万6千人のうち戦死者3万502人、戦傷病者は4万1978人を出して、ついに1944年7月5日に中止されることとなりました。しかし、その後、終戦に至るまでこの作戦の失敗の責任が明らかにされることはありませんでした。

インパール作戦の失敗の責任の所在を陸軍が検証することは最後までありませんでしたし、牟田口中将は作戦失敗のあと、「退路の視察をする」とか言いながらさっさと現地を去り、のちに国内で陸軍予科士官学校長、つまり軍人の教育者の地位につき、しかも東京裁判でも不起訴となっています。その上、牟田口中将の上官であった最高責任者の河辺司令官

はこの大敗北のあと大将に昇進しています。

また、無理をして行なったインパール作戦の失敗により、英印軍に対し互角の形勢にあった日本軍のビルマ・ベンガル湾戦線は崩壊し、その後、英印軍が優勢に転じたために1945年(昭和20)にはアウンサン將軍率いるビルマ軍が寝返る事態となりましたが、これもビルマの国益を考えれば仕方のないことです。しかし、現在でも毎年行なわれるビルマの建国記念日の閲兵式では日本の軍歌が使用されていますのは、少なからず日本に対しての感謝の気持ちがあることを示しているのです。

話は少し脱線しますが、マレー半島を南下してシンガポール攻略を指揮し、2月15日に陥落させたのは「マレーの虎」と恐れられた第25軍司令官である陸軍中将・山下奉文(やましたともゆき)で、近衛師団、第5師団、第18師団、第3飛行集団を統括してこの作戦に当たりました。敵であるイギリス軍には植民地から徴発したインド兵が多いため、まず、現地の90万人のインド人を味方につけ、「反英独立」の思想を目覚めさせ、マレー英印軍内インド兵の戦意破碎、投降と背反を促し、「インド独立」に向かわせることに苦心しました。そして、昭和16年12月31日にはバンコクにインド国民軍・INAが誕生することになります。

山下將軍はマレーの地形と、華僑、インド人、マレー人など、この地域には習慣の違う人種が住んでいることに注目して、現地の人たちの支持がなければ勝てないと悟ったのです。

大本営はシンガポールへの「入城式を行え」と命じましたが、山下將軍は断固としてはねつけ、入城式はせずに軍を郊外に留めました。勝って威張ることなく、民政に気を配ったのです。日本兵と現地人はプールで共に泳ぎ、テニスに興じ、イギリス占領下の人種差別がなくなり、人々はイギリスから解放された実感に大喜びしました。さらに日本は占領中、マレー人優遇政策をとり、イギリス勢力の排除と華僑勢力の抑制の2大方針で統治しました。そのために現地での山下將軍の人気はうなぎのぼりとなりましたが、すると突然、東条首相は山下將軍を満洲に左遷してしまいましたので、その後のマレーの独立の可能性もなくなってしまいました。

また、ジャワ島を攻略したのは今村中将の第16軍で、昭和16年3月1日に3箇所に分かれてジャワ島上陸し、3月9日には全面降伏させました。このスピード勝利の裏には原住民がこぞって日本軍に味方したことがあります。この地には「いつか北方から救いが来る」という信仰があり、有色人種の兵隊が白人軍団を蹴散らして堂々と行進する姿に、自分たちのための民族解放をやってくれていると感激して日本軍を応援したのがスピード勝利の背景にあるのです。

今村中将は敵の降伏と同時に独立運動のリーダーのスカルノを東部スマトラの山中の獄舎から助け出し、活動資金と自動車20台を与え、彼の自由な独立運動を支援しました。インドネシアの青年たちを集めて防衛義勇軍を設立し、この結果祖国愛に目覚めた4万人の熱情を持つ若者たちはやがて終戦時には30万のインドネシア独立軍をつくりあげ、再び支配者として戻ってきたオランダから独立を勝ち取ることになります。

住民を大切にしたい今村軍政は住民から支持され、インドネシアには自由な空気がみなぎっていましたが、東条首相兼陸

相はこのような今村軍政を改めさせようとする。しかし、少数の日本軍がだっ広いインドネシアをまとめるには住民の意識を向上させ、彼らに任せる以外に方法がないとして、今村中将はその要求を断固拒否しました。

後に今村中将は、苦戦に陥っていた南東太平洋方面の戦局の打開のためにラバウルへ向かいますが、終戦後、今村中将はオーストラリアの戦犯管理下にあつてラバウル刑務所につながれていたのを、昭和23年4月、オランダ側の要求によりジャワの軍事法廷に引き立てられました。そこで、裁判長デ・フロートが検事の求刑を退け、参考人として100人以上の白人や現地人がことごとく、今村の軍政の正当適切であったことを立証して今村は無罪になっています。そして、もし有罪になればスカルノは決死隊を指揮して今村を奪還する計画を立てていたそうです。

終戦後、インドネシアの独立派は直ちにインドネシア独立を宣言、日本軍の武装解除を行ったイギリス軍、および植民地支配再開を願って戻って来たオランダ軍とインドネシア独立戦争を戦うことになります。彼らは武器・弾薬を日本軍兵器庫から奪ったり、日本軍人の一部が横流した武器・弾薬で武装し、インドネシア独立派には逃亡兵としての1000人の日本軍人が戦闘に参加して様々な手段で連合軍を苦しめ、ついに1949年12月のハーグ円卓会議によりオランダは正式にインドネシア独立を承認するに至ったのです。

こうした歴史的事実からインドネシアの独立記念日には、インドネシアの服装の男女2名に日本兵の服装をした1名を加えて3名で、国旗を掲揚しています。これは、独立を支援した日本軍に敬意と感謝を表しているのだそうです。そしてジャカルタ郊外のカリバタ国立英雄墓地には、インドネシア独立の戦士たちとともに11名の日本人が独立の英雄として手厚く葬られています。

また、東京での大東亜会議に参加されたワンワイタヤコーン殿下・タイ国首相代理ですが、戦後に同殿下が国連議長に就任した際には日本の国連加盟に努力してくださいました。

私の住むカンチャナブリには、西南の役の田原坂に近い感情を私に抱かせる泰麺鉄道が、現在はナムトック線と名前を変えてトンブリとナムトック間を運行しています。当初は大東亜戦争の終着駅として考えられていたビルマの平定、そして大アジア主義を米英と戦うために政府が利用した結果として馬鹿げたインパール作戦を始めなければならなかったこと、少なくとも結果的には日本人は欧米列強からのアジア各国の独立を本気で援助しなければならなかったことが広島や長崎に原爆を投下される結果に繋がっているのです。

私は日本の残虐行為のシンボルとして世界中から観光客を集めている泰麺鉄道の持つ二重の意味を、少なくとも日本の方には真実を知る努力をして欲しいと願っています。こちらの各戦争史跡では日本の残虐行為だけが強調されていますが、戦略的に失敗した軍上層部は別にして先の例の2人の軍司令官にも見るように、日本兵の中には大アジア主義によるアジア各国の独立を本気で支援した人々も多くいましたし、日本政府も戦争の後段ではその方向に向かざるを得なくなっていました。

米英との戦争は1941年12月8日(現地時間12月7日)の真珠湾攻撃によって開戦し、1945年8月15日のポツダム宣言受諾によって終了したとされていますが、日本で大東亜戦争という名称が正式に決まったのは1941年(昭和16)12月12日の閣議においてであり、そのときから対米・英戦を支那事変(日中戦争・日華事変)をも含めて日本では大東亜戦争と呼ぶことになりました。

日中戦争から大東亜戦争へと、この拡大戦争を開始した当初の戦略目標であったのは中国に対する雲南・ビルマルート
の封鎖でした。しかし、米英との戦争が開始された後に戦争の名称が大東亜と変更されていること、故意か偶然かビルマを平定して同ルートの閉鎖を完了したにも関わらずインパール作戦を行ったこと、その直前である1943年(昭和18)11月5日には東京で大東亜会議が開催されたこと、これらのことを考え合わせますと時の政府の迷走する姿勢が見え隠れしているように私には思われてなりません。

戦後の日本では謝罪外交が続いて来ましたが、歴史への反省という言葉もよく聞きますが、私の目からは多くの日本人は中国や東南アジアで本当は何があったのかを知らないで、歴史の一側面だけを教科書で教えられているように感じられてなりません。1943年(昭和18)11月5日に東京で大東亜会議が開催されましたが、この歴史的な会議終了後にチャンドラ・ボースが語った「ただし、日本には良い政治家がいない。これは致命的かもしれぬ。」ということが、現代の日本においても何ら変わらない状況にあるようにも思えます。日本人は先の戦争で反省することは多くありますが、最大の課題はここにあるのではないのでしょうか。

以上は、私の私見による東南アジアでの先の戦争のお話ですが、読者の皆様はどのようにお考えでしょうか。

カンチャナブリにはヨーロッパからの観光客が大勢やって来ます。日本からの団体旅行者はほとんどがバンコクからの日帰り、クワイ川鉄橋やアルヒル栈道橋などを見てバンコクへ戻りますが、ヨーロッパからの旅行者はもっと時間をかけて県内奥地の戦跡ヘルファイアパスを見学したり、そして日本軍発見によるヒンダー温泉の入浴も楽しんでいます。各戦跡などでは第2次世界大戦に基づく英語での歴史の紹介があり、その歴史的事実の説明は間違っていないと思いますが、歴史にはそれを見る角度というものもあります。この地まで足を伸ばす日本の若者たちの中にはそれらの事実を見て日本に対する自虐史観を強める者も少なくないように感じますが、日本の側に立った歴史を眺める角度を持たない若者たちが増えつつあることも問題なのではないのでしょうか。

泰緬鉄道を巡る歴史

カンチャナブリは、映画で有名な戦場に架ける橋「クワイ川鉄橋」のあるところです。太平洋戦争中に急いで建設された日本の軍用鉄道である泰緬鉄道は、日本の歴史の中でどのような歴史的な位置付けにあったのでしょうか。その私見です。

泰緬鉄道とは

日本軍が名づけた泰緬(たいめん)鉄道という呼称は、当時の中国語の泰(シャム、現タイランドのことです)と緬甸(メンデン、現ミャンマーのことです)からきており、その合成語である泰緬(たいめん)を日本軍はこの鉄道の名称としました。

1942年2月17日、シンガポールを攻略した日本の第15軍はビルマへの進攻を開始し、同年5月18日にはビルマ全土を制圧して、連合国による南中国から中国への陸路軍需物資援助ルートすべてを封鎖したのでした。

日本軍にとってのビルマとは、南方資源地帯の西側の防壁であり、ラングーンーラシオー昆明(クンミン)と続く英米による中華民国の蒋介石国民党政府への軍需物資援助ルートの最後の拠点でもありました。一方、イギリスにとってビルマを失う事は、インド・中近東への脅威となるものであり、日本に3国同盟を結んでいるドイツ・イタリアとの連携をも可能にさせる危険があると考えていました。

泰緬鉄道建設の決定は、1942年6月のミッドウェー海戦での日本軍大敗北のあとに決定されました。ビルマの日本軍に物資を補給していたシンガポールを廻ってマレー海峡を通る海上ルートは、次第に日本軍の制海圏が後退し、大変危険なルートとなり始めていたため、そのための有望な解決策と思われたからです。

かつてイギリスが、1910年にタイとビルマを結ぶ鉄道ルートを5ルート調査しましたが、1912年には地形上の難しさ、風土病、そして激しいモンスーンによる豪雨等のために、計画そのものを見捨てていました。しかし、日本はイギリスの考えたルートの1つであるクワイ・ノイ川に沿ってスリーパゴダパスを通過する第3案のルートで、タイのノンプラドックからビルマのタンビューザヤットに至るルートを採用し、鉄道建設に乗り出す事にしました。

シンガポールからマレー半島を通り、タイを通過してビルマの既存の鉄道網と連結して、ビルマの日本軍にシンガポールからの鉄道による直接の軍需物資補給ラインを確実なものにするためだったのです。この泰緬鉄道の建設によってシンガポールからビルマの各地まで、すべて鉄道による輸送網が完成することになるわけです。シンガポールの陥落で、日本

軍は大きな支配圏だけでなく、300両以上の機関車、何千台ものボギー貨車、何百kmにも及ぶ鉄道線路など、膨大な設備と貴重な機械類を獲得していたのです。

1942年6月、タイのノンプラドックからビルマのタンビューザヤットまでの約415kmの泰緬鉄道の線路敷設工事のために、タイのカンチャナブリと、ビルマのタンビューザヤットの各ベースキャンプに、労働者としての戦争捕虜などの移送が始まりました。

イギリス、オーストラリア、アメリカ、そしてオランダの各戦争捕虜たち合計約61,000人、同様に、インドネシア、マレー、ビルマ、中国、インド、そしてタイなどから集められた労働者(現地では「ロームシャ」と呼ばれていたようです)が合計約20万人、これらの人々が日本軍の管理下に置かれることとなりました。

現地で集められたアジア人労働者たちは賃金労働者ですが、なかなか募集しても集まらないために、次第に強引な方法で集められるようになったと、現地での色んな書物には記載されています。

鉄道の敷設は、両端から接合点に向かうという方法で工事が始まり、タイのノンプラドックからは1942年6月に、ビルマのタンビューザヤットからは1942年10月に工事が始まりました。日本軍の技術者によると、当初は最少でも5年必要だという見積りでしたが、戦局との関係で1943年8月の鉄道完成予定を目指して、過酷な労働が強制されていくこととなりました。

建設開始当初、泰緬鉄道の現実のルート確定のために、南方軍鉄道隊の指揮官である下田少将と11人の高級将校が航空測量に出かけますが、飛行機のエンジン不調のために、タイとビルマの国境付近にあるスリーバゴダパスから近い、トンパープムの近くのピロク山中に墜落してしまいました。このような悲劇の幕開けで泰緬鉄道の建設は始まりました。

そのために、残された技術将校たちの手によって、その後の鉄道建設の多くが決められていくこととなりました。ジャングルに覆われた山々の100kmを通るルートは、短期間では不可能と思われる300以上の橋脚の建設、何ヶ所かの岩山の切り通し等があり、熟練技術者たちの突然の死で、その後の工事にも色々と困難が伴ったようです。

現在、カンチャナブリでの最大の人気の観光名所となっているアルヒル栈道橋などは、その当時の大変な難工事であったことが偲ばれる場所で、日本人だけでなくヨーロッパの観光客の人々も一様に驚きの声をあげる場所となっています。

このようにして始まった泰緬鉄道の建設ですが、地理的な悪条件に加えて、1943年4月からは戦局の悪化や命令されていた工事完成予定からの遅れのために大本営から工期の短縮命令が下り、より労働は苛酷さを極めることとなります。この命令が出たあとの期間が、泰緬鉄道の建設現場では「スピードウ」と呼ばれていた、特に苛酷な労働が強制された期間なのです。戦争捕虜やアジア各地から集められた労働者の人々に、以前にも増して過酷な労働が強いられることとなり、多大な犠牲者を生んでいきました。その当時の模様は、オーストラリア政府が管理するカンチャナブリ県内陸部のヘルファイアパスにある資料館で、現在でも詳しく知る事ができます。

猛暑の中、人かい戦術でクワイ・ノイ川沿いのジャングルを切り開き、国境山岳地帯の岩山を削る作業が連日長時間続きます。そこに追い討ちをかけるように雨季の激しいスコールが連日襲い、食料や医薬品の不足、重労働、日本軍による虐待、さらにはコレラやマラリアなどの伝染病にも見舞われ、多大な数の死者を現地で働くアジア人労働者や戦争捕虜の人々の間に出しながらも、鉄道線路の敷設作業は進んでいきました。

泰緬鉄道は、タイ側はノンブラドックから263km、ビルマ側はタンビューザヤットから152kmありますが、様々な苦勞の末に1943年10月17日、タイのコンコイタで両方から進められてきた鉄道は接続し、ついに鉄道全線が完成しました。建設期間21ヶ月、連続建設期間17ヶ月というものでした。

それでも、当初の軍の計画よりは2ヶ月遅れだったそうです。しかも、お互いに接合ポイントを1km以上もミスをするなどのこともあったようです。しかし、大変無理をして建設した当時の鉄道線路の路盤状態は悪く、運用開始後は脱線が相次いで、全列車が簡易の復線のための機器を常備して運行されるという状態だったようです。

泰緬鉄道の完成後、労働力としての戦争捕虜たちは3つのグループに分けられました。身体が丈夫な者たちは、日本本土の炭坑などで働かせるために、日本へと移送されました。しかし、途中で輸送船は潜水艦に沈められ、約1万人ほど日本へ送られたうちの約3千人が輸送船と共に溺死してしまったそうです。別のグループは鉄道の保全のために残されましたが、そのうちの約100人ほどは連合軍による鉄道、特にクワイ川鉄橋への爆撃の際に命を落とされたようです。さらに、働かせるのが無理なほど衰弱してしまっていたもう1つのグループは、シンガポールのチャンギ収容所へと移送されました。

クワイ川鉄橋とは

太平洋戦争中に、日本軍によって鉄道建設のためにクワイ・ヤイ川(当時の名称はメークロン川で、映画「戦場にかける橋」でクワイ川と呼称され、それが有名になったために1960年に現在の名前に名称変更されました)に架かった橋は2つあります。木造の橋と、コンクリート橋脚の鉄橋です。

木造の橋は1943年2月に完成し、鉄橋の方は1943年9月に完成しました。木造の橋は先線工事のための資材運搬用を目的に建設されたのです。現在も在来線として運行されている後者の鉄橋は、いつでもカンチャナブリのリバークワイブリッジ駅へ行きますと見ることができます。

クワイ川鉄橋への飛行機による攻撃は1944年12月から始まりました。しかし、1945年2月までは一時的な破損で、簡単に修復されていました。1945年2月中旬の攻撃では鉄橋の1スパンが破壊され、4月と6月の攻撃でさらに鉄橋の2スパンが破壊されて、とうとう鉄橋は使用不能になってしまいました。

戦後になって、1947年に応急修理されて再び鉄橋は復旧され、タイ国の国有鉄道の所有になります。その後、1950年に日本の戦後賠償として、日本の横河橋梁(株)と日本橋梁(株)によって現在の形に作り直されたのです。

破壊されていた3スパンを2スパンとしてコンクリート橋脚の間を広げ、破壊された箇所は2つの平行弦トラスとして架け替えられましたので、従来のアーチ状の鉄橋との対比で簡単に見分けがつくことと思います。なお、クワイ川鉄橋の横河橋梁(株)が架け直したという平行弦トラス2連の鉄橋を現地に確認に行きましたら、完成年度だと思いましたが、西暦1948年(タイ暦表示を西暦に換算)という銘板の記載がありました。

また、日本橋梁(株)により、以前の木造橋部分をコンクリート製のプレートガーダーに架け直おしたという部分を確認に行きましたら、同じく西暦1952年(タイ暦表示を西暦に換算)という銘板の記載もありました。参考として付け加えておきます。

一方、木造の橋の方は何度も飛行機による爆撃を受けたものの、度重なる修復で何とか持ちこたえていました。そして、ついに戦時中の空襲には耐え抜いたものの、1946年9月9日、数日前から降り続いていた大雨による増水で、木造の橋の中央部分が川の流れの圧力に耐え切れず、とうとう破損してしまいました。

再度修復して使用開始されますが、最終的には解体され、現在ではクワイ川鉄橋近くの戦争博物館の1階で、クワイ・ヤイ川にわずかに短く突き出した部分だけが現存しているだけとなっています。数体の人形とともに展示されていますので、すぐにわかることと思います。

1947年に泰緬鉄道はタイ国有鉄道所有になったあと、タイ政府はタイービルマ国境近くの残された線路(両国の国境にまたがる部分は、イギリスによって戦後まもなく撤去されました)の端からナムトック駅までの区間を取り外すことを認可し、ノンプラドックからナムトック駅までの130.204kmの区間の性能をあげてタイ国鉄として使用することになりました。

このようにして、公式にはノンプラドックからカンチャナブリ駅間の区間は1949年6月24日に開通し、カンチャナブリ駅とサイヨークのワンボ駅間の区間は1952年4月1日に開通し、ワンボ駅から終点のナムトック駅までの区間は1958年7月1日に開通することとなったわけなのです。

また、メークロン川に架かった鉄橋は映画「戦場に架ける橋」の影響で1960年にクワイ川鉄橋と改名され、その下を流れているメークロン川はシーナカリンダムからカンチャナブリ都心までの区間のみをクワイ・ヤイ川と改名され、映画との整合性がとられることとなりました。

泰緬鉄道建設までの大東亜戦争の輪郭

当時の日本では戦争の呼称を大東亜戦争と呼んでいました。しかし、これは日本と中国との間に起こった日中戦争と、それを巡って、後にアメリカやイギリス・オーストラリア・オランダなどの連合軍と戦争をすることになった太平洋戦争に分けられます。この日中戦争と太平洋戦争を一緒にして、当時の日本では太平洋戦争開始後は全体をまとめて大東亜戦争と呼んでいたのです。

太平洋戦争という呼称は、終戦後の1945年12月15日に、連合軍最高司令官総司令部から出された「政府による国家神道(神社神道)の保護・支援・保全・監督及び公布の廃止方に関する総司令部覚書」により、「大東亜戦争」という用語等の使用は禁止されました。そこで代わりに、アメリカ側が用いていた「太平洋戦争」という呼称が使用されることになったのです。それで、私はこの戦争のことを太平洋戦争と呼んでいるわけなのです。

太平洋戦争の原因は日中戦争にあり、日中戦争の原因は満州事変にあると私は考えますが、この3つの出来事の1つ1つは独立性の高いものですが、結果としては連続したもののように見えています。

最初の満州事変は、日本陸軍の中の1人の高級将校が計画した事件でした。日本政府は遅れて追認することになります。そして満州国成立後に、中国の国民党政府との間に協定が成立し、両国政府の間ではこの事件は解決済みとされています。

次の日中戦争は、日本軍と中国の国民党政府軍との間に偶発的に起こった事件(蘆溝橋事件)を発端に、全面戦争へと拡大していったものです。中国全土の中国国民の間には激しい反日感情が起こっており、これが日中戦争の本当の原因だったと私は思っています。日本側の思惑に反して、現場ではズルズルと戦争が拡大してしまいました。

そして、太平洋戦争は、拡大してしまった日中戦争に対して、中国への軍需物資援助や日独伊三国同盟後の日本への経済封鎖などでアメリカが干渉してきたため、軍事的にも経済的にも日本が追い詰められた結果、自暴自棄になって突入してしまった戦争でした。

英米による中国への軍需物資補給ルートは3本ありましたが、3本のルートである香港&ベトナム&ビルマのすべてのルートが当時は植民地となっていた国々からのものでした。その他にチベットを通るルートも検討されていたようですが、チベットは当時は大変親日的で、自国を通るルートは英米に拒否していました。

満州事変、日中戦争、太平洋戦争、この3つの戦争は見方を変えると、日本国内の不況からの脱出を求めたのが満州事変で、中国国民の抗日運動への対処を誤ったのが日中戦争、そして中国への英米からの軍需物資援助の阻止に失敗して始めたのが太平洋戦争、という構図になると思います。いずれにしても、軍部が主導性を握っていた時代でした。

1937年の日中戦争開始直後から日本の対戦相手国であった中国に、アメリカやイギリス等は武器弾薬や軍需物資などを供給し続けてきました。その軍需物資供給のための支援ルートは3本あり、中国南部からの香港・広東と続くルート、当時のフランス領だった現ベトナムを通るルート、そして、ビルマを経由して送るラングーンーラシオー昆明と続くルートの3本でした。

日本は中国と戦いながらも戦争終結のために様々な努力も続けていましたが、当時は政府による日本としての完全なリーダーシップが取れない状況となっており、そのために戦争が長期化して日本の軍事力は少しずつ消耗され続けてい

ました。そのような状況のときに、日本の戦争相手国である中国へ軍需物資が供給され続けていましたから、日本は大変深刻な状態に陥っていました。

日本軍は香港ルートを防ぐために、1938年10月12日より広東攻略を開始しました。そして、11月初旬には広東附近の要域を制圧し、占拠しました。

そして次に、中国への軍需物資援助ルートの1つであるフランス領の現ベトナムを通るルートを平和的に封鎖するために、日本軍はフランスと交渉を開始しました。平和的にベトナムに入り、日本軍が進駐するという交渉は大変優秀な日本軍の某若手将校の努力で成功の可能性があるが見えていたところで、日本軍部の中の強硬派がそれらの外交交渉に痺れを切らして強引に1940年9月23日に武力進駐を開始してしまいました。この行動に、日本政府も日本海軍も日本陸軍内の強硬派に対して大変怒り、日本国天皇もますます日本陸軍に不信感を持たれる事となりました。

ベトナムへの武力進駐の少し前の9月5日に、イギリスのハリファックス外相は、フランス領の現ベトナムの現状維持に深い関心を持っていると、日本政府に注意を喚起しました。アメリカのハル国務相は、フランス領の現ベトナム情勢を重視しているという声明を発表します。そして、9月20日にはグルー駐日大使が日本の松岡外相に非難文書を提出しました。

さらに武力進駐を開始した9月23日には、ハル国務相は公然と日本を非難し、フランス領現ベトナムへの日本軍の進駐、そしてその後の日本・ドイツ・イタリアの3国同盟締結(1940年9月27日)に対して、アメリカは9月26日、屑鉄・鉄鋼等の対日輸出禁止を発表しました。イギリスも、中国へのビルマを通る援助ルートの再開を日本へ通告しました。これで、日本とアメリカ・イギリスとの関係が険悪になってしまいました。

1940年9月27日、日本は日独伊3国同盟を締結し、そして1941年4月13日、日本はソ連との間に日ソ中立条約を結びました。これらはすべて、日中戦争へのアメリカの参戦阻止のために結ばれたものでした。しかし、日独伊3国同盟の締結は、逆にアメリカを怒らせてしまいました。当時のドイツはルーマニアから大量の石油を輸入しており、これがなければ戦争遂行がきわめて困難な状況でした。ドイツは、ソ連のルーマニア侵略に危機感を抱いたために戦略目的で独日伊の3国同盟を結んだのでした。このようにして、ソ連の戦力を日本にも分散させてから、1940年10月、ドイツはルーマニアに進攻しました。

しかし、そのようなドイツの思惑にも関わらず、日本はその後、アメリカへの抑止力として1941年4月13日に日ソ中立条約を結んでしまいました。ソ連にとっては、ドイツのバルカン半島進出にそなえて日本とは争いたくなかったので、中立条約は容易に成立しました。その後、1941年6月22日、ドイツは突如ソ連に侵入を開始し、独ソ戦争が始まりましたが、その勝敗がその後の歴史にも大きく影響を与えてしまったことは歴史の事実として残っています。一方、日本にとっての日独伊3国同盟や日ソ中立条約は、アメリカが日中戦争に参戦しないための抑止力としてのものでしたが、その効果もその後の歴史が示すとおりです。

日本とアメリカが戦争に至った直接の原因としては、日米開戦の4ヶ月前から始まった対日禁輸を含むアメリカ・イギリス・

オランダなどによる日本への経済封鎖です。同時に、日本の在外資産凍結などの経済封鎖も行われました。その結果、当時の日本はアメリカに石油輸入の80%近くを依存していましたので、石油の枯渇、外貨の支払い不能、日中戦争による戦費の増大から、座して窒息死を待つか、国家生存の可能性を信じて戦争に打って出るか、の決断を迫られました。経済封鎖は武力行使に勝るものであり、このままの状態が続けば、日本海軍は2年後には全機能を喪失し、重要産業は1年以内に生産を停止し、日本は自滅していくことは明かでした。さらに翌年以降になれば、アメリカ側の軍備は急速に増加され、彼らとの戦力比率は著しいものになってしまうことも明白でしたため、もし戦うのであれば今しかない、という考えが次第に生まれ始めていました。

このようにして、アメリカとの交渉が完全に行き詰まったときが日本の決断のときでした。

太平洋戦争開始当初、海軍によるハワイの奇襲攻撃や陸軍によるマレー・シンガポール作戦などがありました。日中戦争に続く連合国との新しい戦争という2つの戦争を戦うこととなりますので、太平洋戦争初期に連合国側の戦力を大きくダウンさせておき、その間に経済封鎖で得られなくなっていた資源を東南アジアで確保し、中国への軍需物資補給路として残っていた最後のビルマからのルートを開通して、日本に有利な状態で短期間に戦争終結の交渉に持ちこむという戦略でした。戦争が長引けば、絶対に日本は勝てないと、軍部や政府の指導者はすべてがそのように考えていました。その戦略の1つとしてインパール作戦があったのですが、ミッドウェー海戦の大敗北で日本軍の戦略は狂い始め、ビルマの日本軍への軍需物資の海上ルートからの補給方法に代わる新しい策として急いで建設を始めたのが泰緬鉄道だったのです。

日本での軍部の台頭

日本は1867年に近代化への革命が起こり、明治政府が誕生しました。押し寄せる欧米列強による日本の植民地化の恐怖の前に、国民一丸として国力を高める努力が始まったのです。

日本は先進諸国から積極的に様々な知識を学んで、日本国の近代化の努力を続けました。日本国の憲法はドイツに学んで大日本帝国憲法を作りました。そして、様々な制度を作り上げていき、日本を守るだけの軍事力と経済力をつけるために、国民一丸となって頑張り続けます。

しかし、この大日本帝国憲法には、大きな欠陥がありました。それは、最終的な意思決定に絡む問題でした。その前に、当時の大日本帝国憲法の概要を簡単に紹介しますと、主権は天皇にある、国家元首は天皇、軍は政府とは独立した機関として置かれ、天皇に陸海軍の統帥権、国会は特権階級の代表からなる貴族院と国民の代表からなる衆議院の二院制、しかし、その上に天皇の諮問機関として枢密院が置かれ、天皇に承認を求める重要事項はそこで再び審議されるというシステムでした。また、政府のトップである首相は、枢密院の元老の推薦に基づいて天皇が任命するという仕組みでした。

このような形での民主主義が、明治の革命後に始まったのです。そして、内閣は天皇に任命された首相が組閣することになりました。このようにして成立する内閣は、天皇の輔弼機関として機能することになります。いくら、革命軍が政権を担

当するようになったとはいっても、生まれたばかりの新しい国ですべての国民の支持を得るのは容易なことではありません。天皇を形式上の最終的な意思決定者として利用する形でしか、出来あがったばかりの新しい日本国の現実的な政局運営は難しい、という側面も憲法の背景にはあったのです。

このように見ると、天皇は何でも出きるように見えますが、実際は単なる形式上の承認機関で、下から上がってくる審議を尽くされた事項の承認をするだけの機関になっていました。トップクラスの重要問題で、何度か天皇臨席での御前会議というもありましたが、天皇には会議での発言権は無いに等しかったのです。これが、天皇を持ち、何事も合議制の話し合いで解決しようとする、当時の日本の実状だったのです。

実質的には、天皇の諮問機関として、最高の意思決定機関として機能していた枢密院の元老たちの存在した期間が、日本の近代の歴史の上では異常な期間だったとも言えるのです。戦後に新しく作られた現在の日本国憲法には、枢密院などの存在はありませんが、内閣の意思決定は閣僚全員一致の原則になっているのも、そのような日本の文化からくるものなのです。

このシステムは、生まれたばかりの明治政府には世界の大局が見える優れた人材に乏しく、革命を成功させたリーダーたちは最初から政府にすべてを任せるのは危険だと考えました。それで設置したのが枢密院だったのです。革命を成功させた、多方面に優れた革命の偉人たちを元老として、枢密院の議員とし、政府から天皇に承認を求めて提出されてくる重要案件を詳細にチェックし、彼らのフィルターを通して天皇の承認を受けるようにしていました。

このシステムは、時代の経過と共に政党政治が成長してくるのとは逆に、元老は後継指名された2世代となり、その判断力は凡人化していったと私は考えています。日本は急速に力をつけて世界の列強の仲間入りをするようになり、難しい国際情勢の中に飛び込んで行きましたので、ただでさえ政治的判断は容易ではなかったと私は思うのです。さらに、昭和恐慌の頃から政府は有効な政策が打ち出せなくなってしまい、元老も政府も共に国民の期待に応えることができなくなりましたので、結果として軍の暴走が始まったと私は考えています。

大東亜戦争への道へと進んでしまった直接的な背景としては、1922年8月の日英同盟の破棄の影響が大きいです。1902年1月30日に、日本はイギリスとの間に2国間の攻守同盟条約を結びましたが、第1次世界大戦後の1921年11月にアメリカで開かれたワシントン会議でそれからの新秩序が検討され、日本、イギリス、アメリカ、フランスの4ヶ国間で海軍軍備制限(ワシントン軍縮条約)や太平洋に関する紛争処理などの4ヶ国条約が締結され、また、日本、イギリス、アメリカ、フランス、イタリア、ベルギー、オランダ、ポルトガル、中国との間で中国に関する9ヶ国条約も締結されました。その結果、それまでの日本外交の支柱であった日英同盟の廃棄を余儀なくされてしまったのです。

ワシントン会議の焦点は、海軍軍縮、日英同盟の解消、中国問題の三項目で、太平洋諸国の現状維持を定めることが目的だったのです。

新たに締結された9ヶ国条約には、締結国間での解釈の相違が生じた場合の具体的解決法が明示されず、かつ中国自

身の条約尊重義務も規定されていませんでしたが、欧米列強の有する中国大陸における権益の現状維持が条約締結の前提となっていたこと、アメリカがこの条約に加わった形で締結すればアメリカが日本の満州権益を公式に認めたことになること、と当時の加藤全権の内田康哉（こうさい）外相は欧米協調によって満州権益を維持することができると判断したのです。この条約の中では、日本の中国に対する21ヶ条の要求も認められていました。そして、中国も渋々ながらも日本の21ヶ条の要求を認めました。しかし、後に中国は21ヶ条の要求の拒否に態度が変わり、アメリカはその条約そのものを守ろうとはしませんでした。

このような経緯を経て、その後の日本は日英同盟を破棄した結果として世界から孤立するようになりました。そんなときに、1928年にパリ不戦条約が先進欧米列強の間で締結されました。これは、簡単に言えば侵略戦争をやめようという条約で、既存の植民地主張をこの辺で固定化しようというものだったのです。そして、その後これらの国々は植民地獲得を止めてブロック経済での既得権の守りの体制に入っていました。その直後の1929年にニューヨークから世界大恐慌が始まり、日本は世界で政治的にも経済的にも孤立し、国内で発生した昭和恐慌という未曾有の大不況からの出口を求めて、必死の模索が始まることとなったわけなのです。

当時の世界列強の間での海軍の軍縮条約は、1921年のワシントン条約と1930年のロンドン条約で全体を構成しています。1921年のワシントン条約の時は全権代表が海軍大臣の加藤友三郎が務めました。当時は、国力を蓄えるのが先と考える条約派と武力均衡を唱える艦隊派に海軍内は分かれていましたが、加藤友三郎は前者の立場に立って海軍内にあった艦隊派の意見を抑え、国力を蓄える方を優先して条約を締結しました。加藤友三郎はワシントン条約の締結後、帰国して内閣総理大臣となります。

海軍内は加藤友三郎が健在の間は条約派が制していましたが、彼は1923年8月、首相在任中のまま大腸ガンで死去してしまいました。

このような状態で迎えた1930年のロンドン会議へは、全権として先の首相若槻礼次郎、海軍大臣と財部彪、駐英大使松平恒雄が出席しました。天皇の意向もあり、元老の西園寺公望や浜口首相は条約成立に努力します。そして、見事に条約は成立して全権は帰国しますが、海軍の艦隊派は犬養毅や鳩山一郎などの野党政友会と結束して厳しい政府批判を始めました。このような中で統帥権の干犯問題が飛び出し、「あの条約締結は天皇の統帥権を干犯している」という、政治の場で政治家自らが自殺行為の議論をした結果、海軍内では艦隊派が主流人脈を占めるようになってしまったのです。

その後、陸軍内での軍部の暴走も始まり、中国に関する9ヶ国条約やパリ不戦条約に対する違反を起こして、その後の一連の戦争への道へと入っていったわけなのです。言葉は悪いですが、帝国主義間の妥協の産物と思われるのは満州事変直後までの状況で、満州事変は滑り込みセーフという暗黙の認識も当時はあったようです。

後に、軍の暴走を抑えるために内閣内に陸軍大臣と海軍大臣のポストを設ける（1936年から）事になりましたが、これが結果的には軍の力をさらに増大させることになり、政府内での意見が対立すると、首相は内閣総辞職しか陸軍や海軍へ

の抵抗は出来なくなってしまいました。内閣には陸軍大臣と海軍大臣が入閣していましたが、陸軍のトップは陸軍参謀総長であって陸軍大臣はその部下であり、海軍のトップは海軍軍令部長であって海軍大臣はその部下であるという構造でした。天皇はすべての機関の頂点にいましたが、政治的には意思決定に参加できない単なる形式的な存在となっていましたので、次第に元老の重しが無くなっていくと、軍は自立した機関として行動ができるようになっていったのです。このようにして、軍部の暴走の土壌が出来あがっていったのです。

私は日本が間違い無くおかしくなっていったのは昭和10年頃からだと思います。国民教育の精神的な基本は教育勅語でしたが、これが変わり始めたのは昭和10年の改訂版からで、「元寇の役に神風が吹いた」などの記載変更とか天皇「現人神」説の傾向が出始め、従来の皇国史観が変化し始めます。そして、俗に言われている軍国主義の色彩の教育へと突き進んでいきます。それ以前の教育勅語は、他国の模範とされることもあった位の日本民族としての道徳規範として恥ずかしくない内容のものでした。また、この頃から軍部の台頭、そして日本の帝国主義的な行動を自制させることも出来なくなりました。しかも、天皇制は日本のローカルな文化なのに、それが世界的に普遍性を持っていると錯覚して、日本が進出した各地でそれを強制したりまでしました。

経済のブロック化の発生と昭和恐慌の影響

アメリカは、1929年の世界大恐慌をきっかけに、翌年、高率関税を可能にしたストーム・ホーリー法を制定して、市場確保の為の経済ブロックを形成しました。これに対抗するためにイギリスは、対外貿易の決済をポンドだけでおこなう経済ブロックを形成し、さらに日本製品に対しては、ソーシャル・ダンピングだと非難し、イギリス本国だけでなく植民地に輸入される日本製品にも高額の輸入関税を課し、あるいは輸入品に対する量的制限を一方的に設けて、日本製品の流入阻止をはかりました。

その後、アメリカやフランスもイギリスと同様な経済政策をおこないました。イギリスとその植民地を中心とする経済ブロックを、イギリス通貨の名称であるスターリング (Sterling) からスターリング・ブロックと呼び、フランスとその植民地で作る経済ブロックをフラン (Franc) ・ブロック、アメリカを中心とした南北アメリカ大陸の経済圏ブロックをドル・ブロックと称しました。

同一経済ブロックに属する国に対しては、互いに貿易上の優遇措置を与えるなどの輸出入の拡大政策をとり、同経済ブロック外の国には高い関税障壁を設けて対抗しました。こうした列国の経済ブロックの確立により、日本製品は次第に輸出市場を失っていきました。そして、国際的な経済のブロック化は世界大恐慌の影響を受けて、ますます拡大の一途を辿っていきました。

これが日中戦争に至る数年前の昭和恐慌下の日本の置かれていた状況です。政府は国民の信頼を無くしており、陸軍に多大な期待が集まりつつありました。しかし、その陸軍にしても内部の統率は乱れがちでした。当時の日本は、欧米列強による経済ブロックが作られていて、経済ブロックを持たない日本はそれらの国との貿易では高い関税が掛けられ、その結果として輸出入は極端に落ち込んでいたのです。

日本経済そのものの破綻の恐れの前に、国内政治での解決策は見つからず、国家生存を賭けて軍事力を用いて中国大陸へと進出していく気運が高まっていました。満州国建設は、日本を困らせていた当時の欧米列強国の経済ブロック化という状況の中では、日本の生き残る希望そのものになっていたのです。それが日中戦争へと進んでいくことになった背景にあると私は考えます。

当時の昭和恐慌下の日本経済の惨状はひどいものでした。1923年に関東地方で発生した大地震で大変な被害が発生し、その復興のために震災手形が大量に発行されましたが、その後遺症で1927年には金融恐慌が起こってしまいました。そのような状況のときに、1929年10月、ニューヨークのウォール街での株暴落を直接の原因として、世界に広がっていった世界大恐慌が始まったのです。日本は昭和恐慌の最中に旧平価のままで金本位制を採用(1930年～1931年)してしまったため、日本国内の物価は急激に低下し、失業者は増大し、農産物の価格の下落率は特に著しいものでした。

世界大恐慌をきっかけに金本位制から離脱する国が相次いでいたときに、日本は金本位制を採用してしまったのです。恐慌の時は、政府は大量の通貨を国民経済に注入して金融を緩和させる必要がありますが、金本位制のもとでは発行できる通貨量は中央銀行の保有する金の量に縛られるために、そのような金融緩和政策がとれません。すなわち、恐慌になっても適切な有効需要管理政策がとれないのです。ですから、各国は1930年代に入って金本位制から離脱していったのですが、日本もそのことに気がついて金本位制を取りやめたときは、すでに遅かったのです。

ただでさえ、当時の欧米列強による経済のブロック化のために、高関税などによる国際競争力の弱くなっていた日本製品の輸出がさらに激減し、逆にダンピングされた外国製品が大量に日本国内に流れ込み、結果として、多くの優良企業までもが次々に潰れるという日本の歴史上空前の大倒産が始まり、大量の失業者が街に溢れだしました。

こうした失業者は郷里の農村部に多くは戻りましたが、その頃は農村部でも生糸や農産物の価格の大暴落によって、経済的困窮にあえいでいました。そこに大量の失業者が流入したため、さらに農村部は貧困に拍車がかかったのです。娘の身売りや欠食児童が続出し、日本全国で経済パニックに陥りました。

こうした中で、大量の資本を持った財閥は、中小企業を次々に吸収合併して次第に肥大化していきました。一方、経済政策に失敗した政党政治への国民の支持は、急速に失われていきました。代わって、国民の期待を担った軍部が台頭していくことになったのです。

明治時代から大正時代、そして昭和時代に入る頃にかけて日本は飛躍的な発展を遂げ、人口も急激に増加してきました。急激に増加した人口を国内だけで養うことが次第に困難になり、海外移民等も政府は積極的に進めましたが、世界での黄禍論の台頭によって政府は厳しい状況におかれるようになりました。このような社会背景のもとに、たて続けに起きた金融恐慌と昭和恐慌のために、そしてさらに経済のブロック化のために社会不安は増大し、日本国内には閉塞感が蔓延していきました。

無力で失策を続ける日本政府に多くの国民は失望し始め、逆に軍部への期待が高まってきていました。そして、もはや国内的な努力のみでは問題が解決できない状況となり、国外に活路を求める以外に無いという考えが台頭してきたのです。軍部は国民的支持を背景に自らが得意とする力による解決方法を探り、イギリスなどのブロック経済を真似て、他地域への進出によって恐慌を乗り切ろうと考えるようになりました。これが、後に始まる大東亜戦争への道となってしまったと私は考えています。また、それまでのすべての戦争に勝ち続けてきたという軍部への期待と、そして軍部自身の側にもおごりがあったように私は考えています。

ところで黄禍論 (Yellow Peril) について、少し詳しい説明をしておきたいと思います。これは主に19世紀末から20世紀前半にかけて、アングロ・アメリカ、オーストラリア、南アフリカ、ヨーロッパ、南アメリカなどに生じたアジア人(黄色人種)脅威論のことです。この頃から、中国人、日本人、インド人、その他のアジア人が、アメリカ合衆国、オーストラリア、カナダ、南アフリカなどに移民するようになり、これらの地域で勃興しつつあった産業の労働者たちの脅威となって、アジア人排斥運動が起こり、黄禍論が唱えられるようになったのです。具体的なことは書きませんが、如何に肌の色の違いだけで人間としての尊厳が当時は無視されていたかについては、関連図書で具体例をご覧になることをお勧めします。

ヨーロッパにおける黄禍論は、極めて政治的な議論だったようで、日清戦争後の日本の中国進出と、それによる中国と日本の結合がもたらす脅威を黄禍ととらえ、日露戦争期に最も脅威論は高まりますが、日露戦争が終結すると一部の知識人を除いてほとんど問題にされなくなってしまいました。しかし、その当時、日本と同盟関係にあったイギリスだけは、多くのメディアが当初から黄禍の存在は否定していました。

日露戦争後は、日本の北アメリカへの移民問題や、ベルサイユ講和会議における日本が提案した人種差別撤廃条項の挿入の問題などのために、上記の国々では黄禍論は強い影響力を及ぼし続けました。これらの国々では、中国人移民労働者と日本の軍事力が黄禍の源泉と見ていたようです。このような考え方が劇的に変化するのは第2次世界大戦後です。ナチズムに代表される人種主義への批判の高まり、日本の敗北による軍事的脅威の消滅、そして冷戦の始まりによる共産主義という新たな脅威の出現により、黄禍論は消滅していったのです。

日中戦争前後の中国の様子

当時の植民地化の進む日本の周囲での脅威の中では、日本にとっての最大の脅威はロシアの南下でした。日本の明治維新後の状況は、ロシアは南下して満州まで迫ってきていて、朝鮮を植民地化して日本にまで迫るのは時間の問題と見られていました。そのために朝鮮に独立を促し、日本と共にロシアからの脅威に備えようと促しますが、朝鮮政府には聞き入れられず、辛勝した日露戦争後に韓国を日本の一部として併合して共にロシアへと備える体制を作り上げていったという歴史があります。そして、ロシアからの防衛線として満州を押さえておく必要があり、辛亥革命で失脚した満州族である清朝の最後の皇帝溥儀を要して満州国を日本が作ることになった背景もありました。

ところで、少し時代を遡りますが、日本がロシアと戦った日露戦争での勝利は当時の世界の認識では大変なことだったと

いうことを知っておく必要があります。当時は、白人は優れた科学的知識と文明の利器を持っているので抵抗しても無駄だと有色人種は思いこんでいました。ところが、新しく生まれ変わったばかりの小さな国である日本が白人の中でも強国のロシアを相手に勝ったわけですから、世界中で驚きの声をあげました。そして、有色人種の白人に対する認識も変わっていきました。

日本に敗戦した清朝も、この戦争の結果を見てすぐに反応を示しました。教育プログラムを日本式に改め、長らく続いていた科挙の制度を廃止し、それに部分的に代わるものとして日本への留学を行うようになったのです。清朝では日本留学がブームとなり、東京には最も多いときで数万人にも清朝からの留学生が来ていたようです。その中には、孫文や蒋介石などもいました。もちろん、その他のアジア各国からも多くの留学生が日本に来ていました。自国の近代化のために当時の日本を自分の目で見たいと日本留学を目指して来ていたのです。これらの状況を背景として、日中戦争前夜の中国の様子の話に入っていきます。

清朝の時代の末期頃の中国は、外国による中国への侵略を防げず、中国の政治は混乱をきわめていました。当時は、先進国に多くの留学生が送られ、特に日本への留学生が多かったようです。こうした留学生や華僑を中心にして、清朝の支配を打倒して新しい国家をつくらうとする革命運動も盛んとなっていきました。その中心となったのが孫文でした。

日本の明治維新よりは遅れましたが、中国でも同じような革命が起こったのです。そして、長い時間がかかって現在の中国へと生まれ変わりました。その革命の最中に、日本と中国が戦争することになったのが日中戦争なのです。

1911年10月、孫文の中国革命同盟会が中心となって革命に成功し、孫文が新しい国家の臨時大総統に選出されました。そして、1912年1月1日に南京に中華民国臨時政府が発足しました。このようにして誕生した臨時政府は、大統領制を採用しました。しかし、中国に権益を持つ諸外国の干渉もあって、革命には成功したものの、その後の清朝との争いの長期化を避けるためにやむを得ずに清朝の皇帝の退位で妥協し、たった1ヶ月で大総統の地位を清朝の内閣総理大臣だった袁世凱と交代することになりました。その後、1912年夏には同盟会は国民党と名称を変えます。その後は、新しい大総統の下で専制的な政治が始まってしまいました。そのために、国民の革命運動はその後も継続していくことになりました。

1916年に、その大総統が亡くなった後は、強力なリーダーが出現しないまま、国内は混乱した時代が続きました。1917年に第1次世界大戦が始まると、欧米列強による中国への圧迫が次第に軽減されますが、その反面で日本の侵略が露骨となっていきます。他方、軽工業を中心とした中国の民族資本も発展していきました。日本の中国侵略が強化されていくにつれて、中国では北京大学を中心として反封建主義・反帝国主義運動に発展・昂揚し、反日・反軍閥感情が国内では深刻となっていきました。

第1次世界大戦開始後、日英同盟を理由に日本軍は中国の山東半島でのドイツの租借地を攻撃し、制圧・占領しました。そして、山東半島でのドイツの権益を日本が引き継いで、南満州及び東部内蒙古を日本の半植民地的な支配の下におくことなどを21ヶ条の要求として中国に要求しました。中国は拒否し続けますが、第1次世界大戦終了後の1919年パリ

平和会議で日本の要求は世界的に認められました。しかし、このあたりから日本と中国の関係は急速に悪化し始めたのです。

その後、中華民国は何人かの大総統が1～2年単位で交代し続けます。革命派は各地の農民運動を弾圧しましたし、封建的土地所有関係の改善については消極的でしたので、そのような状況を背景に1921年には国内に中国共産党が誕生し、その勢力が台頭し始めることになります。

国民党と中国共産党は対立していましたが、第1次世界大戦後の外国の侵略に対抗するために1924年1月から1927年7月まで第1次国共合作を行います。そして、第1次国共合作の終わった後、しばらくして今度は日本の中国進出が盛んになっていきました。

1931年には、日本が満州事変を起こして東北部に満州国を設立しました。さらに、1937年7月7日から日本は本格的な中国との戦争状態に突入しました。そのために1937年9月から1946年7月まで、中国では第2次国共合作が行われ、中国は連合国側として一丸となって日本と戦うことになりました。

このようにして1945年8月15日に日本は降伏しますが、蒋介石の中華民国政府は日本に対する損害賠償の請求は放棄しました。

日本の敗戦の後、しばらくすると国民党と中国共産党の対立は再び始まりました。しかし、最終的には中国共産党軍が勝利して、1949年に現在の中華人民共和国が成立しました。第1次国共合作、第2次国共合作の期間中に、中国共産党は大きく勢力を伸ばしていったのが、国民党に対する最終的な勝利に結びつきました。特に、第2次国共合作の時代には英米からの軍需物資の供給もあって、国民党側が日本との戦闘で疲弊していくのに対して、共産党は着実に軍事力を蓄えていったのが後の勝因に結びつきました。後に毛沢東は「今日、中華人民共和国があるのは日本のおかげ」とまで述べています。破れた中華民国政府(国民党)は1949年に台湾へ移ることになります。

中国本土は中国共産党による共産主義国となり、その後、朝鮮半島でも戦争が始まりました。その結果、朝鮮半島も半分は共産主義国となってしまいました。中華民国を温存し、日本の膨張を抑止したかったアメリカは、日本には勝ちましたが、日本に勝利した中華民国はその後の中国国内の内戦に負けるという結果となり、東アジアの共産主義化が急速に浸透していくことになってしまいました。

その後、いろいろと複雑な経緯がありましたが、1972年の日本の田中首相の時代に日中の国交正常化が行なわれました。そして「日中共同声明」が締結されました。その当時の中国は、毛沢東国家主席と周恩来首相の時代でした。今でも私の心にしっかりと残っていますが、日中共同声明後の周恩来首相の談話は、すべての当時の日本人の心に強い感動を与えました。8年間に渡る日中戦争で大勢の中国人の犠牲者を出しながらも、周恩来首相の言葉は大変寛大で、日本民族に対する優しさに溢れていたのです。その談話を紹介します。

周恩来首相の談話「中国人民は賠償の苦しみを深く味わったことから、日本人民が同じ苦しみにあうことを希望しない。また中国は莫大な損失をこうむったが、これは日本軍国主義者が責めを負うべきであり、日本人民もまた被害者であり、両国民永遠の友好のために戦争賠償要求を放棄する。」

これが、日中戦争前後から日本と中国の国交回復までの概略の流れです。台湾については説明は省略しましたが、複雑な歴史があり、説明は簡単ではありません。

東南アジアの歴史

明治維新と共に漕ぎだした国際社会の近代世界システムは、「植民地主義」と「人種差別」とが支配している世界でした。日露戦争での日本の勝利は、近代世界システムに虐げられていた世界の諸民族に希望を与え、その後の国際連盟設立の際の日本による「人種平等条項」の提案は否決されましたが、その後の世界には大きなインパクトを与えました。

歴史には、このような目線もあります。もっと自分の国のことについて知りたいものです。

日本とタイとの関わりの歴史の一側面

明治維新以降頃から太平洋戦争頃までの日本とタイとの関わりについて述べてみたいと思います。

明治維新当時のアジアではただ2つの独立国として、日本とタイは早くから交流を始め、明治15(1882)年には東伏見宮殿下がバンコクを訪問され、国交関係樹立について会談されました。

欧米列強の激しい植民地争奪戦の中で、アジアでの独立国は日本とタイだけという当時の情勢の中にあって、日本とタイとの国交は1887年(明治20年)9月26日に調印された「日暹修好通商に関する宣言」(日タイ修好宣言)により、正式に両国間の国交が開かれたのです。この宣言は、翌1888年に批准書の交換が行われ、正式に発効することになりました。

当時のタイは日本同様に各国との不平等条約に泣かされており、タイ政府はタイの近代化、そして近代法典の完備と国内諸制度の近代化が各国との不平等条約の改正に必須との考えを持っていました。そこで、日本や欧米の専門家多数を顧問として招聘する一方、欧米諸国へ留学生を派遣するなどして国内改革に努めていました。

タイにおける西洋諸国の侵略との闘いは、1851年に即位したラーマ4世モンクット王の時代に始まります。ラーマ4世は西洋文明を取り入れて近代化しなければ独立は危ういと、大勢の外国人を雇って国の近代化の努力を続けますが、不幸にも1868年にマラリアで急死してしまいます。ラーマ4世は「王様と私」というミュージカルや映画などで有名になった、その時の王様のことです。イギリス女性の家庭教師に教育を受けた王子様がラーマ5世なのです。この映画は国辱映画として、タイでは上映は禁止になっています。

ラーマ4世が不幸にも亡くなられたのは、ちょうど明治元年のことです。16歳の王子チュラロンコーン王子はただちに即位し、ラーマ5世と称し、西洋勢力の侵略を防ぎながらもタイ国内の近代化を急ピッチで進めました。1883年の郵便事業の開始、1894年の市電の導入、1914年の水道設備建設、等々の文明開化が試みられました。

そんな中で、タイが欧米各国から招いた20数名の法律顧問がいますが、何とその法律顧問の首席を務めたのが政尾藤

吉博士でした。彼は大正2年までの16年間、タイにとどまり続け、新法制と法典編纂の事業に取り組みました。後に、1921年(大正10年)に日本側代表として政尾藤吉公使がタイとの条約改正交渉を始めましたが、不幸にも政尾公使はバンコクで客死してしまいました。タイ政府は、博士が客死された時に国葬の礼を持って博士の恩に遇しました。このときの条約は1924年(大正13年)3月10日に新条約として締結されました。これが1924年「日暹通商航海条約」です。

政尾藤吉博士(1871～1920)について略歴を紹介しますと、明治4年に大洲藩(現愛知県大洲市)御用商人の家に生まれましたが、明治維新で没落、苦学しながら英語を熱心に勉強しました。クリスチャンとなり、明治22年(1889)アメリカのヴァンダビルト大学へ留学しました。その後、神学から法律学へ学問を移し、最後は名門エール大学法学部を卒業しました。帰国後、外務大臣大隈重信の要請を受け、シャム(現在のタイ)の法律顧問に推され、シャムの近代刑法・社会法の草案を執筆することとなったわけです。その後大審院判事を3年間務め、1912年には国王より欽賜名(プラヤー・マヒトーンマヌーパコン・コーソクン)を下賜されており、16年間在タイした後、1913年に日本へ帰国。その後、政友会に入党。1915年には愛媛県選出衆議院議員となっています。そして、1921年、タイ駐在公使としてタイに赴任し、同年8月脳溢血で急逝しました。現在もなお、タイの教科書ではタイ近代法の父として掲載されている日本人なのです。

また、近代女子教育のために設立されたタイ・バンコクのワット・ポーの近くにあるラーチニー(皇后)女学校では、国王の意向でイギリス人教師を雇う従来の習慣が変えられ、日本人女性、安井てつが事実上の校長として招かれました。1904年から3年間、安井てつは助手の河野清子及び中島富子と共に当時の貴族名門の子女約200人ほどを教えました。

安井てつ(1870～1945)について略歴を紹介しますと、明治3年2月23日、現東京都の駒込曙町の旧古河藩主土井子爵の邸内で、同藩士安井津守の長女として生まれています。明治23年に東京女子師範学校(現お茶の水女子大)卒業後、母校で教鞭をとります。その後、安井てつは1896(明治29)年イギリスに留学。帰国して母校の東京女子師範学校で教授と舎監を兼任。1904～7年、タイ最初的女子教育専門学校であるラーチニー女学院を設立、校長となってタイ近代女子教育の基礎を築いた人物でもあります。それから再度のイギリス留学をします。そして帰国後、大正7年(1918)には、同年創立された東京女子大学の学監となり、同12(1923)年、初代学長新渡戸稲造の後を受けて、第2代学長に就任。昭和15(1940)年退職、名誉学長の称号を受けました。同18(1943)年には、東洋英和女子校校長事務取扱となり、生涯を進歩的女子教育の向上に捧げました。

余談ですが、新渡戸稲造を恩師と仰ぐ河井道という大変優れた女性も当時はいました。彼女は、太平洋戦争後に占領軍の親日派のフェローズに協力して、昭和天皇の無罪を勝ち取る事に大変な協力をしています。その辺の詳しい話は、インターネットで検索してみてください。新渡戸稲造の影響力の大きさが認識できることと思います。

このように、開国したばかりの明治期の日本は、国際貢献が叫ばれている現代日本よりもはるかにスケールの大きな人的貢献をしていたのです。

タイと日本は欧米植民地主義という当時の状況の中でお互いに共感する部分が多く、大変良好な友好関係を続けていました。満州建国問題では真っ先に満州国を承認したのはタイ政府であり、その後の国際連盟での日本非難決議で唯一

棄権をしたのもタイ政府でした。

日中戦争(シナ事変)が始まった時に、当時のタイのピブン首相は日本がABCD包囲網で軍事物資の不足に悩んでいる時に、タイで生産される生ゴムと綿の全量を日本に供給してくれました。

太平洋戦争(大東亜戦争)勃発後は、ピブン首相は日本との同盟条約を結ぶと同時に、中華民国の蒋介石に対して、「同じアジア人として日本と和を結び、米・英の帝国主義的植民地政策を駆逐すべきだ」という勧告電報をさえ打っています。さらにタイ国内のインド人、ビルマ人にそれぞれの祖国の独立運動を奨励しています。そして、昭和17年1月8日、米英はタイが日本と同盟したというので、タイの地方都市の空襲を始めました。そこでピブン政権は、米英両国に宣戦布告することになります。

東条首相が開いた大東亜会議には、王族であるワンワイタヤコン殿下が出席され、その返礼もあって、昭和18年7月に東条首相はバンコクを訪れ、イギリスやフランスにもぎ取られた旧領地をタイに戻してあげました。タイ国民は躍り上がって喜んだといわれています。

一方で、タイは日本に協力する姿勢をとりながら、他方では連合国との関係を保つという巧妙な二面外交を展開して、戦後には戦勝国になり、第2次世界大戦の荒波も無事にかいくぐってきたのです。国益を考えれば当然のことで、このへんの政治の舵取りの巧みさは、日本人は学ぶ価値が大変あると私は思います。

戦時中、タイは進駐していた日本軍に20億バーツ(30億円)を貸与しており、その返還交渉に使節団が来日しましたが、顧問のソムアン氏は戦前、日本で過ごし、頭山満などにかわいがられた人物でした。当時の池田蔵相は、日本の経済事情を説明して返済の値引きを求めたところ、何と即座に了承されました。

ソムアン顧問によりますと、「日本国民は餓死寸前の時で、日本中が焼け野原でした。そして皇族も華族もいなくなり、有力な軍人と賢明な役人と高潔な政治家は牢に叩き込まれて誰もいません。」という状況だそうで、使節団の団員は口々に「こんな気の毒な日本を見られているか」と言い、池田勇人蔵相の提案に即座に応じたのでした。

ソムアン顧問と、その父で戦前に経済相をつとめたプラ・サラサス氏は、さらに「あまりにも日本の少年少女がかわいそうだ」と言って、私費で象の「花子さん」と米10トンを贈ってくれました。

さらに、プラ・サラサス氏はマッカーサーと直接あって、「将来、アメリカはソ連とかならず対決する日が来る。その時、力になるのは日本である。日本をいじめる事は、アメリカのためにも、アジアのためにも、ならない」と進言しています。

ククリット・プラモード・タイ元首相は「日本のおかげでアジア諸国はすべて独立しました。日本というお母さんは難産して母胎を損なったが、生まれた子供はすくすくと育っています。こんにち東南アジア諸国民が、米・英と対等に話ができるのはいったい誰のお陰であるのか。それは身を殺して仁をなした日本というお母さんがあったためです。12月8日は我々に

この重大な思想を示してくれたお母さんが一身を賭して、重大決心をされた日なのです。我々はこの日を忘れてはならない。」という談話を残しています。

また、元タイ副首相・元外相 タナット・コーマン氏は「第二次世界大戦で日本が独立を助け、自由をもたらした」と感想を述べています。

タイと日本との関係では、有名な話としてこのような話もあります。

現在の平成天皇陛下が皇太子だった頃、昭和39年に訪問されたタイで山奥の苗(ビョウ)族のタンパク質不足の問題をタイ国王からお聞きになりました。

魚類学者としても有名な陛下は、その後、飼育の容易なティラピアという魚50尾を国王に贈られたのです。現在、この魚はタイ国内でさかんに養殖され、国民の栄養状態改善に貢献するばかりでなく、1973年にはバングラデッシュへの食料支援として50万尾も贈られたと記録されています。

このティラピアの漢字名は「仁魚」といいますが、タイの華僑系市民がこの話に感動して、陛下のお名前(明仁)をとって命名したとのことでした。

このようにタイと日本は120年以上の友好と同盟の歴史を持っているのです。それは政尾藤吉博士や安井てつさんのような人々の志によって、そして敗戦時にはソムアン氏、プラ・サラサス氏のような真心によって培われてきたのです。

タイのカンチャナブリで有名な日本人

「戦場に架ける橋」のあるタイ西部のカンチャナブリでは、「永瀬隆」という方は大変有名な日本人となっています。

こちらの多くのタイ人が名前を知っている日本人ですが、私は写真は拝見しましたがお会いした事はありません。何度も名前を聞くうちに、偉大な日本人として噂の永瀬氏の全体像が知りたくって、インターネットで色々調べてみました。

何故、偉大な日本人として尊敬されているのか、何が彼の行動の動機となっているのか、こんなことに大変興味を持ったわけなのです。こちらの人々の話は断片的で、どうしても彼の全体像が見えないのです。

永瀬隆氏は、1918年、岡山市の生まれで、青山学院を卒業されています。大学卒業後、第二次世界大戦で陸軍通訳(職名)を志願し、南方軍総司令部付を経てタイ国駐屯軍司令部付(バンコクの軍司令部の3課2課で情報関係の仕事)となり、1943年9月、泰緬鉄道建設作戦要員としてカンチャナブリ憲兵分隊に出向勤務を命ぜられ、捕虜の思想動向などの情報収集や防諜任務に当たっておられたそうです。

1943年9月というと、泰緬鉄道の線路敷設工事はタイのノンプラドックからは1942年6月に、ビルマのタンビューザヤットからは1942年10月に工事が始まり、1943年4月からは「スピード」という現地語化した日本語で有名な大本営からの工期短縮命令により労働が一層苛酷さを極め、1943年10月17日、タイのコンコイタで両方から進められてきた鉄道はついに接続して泰緬鉄道全線が完成しましたから、工事完成の1ヶ月前の赴任ということになります。

泰緬鉄道415kmのうちの100kmはジャングルに覆われた山々を通るルートで、全体としては300以上の橋脚の建設、何ヶ所かの岩山の切り通し等があり、猛暑や雨季の激しいスコールが連日襲い、食料や医薬品の不足、重労働、日本軍による虐待、さらにはコレラやマラリヤなどの伝染病にも見舞われ、多大な数の死者を現地で働くアジア人労働者や戦争捕虜の人々の間に出しながらも、当初の軍の計画より2ヶ月遅れの17ヶ月間で脅威の完成となった鉄道だったのです。

参考までに、無謀の極みと言われるインパール平原でのイギリス軍を攻撃するためのインパール作戦は1944年3月上旬から開始され、悲惨な戦場となっていたこの作戦の中止命令が大本営から出たのは7月上旬のことで、前線に知らされたのは7月末頃のことでした。その後、日本兵の死者が途中で大勢横たわることとなった地獄の退却行が始まったのです。

こういう時期のカンチャナブリへの赴任ですから、鉄道建設の現場の実体はほとんどご存知でなかったことと思います。

日本の敗戦後、永瀬氏はカンチャナブリからバンコクの軍司令部に帰って来ると、軍司令部は終戦処理司令部に変わっていたそうで、連合軍(英印軍)命令により戦争墓地委員会の通訳となるよう命じられたそうです。

永瀬氏は墓地捜索隊とともに、文字どおりカンチャナブリのジャングルの中を、草の根を分けて戦争捕虜の人々が亡くなられた墓地を捜索して廻り、朽ち果てた十字架を目印に泰緬鉄道沿線の墓地の捜索を続け、3週間にわたり捕虜の方々の遺体探しに協力されたそうです。

最初はこの仕事に反発心もあったそうですが、3週間も経った頃には日本軍は大変なことをしたんだという現実を目の当たりにして深く反省をするようになったそうです。この時、ご自身で目撃された犠牲者の悲惨な状況に、いつか必ず捕虜の方々の冥福を祈るための巡礼に戻ろうと決意されたそうなのです。

鉄道建設当時は、ビルマから18万人、マラヤ(シンガポールを含む)から8万5千人くらい、そしてインドネシアから4万5千人、つまり合計で30万人ぐらいの現地労務者を日本軍は鉄道建設のために連れていったと永瀬氏はおっしゃっています。それに日本軍が1万2千人ですから、戦争捕虜を含めると全部で約40万人位の人々がこの大変な難工事の続いたジャングルの中にいたわけなのです。

当時、彼の勤務していたカンチャナブリの鉄道建設隊は、現在は陸上競技場になっており、多くの人々が訪れるカンチャナブリ連合軍墓地前の道路の向かい側に位置しています。現在のカンチャナブリ連合軍墓地は、戦時中は捕虜収容所があったところなのだそうです。

搜索を終えて終戦処理司令部に帰ってきた後、さらにいろんな通訳業務をやって1年近く抑留され、1946年7月に日本へ帰って来られました。

さらに、永瀬氏はこのような話もされています。捕虜というのは戦争中に捕まった者が捕虜で、戦争が終わって捕まった者は投降兵といわれていたのだそうですが、終戦当時は日本軍はタイ国内には2万人おり、さらにインパール作戦に参加した30万の日本軍のうちの10万人がタイ国内に逃げ帰ったそうなのです。合計12万人の日本の投降兵が帰還船(一隻に3千人位だったそうです)にてタイから祖国日本へと出発することになったわけですが、その際にタイ国政府は敗戦国日本に帰る兵士が満足な食料も口にすることが出来ないだろうと心配して、12万人の兵士各人に、飯盒 1 杯の米と、中盒には当時貴重品であった砂糖(ザラメ)をお土産として寄贈してくれたそうなのです。

終戦処理司令部にいた永瀬氏が帰国することになったとき、どういわけか日本兵の帰国作業を指揮していた永井海軍少佐が永瀬氏だけを呼んで、「永瀬通訳、このご恩は決して忘れてはいかんぞ」と訓戒されたそうです。なんでそんなことを私に言うのかと永瀬氏は不審に思っていました。日本へ帰国して3年後に、知人から永井海軍少佐は12万の日本軍を全部日本に送り帰した後、1番最後の帰国船で日本へ帰る途中、台湾とフィリピンとの間のバシー海峡で行方不明になられたという話を聞いて、瞬間に「あっ、これは入水自殺された」と理解したそうです。そして、あのときの言葉を永瀬氏は、永井海軍少佐が自分を選んで遺言を残されたと思ったそうです。

バシー海峡といえば、戦時中の日本の輸送船の通路だったわけで、日本からきた何百隻という輸送船があそこの海峡でアメリカの潜水艦に沈められています。バシー海峡には55万人もの日本の兵隊が戦争に行く途中で水没しているのです。

永瀬氏はそのことが一生忘れられないそうで、さらにタイ国政府の温情に対しても恩返しをしなければならぬと思いつけていたそうです。

帰国後、永瀬氏は、千葉県立佐原第二高校に勤務したが、体調すぐれず、帰郷し、岡山県倉敷市で私塾青山英語学院を経営されました。生徒数も500名を超え、経営も安定してきた1968年、永瀬氏は連合軍兵士の眠るタイ中西部のカンチャナブリを訪れ、連合軍墓地の十字架に深く頭を垂れました。

そのとき、それまでの心のわだかまりがずっと消え去ったという実感が得られたそうで、その帰途、日本大使館に立ち寄ってタイ人の留学生を2名受け入れることを約束したそうです。このようにして、永瀬氏の「飯盒一杯のお米」への恩返しが始まったのでした。

その後20年間、約30名のタイからの留学生の世話を続け、1986年2月20日の永瀬さんの誕生日には連合軍兵士の霊を慰める為にクワイ河鉄橋の近くにクワイ河平和寺院を有志の方々と共に建立されました。そして、同年の12月には貧しい家庭や少数民族の子どもたちへの援助活動を安定的に継続する為にクワイ河平和基金を設立されました。運営は、

永瀬さんが面倒を見た留学生たちがタイに帰国し、一人前になって各方面で活躍しているので、彼らに任せることにされました。小・中・高・看護学生に奨学金の授与を続けているそうです。

また、1997年よりクワイ河医療診断所を設立。カンチャナブリ県の過疎地域で巡回診療事業を実施されています。さらに2000年には、高価な眼鏡が買えずにいる同県の貧しい人たちに、岡山・香川県内の企業や市民の協力で眼鏡を集め、視力を測ったり、検診も行いながら、2500名の住人に眼鏡を寄贈されました。また、2002年の4月には、スリーパゴダパスのあるタイ・ミャンマー国境付近に「平和祈念堂」を有志の方々と共に建てられています。付近のダム湖に日本兵400～500人の墓が水没し、2カ所の洞窟では計130人ほどが当時は自決されたそうで、それらの日本兵と元捕虜双方へ慰霊の念を込めて建てられたそうです。

一方、メーホーソン県のクンユアム郡では、2000年6月に日本兵の慰霊のために念仏堂「クンユワム星露院」を建立。そして、同時に老人ホームも建設・寄贈されました。クンユアム郡とムアン郡との中間のホイボン村の近くには日本兵が多く埋葬されているために慰霊碑を建立、クンユアムのワットモイトにはタイと日本の交流のための会館を建設、クンユアム郡のすべての学校には数年前から奨学金を提供され続けているのです。

と言いますのは、戦時中にクンユアムの人々は怪我や病気で苦しむ日本軍兵士を助けたり、そして、亡くなれば手厚く埋葬しました。村人は敗戦の日までずっと日本軍を助け続けたそうです。また戦争も終わろうとする時、ビルマから敗走してくる日本兵には食料や薬などが何も無かったので、この病気や怪我に苦しむ日本兵を村人は無償の心で助けていたそうです。この辺りは「白骨街道」とも呼ばれましたので、ご存知の方もいらっしゃると思います。これが永瀬氏がクンユアムの人々に援助を続ける理由なのだそうです。

永瀬氏は、「死の鉄道建設」といわれる泰緬鉄道建設にまつわる悲惨な出来事を通訳という微妙な立場に立たされながらつづきを見てきた数少ない証人の一人として、犠牲者となった人々への追悼の思い、タイ政府から受けた恩情への感謝の気持ちが、永瀬氏のこれまでの活動を支える原動力となっているそうなのです。泰緬鉄道沿線415kmでは、埋葬220カ所、約1万3千人と言われる犠牲者の発掘に立ち会われたそうです。そういうわけで、タイにある連合軍戦争墓地など妻の佳子さんと2人での慰霊の旅は、2004年夏現在で122回を数えているそうです。

マレーシアの独立まで

こちらで観光用に販売されている多くの「死の鉄道」の英語の本では、日本軍のマレー・シンガポール作戦であつという間にシンガポールが占領されたことは書かれていますが、その背景に迫っている本は未だに見かけた事はありません。

当時の日本軍の快進撃の背景のお話と、その後にマレーシアが独立に至った一側面をお話してみたいと思います。

1941年12月8日午前1時30分、マレー半島での太平洋戦争が始まりました。マレー北端、タイとの国境近くにあるコタバルに直ちに日本軍が上陸を開始しました。ここにある飛行場を占領すれば、航続距離の短い陸軍機を活用して、マ

レー半島への進攻作戦が一举に有利になるからです。

日本軍上陸の報を受けた英艦隊司令部は、日本船団を撃滅できれば、上陸軍を潰滅させ、日本軍の出鼻をくじく事ができると考え、12月8日の20時25分、英国の最新鋭戦艦で不沈艦と呼ばれたプリンス・オブ・ウェールズ、及びレパルスの2戦艦が駆逐艦4隻を率いて、援護の航空兵力は無いままシンガポール港を出撃していきました。すでにこのとき、イギリス軍の各航空基地は日本軍機の攻撃でほとんど機能を失っていたからです。

1938年末から始められた米英両国の太平洋共同作戦計画では、「対日戦生起の場合、イギリスはシンガポールに艦隊を派遣し、アメリカはハワイに艦隊を集結して作戦する」という基本方針が確認されており、この出撃はそれに基づいた行動だったのです。

プリンス・オブ・ウェールズは、舷側は最大15インチの分厚い鋼板を腹巻きのようにめぐらしており、また対空防御にしても40ミリの対空機関砲「ポムポム砲」48門の発射弾数は1分間に6万発の能力を有し、この弾幕を突破できる攻撃機はまずあるまいと当時は考えられていました。

一方、上陸用輸送船団護衛の日本の艦隊は、空母無しの、巡洋艦8、駆逐艦12、潜水艦16という構成でした。戦艦の主砲は一発で駆逐艦を沈められますが、駆逐艦の主砲では何発命中しても戦艦は沈められませんので、このような状態での艦隊決戦では日本は勝てないと見られていました。

ところが、この海戦の勝敗はあつけなく日本軍の勝利で決着がついてしまいました。

この勝敗は、軍艦は航空機には勝てないということを証明した初めての戦闘でもありました。日本海軍は、サイゴンなどベトナム南部に約100機の陸上攻撃機(陸攻)を集め、航空戦力で英艦隊を撃滅しようという当時の常識からはかけ離れた戦術をとって攻撃を開始したのです。日本最新鋭の一式陸攻は最高速度は428キロ、航続距離4200キロで、当時としては世界超一流の性能でした。性能追求の陰では防弾能力が犠牲とされ、被弾すると炎上しやすいという特徴もありました。しかし、それを上回る戦闘員の操縦技術の訓練で英艦隊を壊滅させてしまったのです。

このようにして、マレー半島に上陸した日本軍は怒涛の快進撃でシンガポールを目指して南下していきました。

日本軍の進撃を阻止するために、イギリス軍はジットラ・ラインを構築して日本軍の進攻阻止を図りましたが、2～3ヶ月は破れないと自負していたジットラ・ラインを日本軍はたった2～3日で突破してしまいました。イギリス軍にとっては大変な驚きでした。当時のジットラ・ラインといえば、地雷、戦車壕、鉄条網、そして戦車90、野砲山砲60門、兵6千人で固めていた陣地だったのです。

何で日本軍は簡単にジットラ・ラインを突破できたのかと言いますと、日本兵のほとんどがジットラ・ラインのことを知らず、しかもこれは大部隊対策の布陣でしたが、このラインに最初に飛び込んだのは佐伯挺進隊約6百人で、この部隊は奇襲

に次ぐ奇襲を繰り返し、猛烈な反撃にひるむことなくジッタ・ラインの綻び部分である湿地帯を縦断していったことにあります。

後続部隊も、佐伯隊を全滅させないために、佐伯隊の後に一気に続いて突破していきました。野戦や突撃戦、側面攪乱戦や奇襲などを得意とする日本軍の戦い方にイギリス軍は不慣れだったために、簡単に突破され、日本軍の怒涛の快進撃となったのです。イギリス軍は日本軍の4倍という総勢約14万人ですが、初戦においては日本軍の戦術の前には無力だったのです。

迎え撃つイギリス軍の特徴は、マレー半島北部をインド軍との混成部隊に、中部をオーストラリア軍に、最南端のシンガポールをイギリス軍とマレー義勇軍にという構成でしたが、日本軍は開戦前からマレー青年同盟やバンコクのインドの独立連盟と秘密協定を結び、反英運動決起を呼びかけていました。

日本軍がマレー半島を怒涛の快進撃を始めると、逃亡するインド兵を投降させ、インド独立連盟に確保しながら、そして彼らからイギリス軍の情報をもらいながら進撃していきました。マレー青年同盟もマレー義勇軍からの離脱投降をマレー人に対して呼びかけ続けました。

そんな日本軍もマレー義勇兵のうちの中国系華僑グループによる抗日義勇軍には強圧的な対応で臨み、彼らの激しい抵抗とともに悲劇も生まれていきました。

中国系華僑グループによる抗日義勇軍(ダリー・フォース)は、日中戦争の様子を知っており、重慶政府(国民党)からの援助や中国共産党からの指導も受けていたようで、彼らの激しいゲリラ活動に日本軍は苛酷な処置で対処していました。

一方で、中国系華僑グループによる抗日義勇軍の活動はマレー系住民にも刺激を与えたようで、彼らのマレー人としての民族意識も高まり始めました。

マレー人には親日派の人々が大変多いのですが、マレーシアの独立の歴史に当時の日本はどのように関わっていたのでしょうか。

マラヤ半島における植民地支配は、1511年にポルトガル、1641年にオランダの侵略を受けた後、1786年にはイギリス東インド会社がケダ州のスルタンからペナン島の割譲を受け、その後1795年から1941年までは英国の統治が行われました。

イギリスは植民地開発に際し、アマゾンから天然ゴムの苗木をシンガポールに送り、植林、ゴム園の開発とスズ鉱山の発掘に取り組みました。そして、その労働力確保のために、インド・中国から大量に労働者が送り込まれ、現在のマレーシアの複合民族社会の形成の始まりとなりました。

1942年から1945年の日本の敗戦までの間は、マラヤ、シンガポールは一時日本軍政の支配下におかれていましたが、1945年9月、日本の敗戦と共に再びイギリス軍政が復活しました。

イギリスは「マラヤ連合」案として、マレー系・中国系・インド系の平等な市民権を基礎とする自治を目指しましたが、この案に対してマレー系住民の側の猛反発を受け、次に「マラヤ連邦」案に修正されました。この修正案は、簡単に言えば、長い間マレーに居住していない華僑には市民権を与えないというようなものでした。

このようにして、1948年2月1日、イギリスがマレー人の特別な地位を認めたマラヤ連邦が発足し、その後の独立への運動を経て1957年8月31日にイギリス連邦内での立憲君主国として念願の独立を果たしていったのです。

当時はシンガポールもイギリス連邦内の自治領でした。マラヤ連邦もシンガポールも左派勢力の急伸ぶりに悩んでおり、そしてまた、シンガポールは独立を果たしたいこともあって、マラヤ連邦に参加しないかというマラヤ連邦首相の呼び掛けにすぐに賛同しました。両国の首相は、両地域とサラワク、サバとを一括して、マレーシア連邦として1963年9月16日に新しい国が成立しました。

サラワクやサバにも呼びかけたのは、シンガポールは中国系の人口が多いのでマレーシア連邦としての人口構成上大きな変化が生じるためなのです。

マレーシア連邦が結成されて間もなく、マレー人優遇政策をとる統一マレー人国民組織(UMNO)と、各民族平等主義をとる民族行動党(PAP)との間で対立が大きくなりました。そこで当時のラーマン首相は PAP の中心であり、勢いの強かったシンガポールを分離・独立させることにしました。1965年8月10日のことで、現在のマレーシアの領土はこのときに定まったこととなります。

マレー人の人々は親日的な人が多いのですが、それは白人による長い植民地時代の中で、日露戦争で始めてアジア人が白人に勝利したことで日本に対する憧れに近い気持ちがあったこと、進攻してきた日本軍の存在は開放者として見えたこと、そしてマレーシアのインド人にとっては開放者として見えた事、一方でマレーシアの華僑系の人々は抗日運動が激しかったのですが、このような国内での民族運動の影響がマレー人の人々の心に民族意識の火をつけた結果となったのではないかと私は考えています。

当時の戦争での日本側の東南アジア各国に対する考え方は色々あったことは承知していますが、大事な事は相手がどのように受け止めているかということだと私は思います。この面からの日本の歴史も、考察して見る価値はあるのではないのでしょうか。

インドの独立まで

タイのカンチャナブリは太平洋戦争中に日本軍が作った泰緬鉄道が、現在ではナムトック線としてバンコク・ノイ駅からナ

ムトック駅まで現存する路線として運行されています。多くの世界からの観光客を集めて賑わっている路線です。

太平洋戦争中に、ミッドウェー海戦の日本軍の大敗北の結果としてミャンマーの日本軍への軍需物資の供給が海路を遮断されて孤立し始めました。孤立していたミャンマーの日本軍への物資補給のため、そして日本の戦史上で最も愚かな作戦といわれるインパール作戦に間に合わせるために、泰緬鉄道は急ピッチで建設され、その結果として多くの犠牲者を出した軍用鉄道となりました。

インパール作戦はおろかな作戦でしたが、しかし、インドにとっては日本に多大な勇気を与えられた作戦でもありました。中国や韓国のように歴史を歪曲して外交の道具にする国もあれば、インドのように歴史の真実に未だに感謝している国々もあるのです。今回は、そのようなお話をしたいと思います。

ところで、カンチャナブリ連合軍墓地には入り口ゲートに11人のインド兵の名前が刻まれています。墓地内にはお墓はありません。墓地内には、イギリス、オーストラリア、オランダの白人の人々のみなのです。アメリカ兵は戦後すぐに母国に持ちかえられたという事情がありますので、現地に墓は存在しません。私はこのインド兵に対する扱いは、これも人種差別の1つと考えていますが、真実は如何なものなのでしょうか。

平成9年9月12日、東京の代々木公園野外ステージで日印親善協会による「インドの夕べ」が開催されましたが、そこでインド独立を記念してインド側代表の最高裁弁護士ラケッシュ・デヴィーディ氏が「インド独立の為に日本人が共に血を流してくれたことを忘れません」と、インパール作戦での日本軍の行動を賞賛したことはご存知の方もいらっしゃると思います。

これはどういうことなのかご存知でしょうか。太平洋戦争開始直前になりますが、大本営参謀藤原岩市陸軍少佐はマレー半島でのイギリス軍の中核を占めるインド兵に対して投降工作を行い、それを将来のインド独立の基盤とする任務が与えられました。

インドは17世紀初頭よりヨーロッパの植民地主義の標的となり、18世紀にはベンガル地方で1千万人、19世紀には南インドで1千5百万人が犠牲になり、太平洋戦争当時はイギリスの植民地となっていたことは皆様ご存知だと思います。太平洋戦争に備えて、連合軍の兵士としてイギリスの命令でインド兵も対日本戦に動員されていたのです。

少し時代を遡りますが、日露戦争における日本の勝利は、白人に支配される事を当然とされていた有色人種が白人の軍事大国に大勝利を収めた世界史上初めての戦いであり、日本が大国ロシアを破ったときはインド全国民は非常に刺激され、大英帝国をインドから放逐すべきだという独立運動が全インドに広がったそうです。このような伏線がインドの人々の心の中にはありました。

太平洋戦争開戦後、日本陸軍はイギリス軍をなぎ倒して破竹の勢いでマレー半島を南下して行きました。その快進撃の内容は、前回のマレーシア独立の経緯のお話で一部だけ触れました。その過程で日本軍は200名のインド投降兵の身

柄を預かることになります。藤原少佐は、インド兵達と共にインド料理を手づかみで食べ、彼らを驚かせたそうです。イギリス軍の中では、こうした事は決してなかったからです。このようにして、藤原少佐はインド兵たちにこの戦争が長年、欧米に支配されてきたアジア独立の絶好の機会であり、インド投降兵を組織してインド国民軍を創設すべきだと説き続けました。

こうして昭和16年12月末に発足したインド国民軍は、マレー半島各地でイギリス軍中のインド兵を説得して、次々と自軍に加え、シンガポール陥落時には数万人の規模に達していたそうです。彼らがイギリス軍の情報も日本軍に伝えたために、日本軍は奇跡の快進撃が出来たのです。

インド独立の志士と呼ばれるのはチャンドラ・ボースですが、彼はイギリス官憲の弾圧を逃れて当時はドイツにいました。昭和18年5月、日本に移って東条首相からインド独立支援の約束をとりつけると、彼はシンガポールに乗り込んで行きました。そして、インド国民軍総帥の地位につき、さらに自由インド仮政府を作って、英米に宣戦布告したのです。

ここで、チャンドラ・ボースが登場するまでの説明をしておきたいと思います。チャンドラ・ボースが登場する陰には、多くのインド人の志士たちがいました。ビハリ・ボース(明治19年生まれ)もその一人で、インド国民会議派のなかでも急進派に属し、早くから武力による闘争を主張してきました。大正4年に北インドで独立蜂起を計画しましたが、計画が事前に漏洩し、英国官憲に追われたため日本へ亡命しました。

その後、頭山満らの尽力で中村屋の創始者・相馬愛蔵邸に匿われました。ビハリ・ボースは亜細亜各国の革命家と親交を深め、日本でも「大亜細亜協会」「東亜建設国民連盟」などと繋がりを持ち、「インド独立連盟(I I L)」を設立しました。太平洋戦争開始後の昭和17年、ビハリ・ボースは日本政府に対して、ドイツに亡命していたチャンドラ・ボースを日本に呼ぶ事を要望し、それを翌18年5月に実現させました。

2人のボースは東京で会談し、ビハリ・ボースは「インド独立連盟(I I L)」の全権をチャンドラ・ボースに委譲しました。ビハリ・ボースは相馬愛蔵の娘と結婚して日本に帰化、一男一女をもうけましたが、後に長男・正秀は沖縄決戦で戦死しています。

一方、チャンドラ・ボースの方ですが、彼はケンブリッジ大学に留学し、帰国後にインドの独立運動に参加しました。28歳でカルカッタ市長に就任し、後に国民会議派の議長にも就任しました。ジャワハル・ネール(後の首相)と共に反英運動を続け、幾度も獄舎につながれましたが、昭和16年1月16日、捕らえられていたボースは英官憲の目を盗んで逃亡し、アフガニスタン、カブールを経てドイツ領に逃れていました。

このような経緯でチャンドラ・ボースはインド国民軍総帥の地位に就くことになったのです。昭和18年6月26日、ボースは日本を立つ際に日本国民向けに次のようなメッセージを残しています。「日本の皆さん、今から40年前に一東洋民族である日本が、強大国のロシアと戦い、大敗させました。このニュースがインドへ伝わると昂奮の波が全土を覆い、旅順攻略や日本海海戦の話題で持ちきりとなり、インドの子供達は東郷元帥や乃木大将を尊敬しました。(中略) 日本はこの度、インドの仇敵イギリスに宣戦布告しました。日本は私達インド人に対して独立の為の絶好の機会を与えてくれました。」

7月2日、チャンドラ・ボースがシンガポールのカラン飛行場に到着しますと、そこには日本の陸軍特務機関によって創設されたインド国民軍13,000人を代表する一個大隊が整列してボースを待っていたそうです。

昭和19年1月のインパール作戦はこのようにして始まりました。インパール作戦は、ボースがインド解放のために「デリーへ」の合い言葉のもとにすべてをかけた戦いでもあったのです。しかし、イギリス軍は日本軍に数倍する兵力を用意しており、また、雨期に入り、そして日本軍への物資補給が続かなかった事もあって日本軍は惨敗してしまいました。この戦闘に参加した日印10万余の将兵の内、日本軍の死者は3万人を数え、戦病者は7万人、またインド国民軍も8千人の犠牲者を出してしまいました。

現在、過去の激戦地となったコヒマでは、日本兵が倒したイギリス軍戦車を今でも勇気のシンボルとして大事に保存されているそうです。また、インパール手前のロトパチン村には村民たちが作った日本兵の慰霊塔があり、インド独立のための日本兵の勇ましい行動に対して毎年供養が続けられているそうです。ロトパチン村長は、私たちはいつまでもこの壮烈な記憶を若い世代に伝えて行くために、ここに日本兵へのお礼と供養のために慰霊祈念碑を建てて、独立インドのシンボルとしました、と語られています。

ところで日本の敗戦後、イギリスはインド国民軍に参加した約2万名の将兵を反逆罪で軍事裁判にかけようとしたが、ガンジー、ネルー率いる国民会議派は、「インド国民軍将兵はインド独立のために戦った愛国者である」として、インド全土での反英運動を展開しました。

イギリスは、約2年間弾圧を続けて数千の死傷者を出しましたが、ついにインドの独立を認めざるを得なくなりました。こうした経緯から、インドは戦後の日本に対してきわめて好意的で、日本に対する懲罰的な条約に反対してサンフランシスコ講和会議への参加を拒否し、戦争賠償の請求は放棄し、また東京裁判でもインド代表のパール判事が、ただひとり公正な立場から「日本無罪論」を唱えたことはご存知の方は多いと思います。さらに復興後の日本の国連入りをネルー首相は強力にバックアップしてくれました。

ボースは、終戦の混乱の中で台湾で事故死しますが、インド政府は独立50周年を機にインドの国会議事堂の構内にボースの銅像を建て、また誕生日の1月12日をインド共和国の正式の祝日としました。東京都杉並区の蓮光寺にはボースの遺骨が手厚くまつられており、1957年にはジャワハルラル・ネルー首相が、1958年にはラジェンドラ・プラサット大統領が、1969年にはインディラ・ガンジー首相が、そして1995年にはムカジー外相夫妻が蓮光寺を訪問されています。

なお、東京都府中市の多磨霊園には、ビハリ・ボース(坊須家)の墓もあり、彼は「顕國院殿俊譽高峰防須大居士」として昭和20年1月21日に、60歳で亡くなられています。長男である故陸軍中尉「防須正秀」さんは26歳の若さで沖縄戦でお亡くなりになられており、同墓地で永眠されています。

色んな本に目を通しますと、大本営としての思惑とは別に、直接現場で動いていた人々は大変純粋で日本人としてのア

イデンティティがはっきりと認められます。大東亜の思想に燃えた先人たちの熱い心が現在の日本の財産となっている国々も確かにあるのです。それが、現在の日本では歴史の表舞台から埋もれてしまいつつあるのが残念です。

私の紹介は埋もれつつある歴史の 1 断面に過ぎませんので、全体像としての公平な見方は読者の皆様がお考えください。

ビルマの独立まで

皆様方は次の歌をご存知でしょうか。

「守るも攻むるも鋼鉄の 浮かべる城ぞ頼みなる
浮かべるその城日の本の 皇国の四方を守るべし
まがねのその艦日の本に 仇なす国を攻めよかし」

これは日本の軍歌「軍艦マーチ」です。かつては日本海軍の誇りの名曲でした。

何でこんなお話から始めるのかと言いますと、ミャンマーでは3月27日の国軍記念日になると、全国のミャンマー国軍が首都ヤンゴンに集まって盛大なパレードを繰り広げますが、このパレードではいきなり今紹介した「軍艦マーチ」から式典が始まっているのです。続いてミャンマーの軍楽隊は「歩兵の本領」「愛馬進軍歌」など、昔の日本の歌を次々と演奏していきます。これはいったいどういうことでしょうか。

実は、ミャンマーは大変な親日国家なのです。ミャンマーでは、政府の高官からジャーナリストに至るまで「ミャンマーが今日あるのは、日本のおかげです。日本のおかげで、英国の圧制を逃れ、独立を果たすことができました。我々は深く日本に感謝しています。」と多くの人々が考えているそうです。

日本の先の戦争のことを自虐的に考えている人や、中国や韓国からの情報をアジア全体の代表する声と考えている人は、きっとわけがわからなくなると思います。

ミャンマーは19世紀に3度にわたってイギリスの攻撃を受けました。ついに1886年にイギリスの植民地とされ、そのとき既にイギリス領であったインドの一州に組み込まれてしまいました。ビルマ(当時の呼称)の国王夫妻はイギリス領スリランカに流刑され、その地で死亡しました。そのために王制は途絶えてしまいました。王子は処刑され、王女はイギリス軍の士官の従卒に与えられてしまいました。

その後の悲劇を、ミャンマーのバー・モウ元首相はこう書いています。「外国人による搾取は上層から下層まで、あらゆる方面で暴虐さを加えていた。巨大イギリス企業は上等の部分すべてを独占し、インド人と中国人の商人たちがそれに続いて中級の部分をほとんど手に入れてしまっていた」。これはバー・モウ元首相の著書『ビルマの夜明け』の一節です。

そして植民地下のビルマ人は、チーク材の切り出しなどの重労働にこきつかわれました。現在もミャンマーでは先端の尖っていない鎌や包丁が売られていますが、これは植民地時代にイギリス人に抵抗する武器にならないようにした名残だといえます。こんな悲惨な状況を一転させたのが日本軍のビルマ進攻、また日本によるビルマ独立志士たちの育成でした。今後は、ビルマとして話を進めていきます。

少し話は横道にそれますが、1904年から1905の間、日本は日露戦争を戦いました。誰もが、アジアの小国、日本の敗戦を予想していましたが、その予想を裏切って世界最強の軍事大国ロシアに陸と海で日本は勝利をおさめました。有色人種であるアジアの国が白人をやっつけてしまった知らせを聞いた他の有色人種たちは歓喜し、こぞって日本に学び始めます。

日露戦争後の日本には、アジア各国からの留学生が溢れていました。その中の一人にビルマの僧オッタマがいました。オッタマ僧正は抗英独立運動をおこなって投獄されたこともある人物で、日本にやってきたのは1907年のことでした。

彼は3年間日本に滞在して取材した内容を『日本』という本にまとめ、ビルマで発刊しました。その中で、「我々も仏陀の教えを中心に青年が団結、決起し、日本に頼れば、必ず独立を勝ち取ることができる。」と主張しています。

その後もオッタマは、ビルマの完全自治を要求する運動を起こし、イギリス政府によって投獄されるなど、何度も投獄、出獄を繰り返し、ついに1939年に獄死してしまいますが、その反イギリス精神はビルマ独立の志士たちに受け継がれていきました。

オッタマに受け継がれた若き志士の1人に、タキン党の青年で、のちに「ビルマ建国の父」と呼ばれるオン・サンがいます。オン・サンとは、現在ミャンマーで活躍しているアウン・サン・スー・チー女史のお父さんに当たる人です。

1930年代後半に、若き志士たちタキン党を中心に反イギリス運動は国民的盛り上がりを見せますが、イギリスは独立運動の大弾圧を始め、志士たちの多くが逮捕、投獄されてしまい、これを逃れたオン・サンは独立蜂起のため日本への亡命を希望していました。

当時の日本は、英米によるビルマルートからの中国の蒋介石軍への軍用物資の援助の遮断が日中戦争早期終結のための不可欠の問題になっていましたので、日本はビルマ青年たちを支援して、ビルマからイギリス勢力を追放するためにビルマ独立を達成しようと考えたのです。

1940年、日本陸軍は鈴木敬司大佐をビルマに派遣、オン・サンらを救出し、大佐の故郷である浜松に亡命させます。そして、鈴木敬司大佐を機関長としたビルマ独立のための「南機関」はビルマ独立運動の中核となるビルマ人志士30人をひそかに日本に脱出させ、彼らに武装蜂起に必要な軍事教育をし、その教育訓練の終わったビルマ人志士を再びビルマに潜入させ、反イギリス運動を起こしてビルマ独立政府の樹立を宣言させ、蒋介石を支援するビルマルートを完全に

遮断することが目的でした。

このときの30人が、後にビルマの独立と建国の英雄として現在呼ばれている「ビルマ30人志士」というわけです。

1941(昭和16)年、大東亜戦争の開戦とともに、タイのバンコクで30人志士を中心に「ビルマ独立義勇軍」が結成されました。

義勇軍の司令官には青年たちが心から慕う鈴木敬司大佐が就任しました。オン・サンは提案で鈴木大佐は純白のビルマの民族服＝ロンジー姿で白馬にまたがり、ビルマ民衆の前に登場します。これはビルマの伝説で、イギリスに滅ぼされたアラウンバヤー王朝最後の王子が、いつかかならずボモージョ(雷帝のこと)となって、白馬にまたがり、東の方角からやってくる。そしてイギリスの支配からビルマを解放してくれるというボモージョ伝説を演出したものであったそうです。

ビルマ民衆は歓喜してビルマ義勇軍を迎え、ビルマの人々の協力もあってわずか3ヶ月で首都ラングーンを陥落させ、イギリス軍を敗走させてしまいました。これが日本軍のビルマへの快進撃の1つの側面なのです。そして日本の軍政を経た後の1943年8月1日、ビルマはついに念願の独立を宣言したのです。

日本と同盟を結んで米・英に宣戦布告したビルマでしたが、日本の敗戦が色濃くなってきた頃、日本と離れてイギリスと結ぶべきだとの声が高まってきます。日本と一緒に敗戦国になって、再びイギリスに占領されるのを怖れたのです。それまで日本とともに闘ってきた30人志士たちも動揺します。バー・モウやボー・ヤン・ナインは日本を裏切らず、ミン・オンという青年にいたっては日本を裏切ることは恩義に欠けるとして自決してしまいました。

けれども、オン・サンは「反日に立つのは、ビルマを生き残らせるための唯一の方法」であるとバー・モウに手紙を書き、1945(昭和20)年3月、ついに日本に反旗をひるがえしました。この決断によって、日本軍はビルマから撤退し、代わりにイギリス軍がビルマに戻ってきました。

当時の記録を読みますと、日本軍は敗走の際にビルマの民家などにも立て籠もったようで、そのためにイギリス軍の攻撃の前に巻き添えをくったビルマの人々もかなり多かったようです。

再び植民地支配を目指すイギリスに対して、オン・サンは日本軍に育てられた10万人の義勇軍を率いてイギリスと独立交渉をしました。もう昔の従順なビルマ人ではなくなっていました。このようにして、ついに1948年1月4日、イギリスのアトリー内閣がビルマの独立を承認し、ビルマはようやく独立を達成したのでした。独立の功労者のオン・サンは、この5ヶ月前に政敵の銃弾に倒れ、この日の独立を見ることはありませんでした。

その20年後、バー・モウは『ビルマの夜明け』と言う著書を発表し、その中では「真実のビルマの独立宣言は1948年の1月4日ではなく、1943年8月1日に行われたのであって、真のビルマ解放者はアトリー率いる労働党政府ではなく、東条大将と大日本帝国政府であった」というバー・モウの歴史観が記載されています。

日本の一般的な歴史観とは異なると思いますが、ミャンマーでは先の戦争の意義をこのように考えているのです。

この話を思い出しながら、3月27日のミャンマーの国軍記念日を見に行つて、日本の軍歌を聞かれてみては如何でしょうか。

国際化という声が叫ばれて久しいですが、世界の日本観は国の数だけあると良いいと思います。世界の歴史としても特異な日露戦争や大東亜戦争は、国ごとに受け止め方が違うのです。一部の大きな声だけに惑わされないことが肝要であり、日本らしさが問われているのだと私は思います。

この話は歴史の一側面からの見方ですので、歴史の全体については皆様の今後の努力を期待いたします。

インドネシアの独立まで

1995年(平成7年)5月29日には、戦後50年を記念して日本で「アジア共生の祭典」が開かれました。ちょうど、独立50周年を迎えたインドネシアからは、スハルト大統領特使として、陸軍大学長、駐日大使などを歴任したサイデマン外務省上級大使が参列されました。

サイデマン大使は、約1万人の参列者に対して、次のような挨拶をされた。

「第2次大戦中、あるいはその直後、植民地の独立のために、外国の人々が力を貸してくれるということが見られました。私の国インドネシアの場合、多くの日本の青年たちがインドネシアを自由にするために独立の闘士たちと肩を並べて戦ってくれました。そして多くの日本の青年がそのために命を捧げてくれました。今日このアジア共生の祭典において、私たちの独立のために命を捧げてくれたこれらすべての若者たちを偲びたいと思います。」

インドネシアのジャカルタ郊外のカリバタ国立英雄墓地には、日本軍降伏後、4年5ヶ月におよんだイギリス、オランダとの独立戦争で特別な功労を立てて戦死した人々が祀られています。この中に11名の日本人と一緒にインドネシアの英雄として手厚く葬られているのです。

この独立戦争には、日本軍降伏後も現地に残留してインドネシア独立義勇軍に身を投じた約2千人の日本人が参加し、そのうち400名程度が戦死され、そのうちの32名が各地区の英雄墓地に祀られているそうです。また独立50周年となった平成7年には、残留日本兵69名に対して渡辺インドネシア大使から感謝状が贈られ、スハルト大統領は官邸に招いてお礼を述べられています。

インドネシア政府からは叙勲や恩給の支給など、丁重な敬意が行われてきたそうですし、かつてのスカルノ、スハルト大統領等は来日のたびに独立戦争に参加した戦士達に面会を求め、謝意を表してきたということですが、しかし、このようにして戦死した日本人の英霊に対しては日本政府からは何の手当ても為されていないとのことでした。

戦争開始頃の時代に話を戻してみます。太平洋戦争が始まると今村均中将率いる第16軍は、総兵力5万5千をもってジャワ上陸を敢行しました。ところが、現地の人々が積極的に日本軍の進撃を助けてくれたおかげで、わずか10日でオランダ軍は全面降伏してしまいました。

インドネシアは、1602年にジャワ島にオランダは東インド会社を設立し、それ以来約350年間のオランダの植民地となっていました。

やって来た日本軍の行動でインドネシアの人々が驚いた事は、幽閉されていた独立運動の指導者スカルノ、ハッタを解放してインドネシア側代表の位置につけたこと、次にイスラム教に対する制約を撤廃してマシュミ(インドネシア回教連合会)を作り、イスラム教の指導者達が初めて直接話ができるようにしたこと、そして最も注目すべきことはインドネシアの教育に力を入れたことだったそうです。

独立運動の闘士スカルノ、ハッタの情熱に感銘を受けた今村中将は、「独立というものは、与えられるものではなく、つねに戦い取るべきものだ。彼らが戦い取ることでできる実力を養ってやるのが、われわれの仕事だ、、、」と言って彼らを支援しました。

それから、日本の占領下で独立国への準備が始まりました。300近い言語をインドネシア語に統一し、州の長官、副長官などには現地人を登用し、州や市の参議会を作って行政や議会運営を習得させる、さらにインドネシア義勇軍を編成して3万5千もの将校や兵士の育成をしたそうです。これらの人々が後のインドネシアの独立戦争の主役となっていったわけです。

教育に関する日本軍からの命令は、オランダ語の禁止と、日本語、唱歌、教練を含めることだけだったそうです。

日本軍はインドネシアに来てわずか1年あまりの間に、戦争でいったん休校になった学校を再開し、すぐに3年間の初等国民学校と、その上にさらに3年間勉強できる国民学校を作り、多くの子供たちが学校へ行けるようにしました。そして、独立は自力で勝ち取るものであるとして、インドネシアの将来の独立のために希望者をつのり、独立のための指導者となれる者の訓練を施しました。

訓練と言っても、先日の日本の自衛隊がイラクのサマールで見せたように、すべて日本軍人が率先して模範を示し、彼ら以上に苦役なども率先してやって見せたために、以前のオランダの植民地時代との大変な相違に感動した者が多かったそうです。

日本軍が降伏後、1945年8月17日、スカルノとハッタは独立宣言を行い、18日にはインドネシア共和国憲法を採択して、それぞれ大統領と副大統領に就任しました。

しかし、イギリスとオランダは植民地の復活を狙い、降伏した日本軍を使ってインドネシアの独立運動を阻止しようとした。一方、インドネシア側は来るべき独立戦争に備えるためにも何としても日本軍が保有している武器が必要でした。今まで日本軍に協力してきた幹部達は、必死に日本軍に支援を訴えました。

独立運動で暴徒化したインドネシア群衆が武器を要求して日本軍の施設を襲う事件も起きました。日本軍は決して反撃せず、暴徒に銃殺された日本人のなかには、「インドネシアの独立に栄光あれ」と自らの血糊で壁に書き残した人もおり、現地人に多大の感銘を与えたそうです。

日本軍の中にはオランダ軍の目を盗んでインドネシア側に協力する人々が現れ、インドネシア側に、小銃3万5千挺、戦車、装甲車、自動車など200台、中小口径砲など多数、最終的にはジャワの日本陸軍の装備の半分以上が手渡されたそうです。

さらには、自ら軍籍を離脱してインドネシア軍に身を投じた人々も多かったそうです。

オランダとの独立戦争は1949年12月までの4年5ヶ月も続きました。インドネシア側の兵員は200万人もいましたが、武器は日本軍から手渡された数万挺の小銃が中心のため、多大な犠牲者を出し続けました。インドを始めとするアジア諸国がオランダを非難し、国連安保理事会や米国議会も撤兵勧告を行った結果、全世界の世論に押される形でオランダはインドネシアの再植民地化を諦めることになったわけなのです。

インドネシアの独立記念日の式典では、インドネシアの服装の男女2名に日本兵の服装をした1名を加えて、3名で国旗を掲揚します。これは独立を支援した日本軍に敬意と感謝を表しているためです。

また、インターネットで調べたインドネシアの中学3年用の歴史教科書(日本語訳)を紹介すると、

「日本の占領は、後に大きな影響を及ぼすような利点を残した。第一に、オランダ語と英語が禁止されたので、インドネシア語が成長し、使用が広まった。日本軍政の3年半に培われたインドネシア語は驚異的發展をとげた。第二に、日本は青年達に軍事教練を課して、竹槍、木銃によるものだったとはいえ、きびしい規律を教え込み、勇敢に戦うことや耐え忍ぶことを訓練した。第三に、職場からオランダ人がすべていなくなり、日本はインドネシア人に高い地位を与えて、われわれに高い能力や大きい責任を要求する、重要な仕事をまかせた。…」と掲載されています。

参考までに、インドネシアの映画で「ムルデカ17805」と有名な映画がありますが、これは今お話したような内容を映画化したものです。ムルデカとは「独立」、17805とは独立宣言の日付だそうで、皇紀2605(西暦1945)年8月17日の事だそうです。日本軍のインドネシア独立支援への感謝の気持ちとして年号を日本の皇紀で表したのだそうです。

日本の近代の歴史の学校教育では空白の部分として詳細には触れませんが、インドやインドネシア、マレーシアやビルマ、ひいては台湾などの国々では各国の歴史の一部として日本との関わりの事を詳しく掲載しています。このような状況な

のに、日本側が何も知らないで海外旅行に出かけてくるという変な現象が現在では起こっているのです。これこそ日本の教育の自虐史観のゆがみだと私は考えています。

最後に、戦後から現在までインドネシアで歌い継がれてきた「祖国防衛義勇軍(PETA=ペタ)マーチ」という歌があるそうです。私は聞いた事はありませんが、参考として歌詞を掲載しておきます。

「アジア、すでに敵に向かい、蜂起せり 己を捨てて全力を尽くす
連合国を粉碎せんと 玉散ることもいとわず
進め 進め 義勇軍 アジアとインドネシアの英雄 清き東洋に幸あれ
古きアジア 不幸に苦しむ 烈しき圧制に 幾世紀も忍ぶ
大日本 雄々しく立てり アジアを救い 我らを守る
進め 進め 義勇軍 アジアとインドネシアの英雄 清き東洋に幸あれ…」

カンチャナブリ

東南アジアの歴史

歴史には、このような目線もあります。もっと自分の国のことについて知りたいものです。

フィリピンの独立まで

今回は、フィリピンが独立を果たすまでのお話です。スペインやアメリカ、そして日本など大国の狭間で木の葉のように翻弄されながらも必死に独立を求めてきたのがフィリピンの近代史の基調です。フィリピンは3回も独立宣言をしていますが、その過程で日本人との関わりも大変深かったようです。

太平洋戦争が始まって日本軍がフィリピン侵攻後、しばらくして日本の軍政が撤廃され、1943(昭和18)年10月14日、フィリピンは「第2共和国」として独立を果たしました。ホセ・ラウレルが第3代大統領となり、同年11月5日には東京で開催された大東亜会議に、ラウレル大統領はフィリピン代表として参加しています。

フィリピンは日本の敗戦後に完全に独立を果たしますが、どのような歴史があったのでしょうか。

フィリピンの歴史を概観して見ますと、1521年にフェルディナンド・マゼランがやって来ましたが、彼は地元民に殺されて

います。その後、1543年にルイ・ロペス・ドゥ・ビラロボスがやって来ます。そしてスペインの皇太子フィリップ2世のフィリップにちなんでその土地をラス＝フェリピナスと名づけたことに現在のフィリピンの国名の由来があるそうです。このようにして1565年からスペインの占領が始まり、1572年にはイスラム教のスールー諸島を除く全フィリピンがスペインの支配下になりました。

フィリピンの独立史のお話をするにあたって最初に取り上げなければならないのは、フィリピンの独立の英雄「ホセ・リサル」だと思います。リサールの日本での恋人「おせいさん」との恋物語もフィリピンでは有名な話として残っています。

リサルは、1887年、マドリード大学で医学を学ぶかたわら、300年以上もフィリピンを植民地としているスペインとカトリック教会を批判した小説をヨーロッパで発表し、スペイン政府から反逆の書として激しく非難されました。翌年、フィリピンに帰ったリサルを待っていたのは小説の発禁と国外追放の命令で、ホセ・リサルは1888(明治21)年2月29日、ヨーロッパに向けて亡命の旅に出発しますが、その途中、短期間の予定で日本に立ち寄りしました。

しかし、2、3日ですっかり日本の魅力に取りつかれたようで、出発を先延ばしするうちに「おせいさん(臼井勢似子)」と出会ってしまいます。維新で没落したとはいえ、江戸旗本の武家育ちで、つつましく、編み物と絵画を得意とし、英語とフランス語を学んでいた女性でした。

22カ国語に精通していたという語学の天才・リサルは、たちまち日本語を覚え、彼女に早春の東京や日光、箱根などを案内して貰ったり、また、一緒に歌舞伎で見た忠臣蔵で、「身を捨てても、主君のために忠義を尽くす浪士たちの行動」に大変な感動を覚えたようでした。また、おせいさんも、兄が彰義隊に加わって上野で戦死しているだけに、フィリピン独立の志士として不遇な状況にあるリサルに深い同情の念を抱いていたようです。

こうして、27歳のフィリピン青年は日本とおせいさんにすっかり魅了されてしまいました。しかし、故郷や世界各地にはフィリピン独立のために、自分を待っている同志がたくさんいます。断腸の思いで、彼は当初の計画どおりヨーロッパに向かう決心をすることになります。

4月12日、横浜港からの出発を明日に控えて、リサルはおせいさんとの別れの一時を、目黒のあるお寺で過ごしたそうです。おせいさんも武士の娘、リサールの志を察して、別れの覚悟は固めていたそうです。

このようにしてヨーロッパに渡ったリサルは、2冊目の小説「反逆者」を発表し、フィリピンでの独立活動家の機関誌にも投稿を続けました。1892年、家族や友人の反対を押し切って祖国に戻りますが、逮捕され、ミンダナオ島に流刑されました。

4年間の流刑を終えてマニラに戻りますと、そのころ激化していた独立勢力の武装蜂起を教唆したとして再び逮捕され、名ばかりの裁判を受けて、1896年12月30日の朝、35歳のホセ・リサルは銃殺刑に処せられてしまいました。この12月30日は、独立の英雄であり、国父であるリサールの死を悼む日として、今もフィリピンでは国家による儀式が行われていま

す。

リサールが銃殺された2年後の1898年4月25日、スペインとアメリカとの間で米西戦争が勃発しました。「フィリピン革命軍を援助する」と宣言したアメリカ軍は、極東艦隊でスペイン艦隊を撃破してマニラ湾に入り、民衆はアメリカ軍を歓呼して迎えました。

アメリカの参戦で勇気を得た革命軍は、いたるところでスペイン軍を撃破しました。その前年、スペインに対する武装蜂起による革命政府を樹立していたエミリオ・アギナルド将軍が亡命先の香港から帰国し、1898年6月12日、カビテ州カウイトでフィリピンの独立を宣言して自ら初代大統領に就任していましたが、スペインを打ち破ったアメリカは新たな宗主国としてフィリピンに居座ってしまいました。アメリカはパリ講和条約でスペインからフィリピン統治権を2000万ドルで買ってしまったのです。フィリピン革命政府は、こんどは米国との戦いを始めることになったのです。

この時、革命軍総司令官として独立戦争を開始したのが33歳のアミルテオ・リカルテでした。スペインを破った後に豹変したアメリカに対して、リカルテは再び革命軍総司令官として2度目の独立戦争を開始しました。

リカルテは、1868年ルソン島最北端のラオアグという町の大きな農家の二男坊として生まれ、1890年、名門セント・トーマス大学を24歳で卒業後、マラボンの小中学校の校長になりました。

1895年頃から、スペインの暴政に対して民衆の憤りが高まり、独立を目指すカティプナン党が急速に勢力を広げました。リカルテも入党して、指導的な地位につきました。1896年8月27日、カティプナン党とスペイン軍との戦いが始まり、翌年3月、リカルテは「国軍総司令官」に任命されました。この時以来、リカルテの生涯はフィリピン独立のための戦いの日々でした。

リカルテはアメリカとの戦いのために革命政府外務長官のマリヤノ・ボンセを日本に送り、アジア主義者の宮崎滔天に武器援助を仰ぎました。ボンセの依頼は、陸軍参謀総長川上操六大将に伝わり、アメリカ国務省からフィリピンへの武器密輸を取り締まってくれという要請が届いていたにも関わらず、川上は青木外務大臣の反対を押し切って陸軍からの兵器払い下げを決定しました。明治政府はフィリピンに同情的でしたが、当時は日清戦争後で国力が弱っており、またロシアの南下が迫っている中で、アメリカと事を構える余裕はなかったのです。

川上は宮崎滔天らにこう言いました。「フィリピン独立といっても、なかなか容易ではないと思う。わが国としてもお援けしてさしあげたいが、まだその余力はない。・・・同じアジアの民として、困ったときには助け合う、武士は相見互いだ。国の力が及ばないときには、君たち有志に期待するほかない。しっかり頼むぞ。」

約300トンもの武器弾薬が、布引丸という古い貨物船に乗せられ、上海に送る石炭と鉄道枕木だと偽って、フィリピンに送られることになりました。明治32(1899)年7月19日に布引丸は長崎港を出港、日本人の義勇隊3名と道案内のためのフィリピン人2名が乗船していました。

しかし、翌日の夜、台風に襲われ、布引丸は武器弾薬とともに東シナ海に沈没してしまいました。(約80年後の昭和53年、フィリピンのマルコス大統領は、この時に武器弾薬を率領して遭難した益田忍夫の孫、益田豊夫妻をフィリピン独立記念日の6月12日に招待し、フィリピン独立功労者の遺族という最高級の榮譽を授与しています。)

布引丸に先行して、5人の陸軍予備役将校と1名の民間人からなる義勇隊が独立軍の支援に赴いていました。6人は下級労働者に変装して、フィリピン独立軍を包囲するアメリカ軍陣地を突破しました。

6人はアギナルド大統領の軍事顧問や前線部隊の作戦参謀の任にあたりました。同時にフィリピン在留の日本人約300人も独立軍に参加して、ともに戦いました。日本から義勇隊が来たというので、独立軍の志気は大いにあがったそうです。

やがて布引丸の悲報が現地に伝わり、さらに革命軍に日本人が加わっていることをアメリカは知って、日米関係は険悪になりました。武器弾薬に乏しいフィリピン軍にとって布引丸の沈没は致命的で、革命軍はゲリラ戦や夜襲によって抗戦を続けますが、8万ものアメリカ軍に次第に追いつめられていきました。

1900年6月、リカルテは捕らえられ、続いて翌年3月、アギナルド大統領が逮捕され、2人の指導者を失った革命軍は米軍に屈服したため、1899年2月から3年5ヶ月におよぶ独立戦争はこうして失敗に終わったのでした。このようにして、1902年よりアメリカは本格的にフィリピンを統治し始めました。

リカルテ将軍は、軍事裁判の結果、グアム島の岩窟牢に3年間入れられた後、国外追放の処分を受け、香港に移り住みました。そこでイギリス人の経営する印刷会社で働いて印刷術を修得し、「現代の声」という新聞を発行して、フィリピンの革命同志や学生に独立運動を呼びかけていきました。

明治37(1904)年に始まった日露戦争を、リカルテは祖国独立の好機と捉え、日本が勝てばアジアの諸民族は白人帝国主義に抵抗し、独立・解放の機運を高めるだろうと考えました。日本に勝たせたいという願いはフィリピン民衆も抱いており、日本海海戦でバルチック艦隊がほとんど全滅したとのニュースが伝わると、民衆は我が事のように喜んだそうです。日本の戦勝を祝福する挨拶がかわされ、マニラでは旗行列まで行われました。

リカルテ将軍はバターン半島の一角に砦を構え、再び独立戦争の狼煙をあげようとしたのですが、賞金目当ての裏切り者らによるアメリカ軍への密告で再び捕らえられ、禁固6年の刑を受けました。6年の刑期を終えたリカルテは、再び、法廷につれて行かれ、そこでアメリカ合衆国への忠誠を拒否したために、再度の国外追放を命ぜられ、香港の近くのほとんど無人の小島に流されました。

大正4(1915)年にそこを脱獄し、日本に亡命。しばらく名古屋に潜伏した後、台湾民政長官だった後藤新平などのはからいで、大正12年に横浜に移住しました。

一方、独立への希望を掲げるフィリピンに対してアメリカは最終的にはそれを認めることとなりました。アメリカの主権下で、1934年、米議会はフィリピン独立法を成立させ、フィリピン議会はそれを受諾しました。そしてフィリピンは憲法が制定され、かつてのリカルテ將軍の部下ケソンがフィリピン完全独立までの過渡期の段階の一部としてのフィリピン独立準備政府の大統領として1935年に就任しました。ケソンはリカルテに対し、荣誉ある勲章と、終身年金を申し入れて、帰国を促しましたが、リカルテはそれを拒否しました。

1941年12月8日、日米開戦と同時に日本軍はフィリピンに押し寄せて来ました。当時、フィリピン軍は同じ年の7月にアメリカ陸軍に統合されており、アメリカ極東軍となっていました。12月26日、ダグラス・マッカーサーはマニラ無防備都市宣言を發し、コレヒドールへ後退しました。そして翌年1月2日、日本軍はマニラに無血入城し、翌3日に本間中將による軍政布告が出されることとなります。2月にケソン、オスメーニャはコレヒドールを脱出し、オーストラリア経由でアメリカ本土に亡命、1942年5月には亡命政府を樹立します。ケソンの死後はオスメーニャが大統領となりました。

一方、リカルテの方は日米開戦と同時に参謀本部の要請を受け、占領後のフィリピン独立の約束をとりつけた後、75歳の老軀を駆って祖国に戻りました。群衆は歓呼してリカルテ將軍を迎えた。このようにして1943(昭和18)年10月14日、日本軍の軍政が撤廃され、正式に「フィリピン共和国」として独立の日を迎えました。対スペイン独立戦争時から愛唱されてきた歌を国歌として制定し、その演奏とともに、アギナルドとリカルテが革命旗をもとにデザインされた国旗を掲げました。(これらの国号、国旗、国歌は現在まで引き継がれて、この時に就任したラウレル大統領は、現在でも第2共和国の大統領として、マラカニアン宮殿に歴代大統領と並んで肖像画が飾られています。)

その後、米国の反撃が始まると、山下奉文大將はリカルテ將軍に日本への再亡命を勧めましたが、將軍は「わしは最後の一人となるとも、アメリカと戦うつもりだ。わしの80年の生涯は、ただこのためにあった。」と断りました。日本軍とともに逃避行軍すること3ヶ月、80歳の將軍はある朝、眠るように亡くなっていたそうです。

リカルテ將軍の副官として永く公私の交わりを続けた太田兼四朗氏は、遺言にしたがって、遺骨の一部を第二の故郷である日本に持ち帰り、東京多摩の太田家の墓所に納めました。昭和46年にはフィリピン協会により、將軍が亡命中に住んだ横浜市山下公園にリカルテ將軍記念碑が建立されています。

ラウレル大統領と親交を結んだのが、駐比日本大使でフィリピン派遣軍の最高顧問だった村田省蔵でした。敗色濃厚となった1945年6月、弾丸雨飛の中を村田大使に率いられて、ラウレル大統領、アキノ国会議長やその家族などは日本に亡命し、奈良ホテルに滞留しました。

戦後、ラウレルは一時米軍に逮捕されていましたが、帰国して上院議員として政界に復帰しました。そして、日本との賠償会議の首席全権を務めました。この時、奇しくも日本側代表となった村田省蔵と渡り合い、ともに日比国交回復に貢献したそうです。亡命中に滞在した奈良ホテルには、「ホセ・P・ラウレル博士ー比共和国第二代大統領」と刻まれた胸像が残されています。

戦後最初の大統領となった第5代大統領マニエル・ロハスは、日本軍の進攻が始まった時に、日本と戦うべく、志願してフィリピン軍の指揮に当たっていました。しかし、日本軍に捕らえられ、マニラの軍司令部から処刑せよとの命令が出されたときに、この時に偶然出会った神保信彦中佐は、やつれてはいたが眼光鋭く気品のあるロハスを一目見て、これはただ者ではない、と感じたそうです。いろいろ話を聞いてみると、日本軍とは戦ったが決して親米でもなく、あくまで祖国フィリピンの独立を求めていることがわかりました。ロハスは日本の歴史にも詳しく、日本はヒロヒト天皇を戴く仁義ある国で、ドイツのように捕虜を虐殺したりしないと信じているとまで言ったそうです。

これはフィリピンのためにどうしても生かしておくべき人物だと考えた神保はマニラの軍司令部に飛び、処刑命令について問いました。すると、命令は急進派の若手参謀が勝手に出したものだとわかりました。和知鷹二参謀長は神保の助命意見を諒解して、ただちに「ロハスを当分宣撫工作に利用すべし」との軍命令を出してくれました。このようにして、ロハスはミンダナオ島北部にあるマライバライで、約2万人の捕虜を取り仕切る役を命ぜられることとなりました。

戦局は次第にアメリカに有利になり、1944年10月遂にマッカーサーはレイテに再上陸します。翌年2月にはマニラ入城を果たしました。1945年8月15日、戦争が終結すると、日本に亡命していたラウレルは8月17日にフィリピン共和国を解散しました。

アメリカ本土に亡命していたオスメーニャはマッカーサーとともに帰還し、1944年10月にはタクロバンを臨時首都としてフィリピン独立準備政府を再開しました。翌年2月には、フィリピン独立準備政府はマニラに帰ってきました。1946年フィリピン独立準備政府最後の選挙が行われ、ナショナリスト党から分裂したリベラル党のロハスが勝利、6月の議会でアメリカのフィリピン復興法・通商法(ベル通商法)が承認されます。タイディングス・マクダフィー法案で定められた期日の7月4日、ロハスは戦後初のフィリピン大統領に就任し、3度目の独立を宣言しました。このようにして現在のフィリピン共和国が誕生したのです。

一方、神保はロハスを救った後、北支那方面軍に転属となり、共産軍との戦いに活躍しましたが、日本の敗戦に伴い、中国戦犯容疑者として逮捕されました。隆子夫人は何としても夫を助けねば、と奔走し、その思いをロハス大統領に伝えることができました。

ロハスは直ちに蒋介石あてに助命嘆願書を送りました。「私の大統領就任の最初の手紙が、なぜこのような個人的なものでなければならないかは、本書の内容でお分かり戴けると思います」と書き始められた手紙は、自分が生きながらえているのは神保中佐のお陰であること、彼がいかにか人道的な人間であるか、を真情をこめて綴ったものでした。ロハスのまごころは蒋介石を動かし、ほどなく神保の釈放が決まったそうです。

ロハスは翌年4月15日、大統領就任後2年余りで急逝しますが、そのわずか6日前にも神保の生活を案じた手紙を送っているそうです。

神保はその後、日本リサール協会の理事長を務め、日比友好に尽力し、昭和53年に他界しました。1995(平成5)年に

は第12代フィデル・ラモス大統領から、ロハスを救った行為に対する表彰状が、未亡人と長男に手渡されています。

世界史あるいは歴史年表上では、フィリピンが誰の束縛もなく本当の意味で独立を宣言したのは戦後、1946年7月4日となっていますが、フィリピン国民にとって「フィリピンの独立記念日」は1898年にエミリオ・アギナルドがカビテでフィリピンの独立を宣言した「6月12日」であり、政府も同日を祝日に定め、毎年記念行事をおこなっています。現在見る『フィリピン国旗』と『フィリピン国歌』は1898年6月12日の独立記念日に合わせてアギナルド将軍が関係者に依頼して作らせたものでした。

1898年からちょうど100年目の1998年には「独立百周年記念行事」がフィリピン各地で行われましたが、そのハイライトとなる一大セレモニーが6月12日、マニラ市リサール公園のキノ・グランドスタジアムで開催されました。当時のフィリピン共和国第12代ラモス大統領、エストラーダ副大統領(後の第13代大統領)、アキノ第11代大統領、そして第14代大統領のアロヨ上院議員の錚々たるメンバーが同スタジアムのステージに一同に会していました。

私がこれらの話を通じて感じることは、フィリピン国民としてのアイデンティティです。紆余曲折の末に3度も独立を宣言して現在に至っているフィリピンに、学ぶべき点は多いと私は思います。

パラオ共和国の独立まで

今回は「パラオ共和国」の独立までのお話です。この国は、1994年10月1日にアメリカによる信託統治から念願の独立を果たしました。

この国は、実は世界一の親日的な国かも知れないということをご存知でしょうか。何しろ国旗は日の丸を元にして決めた程の国なのです。

パラオの国旗は、日の丸を元にして、太陽のかわりに満月を、白地には大太平洋の青い海の色をデザインされてつくられており、月と海は愛、平和、静穏、豊穡を表現するとともに「月は太陽があつてこそ輝く。我々パラオは月のように日本から命を受けて光っている」という意味が込められているそうです。

このパラオ共和国は、日本から南へ約3000km、赤道に近い太平洋上のマイクロネシアの最西端に浮かぶ、300余りの島々からなる美しい国で、人口は僅か2万人程度という新しい国なのです。

この国の歴史を概観しますと、16世紀頃よりマイクロネシア諸島にもヨーロッパ人が訪れるようになり、1885年にはパラオはスペインの植民地下に入りました。ヨーロッパとの接触の結果、天然痘などが持ち込まれたこともあって、パラオの人口は90%程度減少したといわれます。その後、1899年にはスペインはパラオをドイツに売却し、以降ドイツの植民地になりました。ドイツは、パラオをココナッツ栽培等を初めとする産業の振興を行ったようです。

1914年に第一次世界大戦が始まりますと、ドイツに対して宣戦を布告した日本が帝国海軍を派遣してドイツ守備隊を降伏させ、これを占領しました。第一次世界大戦終結後、パラオは日本の委任統治国になりました。日本は海軍基地を設置し、コロールには南洋庁の支庁を置きました。パラオは周辺諸島における日本の植民地統治の中核的な島となり、多くの日本人が移住(最盛期には2万5千人ほどの日本人が居住)して来ました。

このため、学校や病院・道路など各種インフラの整備も重点的に行われ、1920年代頃になるとコロールは近代的な町並みへとその姿を変貌させていきました。また日本統治の開始にともない、日本語の教育がパラオ人に対しても行われるようになりました。1935年、日本は国際連盟から脱退しましたが、その後、パラオを含む南洋諸島全体を自国領土に編入して、外地の一部としての統治を続けました。

その後、日本の敗戦によりパラオは1947年からアメリカの信託統治領となり、パラオの公用語は英語に変わり、アメリカ人教師による反日教育が行われました。

アメリカ人は現地に根づいた日本文化の影響に驚き、日本的なものをすべて排除しました。大通りを始めとして裏道まで、舗装された道路はすべて剥ぎ取られ、島々を結んでいた橋は壊され、隅々まで耕した畑は踏みつぶされ、工場はすべて破壊されました。アメリカは膨大な額の援助を続けますが、治安は乱れ、人々の労働意欲も低下しました。パラオの人々は勤勉で治安もよかった、かつての日本統治時代を懐かしく思ったそうです。

これは、戦争に敗れても日本がアジア解放の盟主としてアジアに影響力を残すことを恐れたためで、連合国側による反日的記載の歴史教科書もあったそうですが、パラオの年長者に歴史の捏造は否定され、そのような教育はパラオには浸透しませんでした。

パラオには今でも日常語として多くの日本語が残り、また日本式の名前を持った人が多いそうです。また国民の多くが大変な親日家であることも特徴であり、世界一の親日国家と言っても過言ではないでしょう。戦後の長い時代をアメリカ統治として過ごしたにもかかわらず、何故パラオの人々はここまで日本を思い、日本を愛してくれるのでしょうか。

日本統治時代、日本はパラオ統治のため「南洋庁」を設立し、多くの日本人がパラオに渡りました。そして、パラオに渡った日本人はパラオの発展に務めました。人々に財産を分配し、道路を敷き、橋を架け、電気を点しました。また、学校や病院を置いて日本語や算数を教え、病気の人には進んだ医療を施しました。南洋神社という立派な神社も建てられました。このように、先頭にたって勤勉に汗を流して働く日本人の姿に、パラオの人々は尊敬の心を抱くようになったのだと思われます。

しかし、よい面ばかりではなく、太平洋戦争の勃発で豊かなパラオの島々も食糧難に苦しんだこともあったそうです。

昭和19年9月、ついにパラオの島のひとつ、ペリリュー島がアメリカ軍の標的となりました。この島にはフィリピン防衛のための大きな飛行場があったからです。立てこもる日本軍はわずかに1万2千人あまり、対するアメリカ軍は数百の艦艇と飛

行機を揃えていました。とても勝ち目のない戦いでしたが日本軍は73日間もこの島を守り抜いたのです。

この戦いの前、ペリリュー島に住んでいた住民たちは日本人とともに戦おうと志願しました。しかし、日本軍はこれを押しとどめました。彼らのことを思い、夜の闇にまぎれてペリリュー島の住民をパラオ本島へ非難させました。そのために、パラオの人々には1人の死者も出ていません。

長い激戦の末、住民はペリリュー島へ戻りました。そこには、ほんの少し前までは仲良く暮らしていた日本兵が無残にも転がっていたのです。不憫に思った住民はここに日本兵の墓を立てました。このお墓は現在も住民たちの手によって綺麗に清められているそうです。

1981年、パラオは自治政府を発足させて憲法制定を行い、アメリカによる信託統治を終了させるために1982年に自由連合協定が締結されますが、制定された憲法の非核条項の扱いで10年余の紆余曲折を経て1993年の住民投票でやっと自由連合協定が承認され、これにより、ようやく1994年10月1日にパラオは独立し、同年に国際連合へ加盟することとなりました。

このようにして、長年の悲願としての独立を果たしたパラオですが、その歴史教科書では日本統治時代をパラオの発展のために重要な期間であったと書かれています。

そして、破壊された南洋神社も現地人と清流会によって再建されました。南洋神社は、毎朝村人が集まり、日本海軍岡田中将から「この美しいパラオを一日も早く自分たちの手で治めるようにせよ」と訓示を受けた思い出の場所だったのです。

また、パラオにはパラオ本島とコロール島の間に日本のODAの無償援助で架けられた約200メートルの大きな橋があります。この橋の名前は「Japan－Palau friendship bridge」といい、その名の通り日本とパラオの友好の掛け橋となるような思いが込められています。この橋は、以前はKBブリッジと言いましたが、韓国の業者の手抜き工事により崩壊した橋を日本が無償援助で架けなおしたもののなのです。

KBブリッジは、「Koror-Babeldaob Bridge」の名前のとおり首都コロール島と空港のあるバベルドアブ島を繋ぐ橋で、島国パラオの交通の要衝として韓国の業者の手で1977年に開通しました。

ところが、ひどい手抜き工事だったようで、1996年9月28日、KBブリッジは突如真っ二つに折れて海に突き刺さりました。死者が1名出ましたが、橋の内部は電線、水道、電話線が通されていたため、パラオのライフラインは分断されて首都機能は麻痺してしまいました。一時は国家非常事態宣言も出されましたが、この時、パラオと姉妹都市の三重県からはコンテナ空輸で飲料水が運ばれています。

三重県は、パラオ共和国のクニオ・ナカムラ第4代大統領の実父が三重県伊勢市の出身である縁で、1996年に姉妹都市となっており、活発な交流が行なわれていたのです。

パラオ政府はすぐに橋を造った韓国の業者に賠償請求しようとしたのですが、この時すでにこの会社は解散していて手がかりすらなかったそうです。

途方に暮れるパラオ政府に日本が援助の手を差し伸べ、まず仮設橋の建設を援助し、さらに日本のODA政府開発援助により約30億円の新たな橋を無償で架ける事になりました。施工にあたったのは鹿島建設でした。

実に5年の年月をかけて橋は完成しました。2002年1月11日に開通式典が開かれ、橋の新しい正式名称が発表されました。その名が「Japan－Palau friendship bridge」だったのです。

パラオ独立後の国定教科書によりますと、日本の行った学校教育、産業・経済活動等についても詳しく述べられており、それによると、当時の日本式の教育方針が現在もそのまま持ち込まれており、「日本人は体罰を使って非常に厳格なしつけを行った」としながらも、「一年生ですらかけ算の九九を暗記することができた」等、教育水準の高さも語られ、身分を問わず努力次第で公平に認められる社会を構築した成果についても書かれており、日本教育を経験した人の「学校の厳しいしつけが人生に役立った」というコメントも載っているそうです。

また、「労働はきつく給料は安かった」とあり、暑い土地での肉体労働で「労働時間は午前6時から午後5時までで、1時間半の昼食休憩があり、週6日間働いた」とことと考え合わせると、確かに重労働ですが、「1年半働くと、7日間の一時帰休と永久就職の保証が与えられた。15歳以下の者は雇用されなかった」と、現代で言う福利厚生、労働基準のようなものも定められていた事実も続けて記されていて、同時に「日本統治のもとで、パラオの島々の経済発展は産業の強化をもたらした」と農業、漁業、鉱山業の発展について公平に評価がなされています。

話は前後しますが、1995年の10月1日、パラオでは独立1周年を祝う式典がくりひろげられました。各国の元首から祝電が届き、米国海兵隊のパレードや、チャーター機で乗り付けた台湾の歓迎団、アジア諸国の民族ダンス等が式典会場のアサヒグラウンドを埋めつくしました。

しかし、全パラオ人が待ち望んだ日本政府の出席は無く、さらに、日本政府からの祝電を読む声も遂に聞くことが出来なかったそうです。当時の大統領はクニオ・ナカムラ大統領ですが、大変な落ち込みだったそうです。

パラオに独立という理想に目覚めさせた日本は、戦争に負けた後、南洋を忘れてしまったかのような態度を取ってきましたが、しかし、パラオの人々は遠く離れた日本への愛着を変わることなく抱き続けていました。

最後に、パラオ大統領トミー・E・レメンゲサウ・ジュニア氏の言葉を掲載します。

「日本は第二次世界大戦終戦から今日に至るまでの年月で敗戦から見事に立ち上がり、それどころか、産業・経済・文

化など様々な分野において、世界のリーダーとして活躍されています。そんな日本の皆様たちのバイタリティが、実は私たちの国パラオを造ったという事実をご存じでしょうか。終戦までの日本は、数万人に及ぶ日本人入植者をパラオに送り込み、南洋庁を作り、私たちパラオ人のために様々な教育や産業を伝えました。それは後に、パラオ独立のための貴重な原動力となりました。そして現在でもパラオの長老たちは日本のことを「内地」と呼び、世界で最も親日感情が高い国、といっても過言ではないのです。」

台湾の場合

今回は台湾のお話ですが、台湾は未だに独立しているとも中国の一部であるとも言えない状態です。日本と東南アジアの諸国の独立までの関わりを戦前・戦中・戦後を通して今まで説明してきましたが、今回は日本との関わりの中での台湾という国の微妙な立場の説明を試みたいと思います。これからのお話は、日本在住のある台湾人の方のお話を中心に全体の記事を構成しました。

台湾人は漢民族ではないという話からスタートしたいと思います。台湾が歴史に登場したのは1624年で、当時のオランダは貿易が盛んでアジアとの貿易をするうえでの中継点として台湾と中国のあいだにある澎湖島という小さな島を選びました。当時の明朝はその島をめぐるオランダ軍と戦いましたが、結局は和解して、明朝は澎湖島を返してもらい代わりに台湾をオランダに渡しました。このようにして1624年、オランダ人が台湾を統治することになったわけなのです。

当時の台湾の人口は50万人でしたが、オランダ人は台湾を統治するために中国から労働者を7～8000人輸入します。鄭成功が清に負けて台湾に逃げてきたのが1661年ですから、オランダの統治は38年間続きました。今、台湾人が中国人の子孫であり後裔であるという根拠は、鄭成功がたくさんの中国人を連れて海を渡ったというところに求められています。しかし1661年の台湾の人口は62万であり、中国からやってきた鄭成功一族と彼の軍隊はそのなかのたった3万人にすぎませんでした。

その一族が22年間台湾を統治して、清朝に滅ぼされました。当時の台湾の人口は72万人で、そのとき清朝が連れてきた軍隊はほんの数千人です。清朝は200年のあいだ台湾を統治するわけですが、その間、統治者は3年交替でした。台湾の風土病が怖かったのです。また、清朝統治の200年間には、台湾に渡るなという禁止令があって、それは台湾が非常に長いこと海賊の巣になっていましたので、人が増えることは好ましくなかったからです。できるだけ台湾に渡らせないようにしようというのが清の姿勢でした。

そして1895年に日本が台湾を領土にしたときの人口250万人のうち、清朝の人間はほとんど中国に引き揚げました。だから、台湾人が漢民族であるということは間違っています。もちろん、日本統治の50年間に中国から台湾に移住してきた中国人はほとんどいませんでした。そして、1945年にはざっと600万人に人口は増えました。1945年に台湾から引き揚げた日本人が40万人いますから、当時の総数として640万人ということになります。そのなかに中国人がいたとしても、それはほんの少数なのです。

日本人は1951年のサンフランシスコ条約によって、台湾を放棄しました。1945年に日本は降伏しましたが、同条約の発効までは日本領だったのです。台湾人が最初に経験したまともな国家、まともな民族、台湾を近代国家としてまともに建設しようとしたのは、オランダでもなく鄭成功でもなく清朝でもなく、それは日本でした。オランダの統治はせいぜい台湾南部の一カ所のみで、鄭成功も同じです。清朝の統治は目的がたった1つ、台湾が海賊の巣にならないようにできるだけ抑えこむことでした。ですから、清朝が台湾をようやく1つの省にしたのは統治して200年も経った1885年で、まともに統治に取り組んだのはせいぜい最後の10年間だけなのです。

その10年後、1895年に日本が台湾にやってきました。日本政府は台北の治安が確保されると、直ちに台湾人への教育の準備へ取りかかりました。教育が急がれたのは、台湾の住人には共通語がなく、彼らの言語がすべて違うので日本語を共通語とすることが統治の重要政策だったのです。1897年における台湾の学齢児童の就学率は総人口の0.5~0.6%でしたが、1942年(昭和17年)頃にはこれが70%を突破し、1945年の終戦のときの識字率は92.5%にのぼっており、台湾は世界で最も民度の高い地域の1つに数えるまでに発展していたのです。

明治政府は植民地支配にあたって、日本本土を「内地」、植民地を「外地」とし、帝国憲法は外地の1つである台湾には限定的な適用として、台湾総督府に行政・立法・司法の三権を付与し、初期には総督は武官であったこともあって、さらに統帥権に直属する軍事権をも与えて統治していましたが、1919年からは文官総督が9代続きました。

日本政府は、台湾における衛生事情の改善や、製糖業などの産業整備、交通や鉄道の建設などを進めました。日本政府が統治の象徴として建てた総督府は250万円かかっていますが、台湾の医科学校建設のためには280万円を投じました。日本統治の50年間、台湾人を我が子のように教育し、当時の東京にすらなかった下水道も台北でつくりあげました。自分の領土として真剣に統治しようと思った国家として台湾人が初めて経験したのが、日本だったんです。また、台湾南部の嘉南に造られた烏山頭水庫は別名「八田ダム」と呼ばれ、この大規模なダムの設計者であり、工事全般の指揮を取った八田與一の銅像が、地元の人々によって今もダムを見守るように建っています。台湾第2の大きさを誇るこのダムは、日本時代の1920年に着工、10年の歳月をかけて昭和5年に完成しました。かつて、洪水と干ばつを繰り返していた嘉南平野は、このダムの建設によって豊かな穀倉地帯へと変貌を遂げたのです。

また、任期は短かったですが、第7代台湾総督明石元二郎は1918年(大正7)6月台湾へ赴任し、多くの事業を手がけています。日月潭の水力電力事業着手、縦貫道路や新鉄道「海岸線」の着工、台湾の司法制度や学校制度の設立などを行ないました。また、森林保護のため営林局の権限を強化したり、対岸の中華民国政府との友好を促進するため、両国人の合弁による華南銀行の設立や広東への病院開業等を実現したりしました。

しかし1945年、日本の降伏以降の台湾がどうなっていたかご存知でしょうか。日本は1945年8月15日に敗戦になったわけですが、中華民国政府がマッカーサーの命令によって台湾を接収したのは2カ月後の10月でした。2カ月の間、いわば無政府状態といってもいい状態でした。

当時の日本国内では、一夜のうちに日本国民から戦勝国の人間になった朝鮮人が非常に威張って、汽車のなかでも席

を取ったりと日本人を苛めていました。しかし台湾ではその2カ月間、日本人を苛めたり財産を略奪したりということはほとんどなく、むしろこれから別れることを悲しんでいたそうです。

しかし、日本人が引き揚げた後の台湾は悲劇でした。蒋介石の軍隊がやって来て、強姦・略奪……ありとあらゆることをやりました。これはなぜか。理由は簡単です。民度の低い国が民度の高い国を統治しようとするればそうなるのです。しかも中国は現代化した軍隊は持っておらず、実際、台湾の軍は、戦後に旧日本軍の軍人が白団という顧問団を組織して指導したものです。現在の台湾軍の基をつくったのは旧日本軍だったのです。

中国の軍人はほとんどが強制的に軍に入れられていて、その給料は、戦いに勝ったら征服した村の財産をすべてやる、ということなんです。上の人間がたくさん取って、下の人間はそのこぼした分を取る。男はすべて兵隊に入れて、女はぜんぶ自分のものにする、それが中国式の軍人の給料なんです。当然、彼らが台湾を取った以上は、台湾のものは俺のものだということになります。今の台湾の国民党が世界一金持ちの政党と言われているのは、取れるものは全部取ったからなんです。

そして日本の教育を受けた者は、一夜にしてその知識が無用になりました。北京語が分からなければ、どんな知識のある人間、どんな腕の良い医者、どんな腕の良い弁護士、どんな見識のある教育者でも、役に立たないものになってしまいました。

1945年から47年までの台湾のインフレ率は実に4万倍でした。戦争中、日本に米のなかった時代でさえ、台湾人は飢えた経験は一度もありませんでした。戦争の末期、日本に物質が足りない状態であっても、台湾にはまだ輸出する力があつたのです。その後、たった2年間で4万倍に物価が上がって、人民は食べ物もなく、飢えに苦しんでいるんです。

そして1947年の2月28日に、いわゆる二・二八事件が起こりました。これは中国人官僚の凶暴な圧政にたいする反抗で、1カ月のうちに2万8000人が殺されました。それからいわゆる白色テロが20年、30年も続くわけです。そのあいだ日本人もしくは日本政府は、かつて自分の同胞であった台湾を見ようともしませんでした。

台湾は常にどこかの統治下にあつて、独立した1つの国であつた試しが一度もありません。その何らかの権力のなかでいちばんまともな権力は日本政府でした。だから戦後60年経っても熱い眼差しを日本に向けているけれども、それでも無視され続けているのが台湾人の現状なのです。

現在、台湾は事実上の国であっても、法律上の国ではありません。対外的にも対内的にも中国の圧力下にあります。軍事的な圧力、国際的社會から閉め出しの圧力、経済への圧力が主なところですよ。

台湾は国名としては中華民国という名前を使っていますが、英語にすれば「**Republic of China**」、つまり支那共和国となります。台湾でありながら支那と名乗っていることとなります。政治活動や経済活動などは、法の大原則として中華民国憲法を使用していますが、その憲法上の中華民国の領土の中にはモンゴルと中華人民共和国は入ってますが台湾は

入っていません。

中華民国憲法は、1936年5月5日に中国でつくった憲法草案です。当時の台湾は日本の領土ですから、当然そのとき制定した22省の中に台湾の名前はありますがありません。その憲法の制定は1946年、執行は1947年ですが、執行当時の台湾の主権は、戦後であってもサンフランシスコ条約の発効は1952年ですから当時はまだ日本に属していました。日本の領土だった台湾の将来は、もともと所有している人間か、あるいは国連憲章に基づいてそこに住んでいる人間しか決められないはずで、日本は意思表示をして権利を放棄しました。その直後の状態が現在まで続いているのです。そのために、憲法上にいろんな歪みが生じているのです。

このような憲法に起因する問題、戦後にやって来た蒋介石国民党と台湾人との間のアイデンティティに関する問題、そして中華人民共和国との問題、このような難しい問題を抱えて現在に至っているのです。

私は、父から台湾総督府に終戦まで長いこと勤務していた当時の周囲の状況の話聞いていますし、何回か日本語を話す台湾人の方とお話しをしたこともありますが、個人的には台湾の方がパラオ共和国よりも親日的な国であると思っています。

日本では一般的に先の戦争に対する自虐的歴史観が強いように感じますが、先人たちの築いてきた歴史はもっと大事にし、実証主義で物事は判断したいというのが私の感想です。台湾についての日本の関わりは大変深く、そして多くの文献もありますから、日本が台湾統治時代にやってきた事業の詳細は詳しくは記載しませんでした。

大東亜戦争は偽善と独善との戦い？

戦後60年にもなるのに、中国や韓国における日本への反日感情は未だにくすぶっています。長期に渡って広範な植民地支配を行った英仏などのヨーロッパ諸国は被支配国からこれほど長期に渡る反感を持たれてはいません。何故、日本に対する反感は大きいのでしょうか。

もちろん、そこには歴史的な経緯や、中国や韓国が文明的に日本の先輩に当たるといった民族感情など複雑な要素が絡んでいますから議論は単純ではないのですが、それだけが原因で現在の状態に至っているとは私には思えません。

タイに住んで感じる事は、日本人の哲学は日本人以外には共感できないのではないかと、そして、かつては「大日本帝国」や「天皇への忠誠」などのような日本民族にしか共感されないようなことを、一時期にしても外国に押しつけたことも原因の一つにあるのではないかと、などと考えています。また、昨今の日本と中国のアジアでの覇権争いが根底にあるのかも知れません。

近代の世界史を概観すると、それはいち早く近代化に成功した西洋が自分たちの論理や理念を日本を含む非西洋社会に如何にして押しつけ、そして浸透させるかという確執の歴史でした。そこには相当程度の工夫があり、そしてかなりの

程度成功した背景には、産業革命後の強力な経済力や軍事力を背景として、キリスト教の布教活動や、それを背景とした民主主義や人権思想、自由貿易などの「民族を超えた理念」を掲げたからだと思われます。

キリスト教は普遍性の高い教義が中心ですが、日本の宗教は神仏混交であり、明治以降は天皇という現人神を戴く民族色の強い性格を持つものでした。民族的色彩の濃い教義は外国に持ち込んでも共感が得られなかったのは当然のことです。西洋人は、相手社会における支配構造や文化を冷静に観察して、どうすれば自分たちの価値観をうまく受け入れさせることができるかを考えて偽善的な行動をした結果、日本に対する反感のようなレベルには至らなかったのではないかと思います。

テレビキャスターの田原総一朗氏は、かつて日本人と西洋人の気質の違いを「日本人は独善的、西洋人は偽善的」と表現したそうです。

日本人は、自分たちが正しいと信じることをとことん相手国にも実践させようしますが、それがかえって当該国の反発を呼ぶとしても、それにはおかまいなしのようです。日本の自衛隊のイラクのサマールワ派遣の場合は、それが大変良い結果を生みましたが、ベトナム戦争のときの韓国軍の独善的な行動は現地では大変嫌われました。何れも独善的な考え方の相反する結果のように私は思います。偽善が独善よりも道徳的なわけはありませんが、しかし、偽善は独善よりもおそらく対外政策としてはより実践的なのです。

日本のメッセージ力が乏しいと感じたのは、日本は相変わらず独善的な思考が強すぎて、日本からのメッセージには民族を超えて通用するコンセプトが見えないことにあるのだと思います。靖国神社問題や教科書問題の正当性を主張していくのは間違いではありませんが、現在のグローバル化の進展は、日本に民族を超越した普遍性のある強力な「コンセプト力」を要求しているのだと思います。世界に共感の持てるコンセプトを持った日本からの情報の発信が、これからの日本の最大の課題なのではないでしょうか。

大東亜戦争は、一面においては偽善と独善との戦いでもありましたが、独善が優れているわけでもなく、経済大国になった日本人はこの辺で一度脱皮してコンセプト力で勝負すべき時代になっているのではないのでしょうか。企業の中での会議などでも、イノベーションやコンセプトが重要視されていることと思います。共有可能な明確なコンセプトを持った情報を発信することが肝要で、日本が平和国家を今後とも目指すなら、それは絶対に必要なことなのではないのでしょうか。

ブッシュ大統領のヤルタ 批判演説

みなさんは「ヤルタ会談」のことはご存知でしょうか。

第2次世界大戦中の1945年2月4日から11日まで、黒海沿岸のクリミア半島の保養地ヤルタで開かれた会談のことで、ルーズベルトとチャーチルがスターリンに対してソ連の対日参戦の対価として樺太の南半分とクリール(千島)列島をソ連に引き渡すことに合意した会談のことです。

この会談の結果が、日本にとっては現在まで続く北方領土返還問題の始まりとなりました。

しかし、このヤルタ会談は、視点を変えると様々な出来事の始点ともなっているのです。

2005年の5月9日は、ロシアにとっては独ソ戦争戦勝60周年という節目の特別な年で、モスクワの中心である赤の広場では盛大な式典が挙行されました。同式典には小泉首相ほかブッシュ米大統領、胡錦濤中国国家主席、盧武鉉韓国大統領、アナン国連事務総長ら50以上の国と国際機関の首脳が集い、ソ連時代を彷彿(ほうふつ)とさせる軍事パレードが行われました。

しかし、ブッシュ米大統領はこの独ソ戦争戦勝60周年記念式典への出席でモスクワを訪れる前にバルト三国の一つラトビアを訪問し、東西冷戦の原点ともいわれる「ヤルタ合意」を強く批判する演説をしているのです。

5月7日にラトビアで行われたブッシュ大統領の演説の要旨は、「ドイツの多くでは、敗北が自由につながった。中東欧の多くでは、勝利は別の帝国の冷酷な政治をもたらした。欧州での対独戦勝利はファシズムの終結を印(しる)したが、抑圧は終わらなかった。」「ヤルタ合意で強国同士が協議した結果、小国の自由が犠牲となった。しかし、安定のために自由を犠牲にした結果、欧州に分裂と不安定をもたらした。」と語り、対独戦勝利は中東欧諸国にとってはソ連・共産主義による「抑圧」の幕開けにすぎず、米国を含めた強大国が世界秩序の維持を掲げて小国の運命をもてあそんだことを「史上最大の過ち」と振り返ったのです。

「ヤルタ」をめぐるのは、米国内では保守・リベラル両派の間で見解が分かれ、いまだに国としての評価は定まっていないうです。

ブッシュ大統領のヤルタ批判は、米国内では共和党の伝統的な“反ヤルタ観”の延長線上にあると見なされているようです。

共和党及び保守派は、死期が近づいていた民主党のフランクリン・D・ルーズベルト元大統領(ヤルタ会談の二カ月後に死去)にはソ連のスターリンに対抗する余力はなく、結果的にソ連に「東欧を売り渡した」と主張。ルーズベルト氏の後継者トルーマン氏に対しても共和党側は、民主党政権の対ソ弱腰外交が共産主義陣営の拡大を招いてきたと批判しています。

一方、民主党及びリベラル派は、ヤルタ合意がなされた1945年2月時点では、ポーランドなど中東欧はソ連軍の管理下にあったので「ヤルタ合意」は現状追認にしか過ぎない。東欧からソ連を排除するためには新たな軍事衝突が避けられず、当時の米国にとって「現実的な選択肢ではなかった」という見方のようです。また、ヤルタにおける米英ソ各国首脳の合意内容には、ナチスドイツから解放された国々で民主政権樹立をサポートすることが盛り込まれており、「スターリンがそれを無視したのが問題」という主張もあるようです。

ヤルタ会談でのソ連の対日参戦の密約についても、保守・リベラル双方で評価が異なります。保守派は、米国はソ連なしでも対日戦争に勝利できたと強調しており、ソ連に対日参戦を許したことで「中国と北朝鮮の共産化に道を開いた」と批判しています。

一方、リベラル派は、会談が行われた1945年2月当時、敗戦濃厚とはいえナチスドイツはまだ存在しており、対日戦に関しても原爆はまだ完成しておらず、米軍には多大な犠牲が強いられる可能性が残されていたとして、ソ連と対日参戦の密約を結んだことは「国益にかなっていた」と主張しています。

今回のブッシュ大統領のヤルタ批判演説は、第二次ブッシュ政権の外交政策の最重要テーマ「自由拡大」「圧政終結」にその主眼があるようです。つまり、第二次大戦末期から戦後にかけて、ソ連に譲歩したことで共産主義の伸長を許し、長い冷戦のきっかけをつくってしまいました。また、中東の独裁政権に妥協し続けたことで、9・11米同時テロを誘発してしまいました。そうした「過去」を教訓にして、われわれは今、中東民主化のために立ち上がらなければならない、とブッシュ大統領は訴えたようなのです。なお、この演説はロシアでの独ソ戦争戦勝60周年招待に先だって、ロシアのソ連化に対する牽制球としての高度な政治的メッセージとも見られています。

大変メッセージ力のある演説だと私は思いました。そして、このようなタイプのメッセージ力が日本の外交の課題なのだとも思いました。

付録

タイ国鉄製作の泰緬鉄道の話の紹介。英文のみを掲載しました。下段に、私の翻訳を添付しておきました。

<タイ国鉄製作の泰緬鉄道の話>

(表紙)

Construction of Military Railway Connecting Thailand with Burma During the Great East-Asia War

(1P) 写真

Historic Bridge over Present Kwai River

(3P)

Construction of Military Railway Connecting Thailand with Burma During the Great East-Asia War

During 2nd World War, Japanese army entered into Thailand on the 8th December B.E.2484(A.D.1941) with the intention of invading Burma, a British Colony.

The battle between Thai soldiers and Japanese invaders flared up in various terrains.

However, after serious negotiations, the two governments could come to terms.

The Japanese army was allowed to stay in Thailand, invaded Burma and allowed Thai Government to build two railways into Burma for transporting war materials.

(4P) 写真

Banpong Station The Starting Point for Pedestrians and Commencement of Railway construction Thailand-Burma.

Photo Taken in September A.D.1945

(5P) 写真

Konkoita Station Thailand

Photo Taken on 25th October A.D.1943

(5P)

The first railway was from Chumporn through Kraburi, Khao Fachi ending at La-un Canal of Ranong Province, the distance was 90 kilometers.

The responsibility of Thai side was limited to Chumporn Station only.

The rest belonged to the Japanese side.

The construction was started in June B.E.2486(A.D.1943) and completed in November of the same year.

The second railway was from Nong-Pla-Dook District-Kanchanaburi Province, passing through Three-Pagodas check-point with the distance of 303.95 kilometers, later it was called "Death-Railway" connecting with Tanbee-Usayat on Burmese territory with 111.05 kilometers railway, totalling 415kilometers.

The agreement between Thailand and Japan on the construction of this railway made on the 16th September B.E.2458(A.D.1942) stated that Thailand will provide cooperation and help in connection with provision of land on which the rail and other constructions are built and the provision of construction material and equipments.

The construction of railway is the responsibility of Japanese Army, while Thai side will help hiring workers and engineers as much as it can do.

(7P)

Constructing of Death Railway

The actual construction commenced in October B.E.2485(A.D.1942) by the Japanese Army having Thai Railway Department providing facilities.

The starting point was at K.M.64+196 of Nong-Pla-Dook Station to Kanchanaburi Station, the distance was about 50 kilometers, resting on flat land throughout.

But from Kanchanaburi to Waterfalls station, the land starts to rise along the hills and mounts, the highest one is called "Devil Cave" from which the land starts to slope down through Tha-Khanoon village, Thong-Pha-Phum District with the distance of 88 kilometers.

From this point of the railway runs along side the watercourse called Kwae-Noi to Nikeh village of Sankhlaburi Sub-district then! right to the border line with Butma at Three-Pagodas check-point with the distance of 303.95

kilometers.

(注記) "Devil Cave"

During Great East Asia War, the Japanese Army had used it as secret meeting room, because of its secrecy and peaceful condition.

(9F)

The construction on Thailand side by Thai workforce were composed of earth work, buildings and entrances to five stations and putting up telegraph poles and hanging up the wires under the supervision of Japanese soldiers.

While another group of Japanese soldiers took care of bridges construction and laid out rails of various sizes, such as 40, 50, 75 and 80 pound per yard of rail complete with accessories for fixing and controlling the rail.

These supplements came from Burma and Malaya.

The Japanese soldiers laid the rails from Nong-Pla-Dook to Three-Pagodas check-point.

While on Burma side, the Japanese soldiers have built the railway and laid the rails from Tanbee-Usayat Station (situated below Maramaeng Town about 55 kilometers) toward our Three-pagodas check-point, because they have already seized the Maramaeng Town and connected all the railways in December B.E.2486(A.D.1943).

The Japanese Army wanted all the construction works be completed as soon as possible to facilitate the movement of soldiers and the transportation of armaments.

Therefore, several construction and rails laying were started in various places at the same time.

Then all rails are connected at the final stage.

Some distance of the railway got to go through dense jungle mountains abundant of diphtheria, workers and prisoners of war died of this disease in great number, hence the name of "Death Railway" was adopted.

However, the 415 kilometer railway starting from Nong-Pla-Dook Station in Thailand to Tanbee-Usayat Station in Burma was completed in B.E.2486(A.D.1943) within one year time, employing about 60,000 workers from

India, Burma, Malaysia, Indonesia, China and Thailand including prisoners of war from England, Holland and Australia.

(11P)

The Construction of Bridge by Japanese Army

The construction of Thailand-Burma Bridge was to serve the purpose of war, by military tactics.

It must be completed as soon as possible, therefore most of the parts were made of woods.

It was time saving procedure.

There were all together 395 bridges on Thailand side including the big one which ran across Kwai Yai River at Ban Tha Makham, called "Across Kwai River Bridge"

(13P)

It was the work of the prisoners of war, it was a low bridge, made of wood, and situated about 100 meters south of present iron bridge.

The construction was started around end of November B.E.2485(A.D.1942) during the low tide season of the river and completed around beginning of February B.E.2486(A.D.1943).

The rail was laid by British prisoners of war, starting from Nong-Pla-Dook Station and reached this bridge on 26th January B.E.2486(A.D.1943).

From this point they continued laying the rail up to K.M. mark No.100, which was situated between Tha-Kilen and Ai-Hit Station, on 22th March B.E.2486(A.D.1943).

Presently it is Loom-Soom car park.

(15P)

Later on, the Japanese Army built another permanent bridge made of steel platform on reinforced concrete pillars.

The platform was composed of 11 spans of 20.80 meters long each.

Above the water way.

From the western bank of the river, the bridge was changed to wood and started building in February B.E.2486(A.D.1943) and completed in September B.E.2486(A.D.1943) taking about seven months.

After the new steel bridge was put into use, the Thai Government asked the Japanese Army to remove the wooden bridge, because it obstructed the traffic.

The Japanese Army removed it on the 18th February B.E.2487(A.D.1944).

(17P)

Air Strike

From the 3th November B.E.2487(A.D.1944), the bridge across River Kwai Yai was bombed several times by the Allies, the one took place on the 28th November B.E.2487(A.D.1944), the middle span was destroyed.

But the Japanese Army had foreseen this danger and found the way out by building diversion bridges to the water way.

The transport train parked on one side of the river, the armaments were transported from one side of the river to another side by boats and loaded it into another waiting train.

(19P)

Peace

On the 6th August B.E.2488(A.D.1945) at 8:45 hrs (Japanese time) the United States of America's Air Force dropped a most destructive bomb called "Atomic Bomb" on Hiroshima City and killed about 220,000 human lives and other living things.

On the 9th August B.E.2488(A.D.1945) at 11:00 hrs (Japanese time) the United States of America's Air Forces dropped the 2nd Atomic Bomb on Nagasaki City and destroyed about 40,000 human lives.

On the 15th August B.E.2488(A.D.1945) at 12:00 o'clock sharp (Japanese time) the Tokyo Broadcasting station declared an announcement of the Emperor of Japan, admitting the defeat without conditions to the Allies and ordered all Japanese soldiers to completely lay down their arms.

(21P)

The great East Asia War started on the 7th December B.E.2484(A.D.1941) and ended on the 15th August B.E.2488(A.D.1945).

Starting from the 19th August B.E.2488(A.D.1945) the Allies Army started disarming Japanese soldiers in Thailand and discussed with Thai Government on all subjects.

As regards the construction of this railway, the Japanese had forced the prisoners of war to build the railway and many became sick and died.

The United Nations want to build two cemeteries, one at Tambon Donrak, Muang District, Kanchanaburi Province, containing 6,982 deads and another one at Khaopoon (on the west side of Kwai Noi River) Muang District, Kanchanaburi Province, containing 1,740 deads, total number of deads were 8,722.

In Burma also, a cemetary was built containing the deads as well.

(23P)

When the war ended, Royal State of Railway (former name before changing to State Railway Of Thailand) from the 1th July B.E.2494 (A.D.1951) had received budget for repairing the damaged steel bridge, the span 4, 5 and 6 were damaged since B.E.2493-2495 (A.D.1950-1952).

On that reconstruction, mid-river pillars No.5 and 6 were omitted and replaced with two steel spans and replaced the outer wooden span with 6 steel spans of 15.35 meters each putting the total length of the bridge at 322.90 meters.

(25P)

Beside the said over Kwai River Bridge there was another bridge called "Cave Krachair Bridge" at K.M.174+173, the another bridge which was recorded in the history, because it was a wooden bridge, built on limited space laying along a mountain cliff on Kwai Noi River about 340 meters long.

Laying the rail on limited space and lacking required quality control system, accidents of the train being derailed but no serious injuries have become quite a common gossip, thanks to the Japanese soldiers who put some new engineering techniques to it.

The gossip slowly disappeared.

In the years B.E.2534-2535 (A.D.1991-1992) the State Railway of Thailand has reconstructed the whole system by using reinforced concrete structure no more wooden parts existed.

The structure remains strong and usable until this day.

(27P)

Taking Over the Railways and Demolishing Some Parts

After the war ended in August B.E.2488 (A.D.1945) with the Japanese accepting the defeat.

This railway had become an asset of the Allies.

The British Army demolished to railways starting from the Thailand-Burma demarcation line with a distance of 3.95 kilometers.

As for the remaining 300 kilometers long, the British Government offered to sell the railways, wheels, rollers, materials, instruments and factories to Thai Government for 1,500,000 Pounds.

But after the negotiation, the price was reduced to 1,250,000 Pounds.

The Royal State of Railway took charge of this railway in B.E.2490 (A.D.1947).

After putting a due consideration to the economy, transportation and other aspects, the State Railway of Thailand decided to demolish the railways from the demarcation line to Waterfalls Station, the work was started from October B.E.2494 (A.D.1951) to February B.E.2497 (A.D.1954).

While the remaining 130 kilometers rails up to Nong-Pla-Dook Station must be upgraded to permanent standard and put into service between Nong-Pla-Dook and Kanchanaburi Stations on the 24th June B.E.2492 (A.D.1949) and between Kanchanaburi and Wangpoh Station on the 1th April B.E.2495 (A.D.1952) and the last stretch from Wangpoh to Waterfalls Station on the 1th July B.E.2501 (A.D.1958).

<タイ国鉄製作の泰麵鉄道の話> ※私の翻訳です。

(表紙)

大東亜戦争中にビルマとタイを結ぶ軍用鉄道の建設

(1P) 写真

現在のクワイ川に架かる歴史的な鉄橋

(3P)

大東亜戦争中にビルマとタイを結ぶ軍用鉄道の建設

1941年12月8日(B.E.2484)、第2次世界大戦中、イギリス植民地であるビルマを侵略するために日本の軍隊がタイに入ってきました。

各地で日本の侵略者とタイ軍との戦闘が勃発しました。

しかし、両国は重要協議を経て話がまとまりました。

日本軍は侵略されたビルマやタイに留まる許可を受け、タイ政府から軍需物資輸送のためにタイとビルマ間の鉄道建設の許可を受けました。

(4P) 写真

バンポン駅。歩行者のための出発点。そして、タイとビルマ間の鉄道建設の開始場所。

西暦 1945 年 9 月に撮影された写真

(5P) 写真

タイのコンコイタ駅

西暦 1943 年 10 月 25 日に撮影された写真

(5P)

最初の鉄道は、チュムポーンからクラブリを通過してラノン県のカオファチのラウン運河までで、距離にして90kmでした。

タイ側の責任はチュムポーン駅だけに制限されました。

残りは日本側に属していました。

建設は1943年(B.E.2486)6月に始まり、同年11月に完成しました。

第2の鉄道は、カンチャナブリ県のノンブラドック地区から、303.95kmの距離にあるスリーパゴダパスのチェックポイントを通過し、そこから111.05kmの鉄道によってビルマ領のタンビューザヤットへ接続される全長で415kmになるその鉄道は、後に「死の鉄道」と呼ばれました。

この鉄道建設におけるタイと日本との間の協定は、1942年(B.E.2458)9月16日に結ばれました。タイは、土地の供給、そこにレールおよび他の構造物の建設、および建設材料と機器の供給などについての協力の提供という内容でした。

鉄道建設は日本軍の責任ですが、タイ側はできる限り多くの労働者とエンジニアを雇用しなければなりませんでした。

(7P)

死の鉄道の建設

実際の建設は、タイ鉄道部門提供設備を持っている日本軍によって1942年(B.E.2485)10月から開始されました。

出発点はカンチャナブリ駅まで64.196kmのノンブラドック駅で、その間の距離は約50kmの平らな土地でした。

しかし、カンチャナブリ駅から滝駅(現在のサイヨーク・ノイ駅です)までは土地は丘や山に沿って登り始め、最も高いところはタ・カノーン村を通過して下がり始めるところにある「悪魔の洞窟」と呼ばれるところで、トンパム地区から88kmの距離のところでした。

鉄道はクワイ・ノイ川沿いに走ってサンクラブリ(副)地区のニケ村へ、それから303.95kmのスリーパゴダパスのチェックポイントでビルマ国境を右へ曲がります。

(注記)悪魔の洞窟

大東亜戦争中、日本軍はその秘密性および平和で静かな環境のために秘密の会議室としてそれを使用しました。

(9P)

タイの労働力によるタイ側の建設は、日本の兵士の監督の下で、建物や5つの駅の入り口、電柱の建柱、そして電話線の切り離しなどの仕事とされました。

同時に、他の日本兵士のグループは橋の建築の準備や、1ヤードあたり40, 50, 75, 80ポンドなどの様々なサイズのレール、及びレール敷設のための付属品の用意を始めました。

これらの補足はビルマとマレー半島から運ばれました。

日本兵士は、レールをノンブラドックからスリーパゴダパスのチェックポイントに運びました。

その間ビルマ側では、日本軍はタンビューザヤット駅からスリーパゴダパスのチェックポイントへ向かってレールを置き(タンビューザヤット駅から約55kmのマラマエン町に置いた)、鉄道敷設工事をしていました。すでにマラマエン町は日本軍の支配下にあり、そして1943年12月にはすべての鉄道が接続しました。

日本軍は、できるだけ早くすべての建設工事を完成させ、兵士の移動や軍需物資の移送を容易にさせたかったのです。

従って、様々な場所で同時に建築工事やレールの敷設工事が始められました。

そして、すべてのレールは最終的段階で接続されました。

鉄道のいくつかの区間はジフテリアの蔓延する濃いジャングルを沢山通り抜けるために、大勢の労働者や戦争捕虜の人々はこの病気のために死亡しました。それゆえ、「死の鉄道」という名前が採用されました。

このようにして、タイのノンブラドック駅からビルマのタンビューザヤット駅までの415kmの鉄道は、1943年に完成しました。イギリス、オランダ、およびオーストラリアからの戦争捕虜、及びインド、ビルマ、マレーシア、インドネシア、中国、およびタイからの約60,000人の労働者が雇用されました。

(11P)

日本軍による橋の建築

タイとビルマを結ぶ鉄道の建設は、軍の戦術によって戦争の目的に叶う必要がありました。

できるだけ早く完成させなければならないため、従ってほとんどは木材で作られました。

それは時間を節約するためでした。

タマカム町でクワイ・ヤイ川を横断する「クワイ川鉄橋」は、タイ側の395の橋の建築と一緒にあった。

(13P)

それは戦争捕虜の仕事でした。それは木材で作った低い橋でした。そして、現在の鉄橋の約100m南に位置していました。

建築は乾季の間、川の水量が少なくなる1942年の11月末頃から始まり、1943年の2月の初め頃に完成しました。

レールは、ノンブラドック駅から始まり、1943年1月26日にこの橋に到着し、イギリスの戦争捕虜の人々によって敷設されました。

このポイントから、彼らはレールにK. M. マークを取り続けました。NO. 100のK. M. マークは、1943年3月22日にタキレン駅とアイヒット駅の間に置かれました。

現在では、それはローンソーン駐車場にあります。

(15P)

後に日本軍は、鉄筋コンクリート橋脚の上に鉄橋で作られた別の永久的な橋を建築しました。

橋梁はそれぞれの長さが20. 8m、11のスパンにより構成されていました。

水路の上で。

川の西の土手から、橋は木製に交換された。そして1943年2月に建設が始まり、7ヶ月を要して1943年9月に完成しました。

新しい鉄橋が使用開始後、タイ政府は日本軍に木製の橋が交通を遮断しているので撤去するように頼みました。

日本軍は、1944年2月18日にそれを撤去しました。

(17P)

空襲

1944年11月3日からクワイ川鉄橋は連合国によって数回攻撃されました。1944年11月28日には中間スパンが破壊されるという事態が起きました。

しかし、日本軍はこの危険を予知し、転換橋を水路の外側に建てる方法を見つけました。

輸送列車は川的一方の側に駐車し、軍需物資は川のもう一方の側へボートにより輸送され、別の待っている列車に荷物は積み替えられました。

(19P)

平和

日本時間で1945年8月6日の8時45分に、アメリカ合衆国空軍は「原子爆弾」と呼ばれる最も破壊的な爆弾を広島市に投下し、220,000人の人命と他の生物の生命を奪いました。

日本時間で1945年8月9日の11時ちょうどには、アメリカ合衆国空軍は第2の「原子爆弾」を長崎市に投下し、40,000人の人命を奪いました。

日本時間で1945年8月15日の12時ちょうどに、東京放送局は同盟国に無条件で降伏するという日本の天皇陛下の告知を宣言しました。そして、すべての日本兵は完全に戦闘を止めるように命じられました。

(21P)

大東亜戦争は1941年12月7日に始まり、1945年8月15日に終わりました。

連合国軍はタイ国内の日本兵の武装解除を1945年8月19日から開始し、すべてのテーマについてタイ政府と協議しました。

この鉄道の建設で、日本軍は鉄道建設を戦争捕虜に強制し、多くは病気になり、そして死にました。

国連は2つの墓地をつくること望みました。1つはカンチャナブリ県ムアン地区のドンラク町で死者6982人を収容し、もう1つはカンチャナブリ県ムアン地区のカオープン(クワイ・ノイ川の西側)で死者1740人を収容し、死者数の合計は8722人でした。

ビルマにも墓地がつくられ、上記以外の死者が収容されました。

(23P)

戦争が終わった時、1951年7月1日から王国鉄道(タイ国鉄に変わる前の名前)は、1950～1952年以来損傷していたスパン4, 5, 及び6の損傷を受けた橋梁を修理するための予算を受取りました。

その復元については、川の中央のNO. 5とNO. 6の橋脚が省略されて2つの橋梁とされ、中心部から離れた外側の木製スパンも15.35mの6つの鉄製スパンとそれぞれ交換され、橋の全長は322.90mとなりました。

(25P)

クワイ川鉄橋の話としては、歴史の上で記録されているもう1つの橋「洞窟のクラチェア橋」と呼ばれる別の橋がK. M. 174+173にありました。それは全長約340メートルの木製の橋で、クワイ・ノイ川沿いの山肌を削る崖の制限されたスペース

に建設されていた。

制限されたスペースにレールを置きながら、そして必要な品質管理システムを欠きながら、いくつかの新しいエンジニアリングテクニックを用いた日本兵のおかげで、列車の脱線事故、しかし無重傷の事故、それはまったく一般的なゴシップになりました。

ゴシップはゆっくり消えました。

タイ国鉄は1991～1992年には、存在していた木製部分はすべて鉄筋コンクリート構造に全体のシステムを改築しました。

その構造は強さを維持し続け、今日まで使用可能です。

(27P)

鉄道の引き継ぎと、いくつかの部分の撤去

日本の敗戦で戦争が1945年8月に終わった後、この鉄道は連合国の財産になりました。

イギリス軍は、タイとビルマの国境線から始まる3.95kmの距離で鉄道を撤去しました。

残る長さ300kmについて、イギリス政府はタイ政府に、鉄道、ホイール、ローラー、素材、機器、および工場を1,500,000ポンドで売ることを申し出ました。

しかし、協議後の価格は1,250,000ポンドに減らされました。

王国鉄道は1947年にこの鉄道を買い取りました。

交通や色んな状況を経済面から考慮した後、タイ国鉄は国境線から滝駅までの鉄道を撤去することを決めました。撤去作業は1951年10月から始まり、1954年2月まででした。

残り130kmの区間はノンプラドック駅まで永久的な標準にレールがアップグレードされることになり、ノンプラドックとカンチャナブリ駅の間は1949年6月24日にサービスが開始され、カンチャナブリとワンポー駅の間は1952年4月1日にサービスが開始、最後の区間であるワンポー駅から滝駅までは1958年7月1日にサービスが開始さ